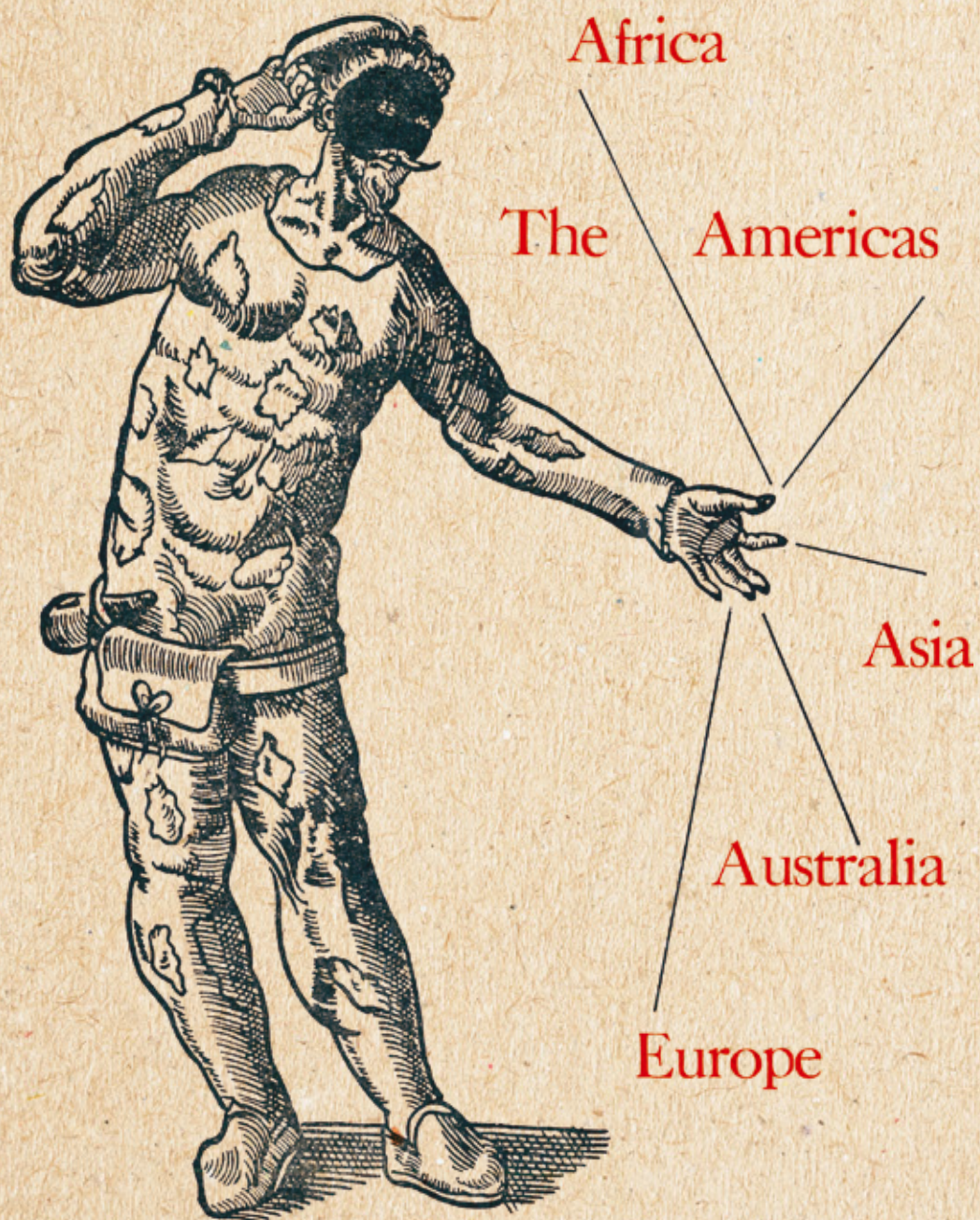


国際演劇協会 日本センター

復刻資料集

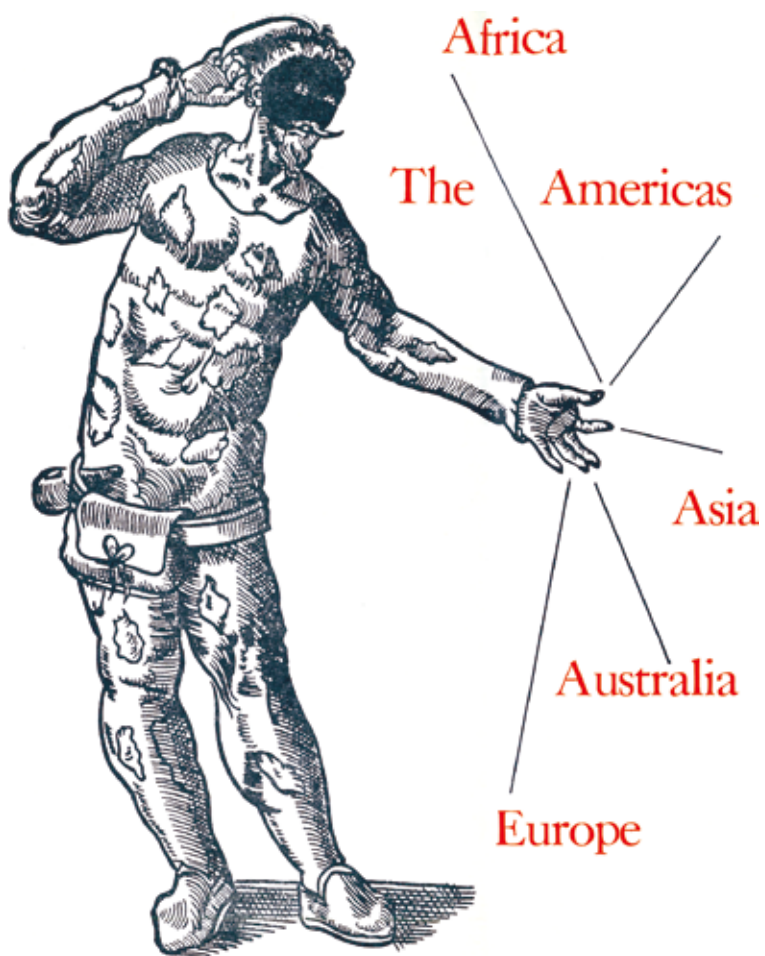
1951 ~ 1961



国際演劇協会 日本センター

復刻資料集

1951 ~ 1961



はじめに

このプロジェクトは、公益社団法人 国際演劇協会日本センターの活動の原点を知るための貴重資料をひもとき、日本センターの設立に関するテーマ探求&アンサーブックとなるような資料集を発行するプロジェクトです。

1948年に設立されたユネスコ傘下の国際演劇協会
(ITI: Institut International du Théâtre / International Theatre Institute) は、
「舞台芸術を通じた平和構築」を目指す、舞台芸術関係者の世界的ネットワーク
(本部事務局=上海・パリ) で、国際演劇協会日本センターは
このネットワークの中で活動する80を超える各国センターのひとつです。

2023年には、国際演劇協会日本センターが企画・編集・発行する
『国際演劇年鑑』(1973年3月創刊) が創刊50周年を迎えました。
これを機に、私たち国際演劇協会日本センターのスタッフは、
当センター設立のそもそものルーツを探り、設立の経緯を詳らかにするとともに、
現在まで続く組織の存在と活動の意義をより明確にしたいと考えました。

当センターには、団体が創設された1951年当時の世界の演劇状況と日本国内の演劇人たちの
動静、政府(外務省、文部省)との折衝の様子などを記録した貴重な資料が保存されています。
これまでほとんど誰の目にも触れることのなかったこの資料群をもとに、戦後から現代に至るまでの
日本の国際演劇交流の創始と展開を位置づけ、
その源流を明らかにしようとするのが、このプロジェクトです。

プロジェクト第1弾は、ITI日本センターが発行する会員向けの会報「ITI通信」を中心に、
設立の趣旨、ITI日本センターが黎明期の舞台芸術の国際交流に果たした役割をひもときます。

私たちは、このプロジェクトによって、第二次世界大戦以降の「世界の中の日本演劇」の在り方を
検証する試みの小さな第一歩を、ここから始めたいと考えています。

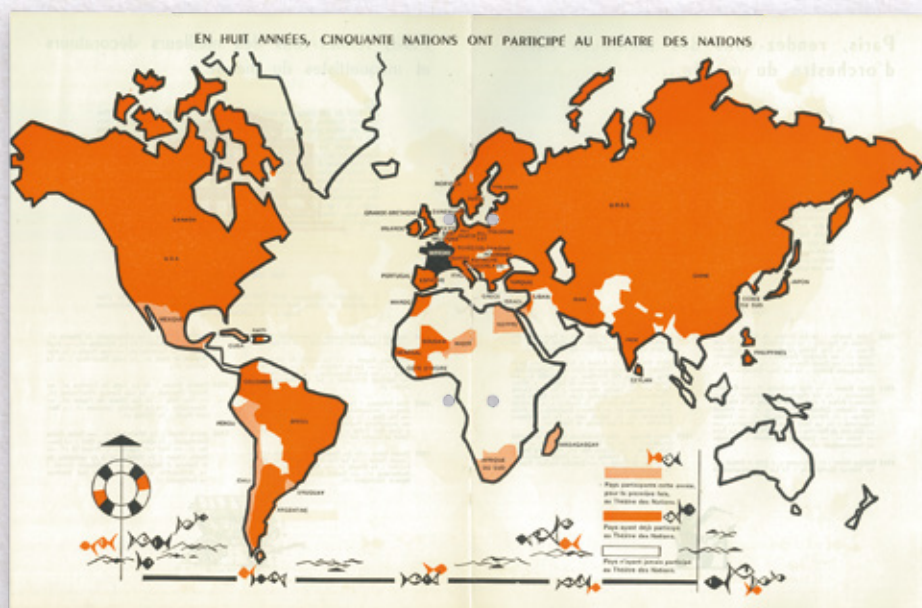
2025年8月15日

戦後80年目の夏に

公益社団法人 国際演劇協会日本センター

Contents

- 04 日本センター設立を促すITI本部からのレター
- 05 「ITI通信」0号(1951年5月頃発行)
- 11 ジャン・アヌイ『城への招待』著作権に関するレター
- 12 「ITI通信」1号(1951年11月頃発行?)
- 14 世界各国の新作情報を紹介する小冊子『世界初演』
- 16 「ITI通信」2号(1951年12月15日発行)
- 20 reference ITI日本センター設立時の役員・評議員
- 21 日本の新作も掲載された季刊誌『世界演劇』
- 24 「ITI通信」3号(1952年3月1日発行)
- 28 第1回「国際演劇月」リーフレット(1952)
- 32 「国際演劇月」開催を祝う海外の名優からのメッセージ
- 35 ITI日本センター編『Japanese Theatre PICTORIAL』
- 41 能楽初の海外公演のきっかけをつくった口上書
- 42 「ITI通信」13号(1954年8月25日発行)
- 43 能楽ヴェネツィア・ビエンナーレ公演プログラム(1954)
- 44 国際演劇祭「テアトル・デ・ナシオン」リーフレット(1957)
- 45 ITI発行『世界演劇』の「テアトル・デ・ナシオン」特集号(1958)
- 46 7回分の演劇祭を紹介するパンフレット(1961)
- 47 テアトル・デ・ナシオンに参加したアーティストたち
- 48 『国際演劇協会日本センター 小史と名簿 1961』(1961)



一九六一年当時の国際演劇協会のネットワーク

フランス・パリの国際演劇協会本部が企画・運営を主導し、世界の国々が参加した国際演劇祭「テアトル・デ・ナシオン」。第八回目の一九六一年に作られたパンフレットには、参加国を表す世界地図が掲載されています。

濃いオレンジが前年までに参加した四十カ国、薄いオレンジがこの年初めて参加する七カ国を示しています。第一回に参加した日本は濃いオレンジで塗られています。

INTERNATIONAL
THEATRE
INSTITUTE



INSTITUT
INTERNATIONAL
DU THÉÂTRE

Unesco House
19 Avenue Kléber
Paris XVI

ITI/Cor/1796
April 10th, 1951

Dear Mr. Kitamura,

Thank you for your letter of March 16th.

In fact, Japan is not yet a member of Unesco or UNO, and other general questions must be settled, but we can prepare the adhesion of Japan to the ITI, so as to shorten the delays.

The Public Relations Officer of ITI, Mr. Jean Keim, has left precisely for Tokyo with a mission given to him by Unesco: an inquiry on cinematography, theatre, etc.

I have given your address to Mr. Keim, who will contact you in Tokyo.

The adhesion of non-members of Unesco is no more a rigid rule, and, as I said above, we have the right of preparing actively the admission of Japan.

All the persons concerned with the theatre, i.e. playwrights, actors, directors, decorators, electricians, workmen, etc. can and must be members of the future National Japanese Centre of the ITI. And I personally hope very much that you will send me good news very shortly on the state of preparation of your Centre.

With best personal regards,

Yours sincerely,

André Josset
Secretary General

Mr. Kibachi Kitamura
618 Izumicho
Suginami-Ku
Tokyo
Nippon

日本センター設立を促すITI本部からのレター

ユネスコ、国連加盟より
早かった日本のITI加盟

ITI日本センター設立の二カ月前、ITIパリ本部の事務局長アンドレ・ジョッセ（一八九七～一九七六）から、ITI日本センターの未来の理事長、劇作家・演出家の北村喜八へレターが届きます。ITI本部のレターパッドの右上に印字された日付は一九五一年四月十日。ジョッセはこの手紙で「日本はまだ国連にもユネスコにも加盟していないが……」と前置きしつつ、ITI日本センター設立の準備を進めるよう北村に促しています。

そして六月一日から八日にノルウェーのオスロで開催された第四回ITI世界大会で、日本の加盟が正式に承認されました。日本のユネスコ加盟はそのひと月後の一九五一年七月二日、そして国連加盟は五年後の一九五六年十二月十八日なので、ITIはユネスコに先立って日本が国際社会に復帰する場となったと言えるかもしれません。

ITI日本センター設立趣意とユネスコ憲章

ITI日本センターに残る最古の公式文書のひとつに、会報の「0号」とでも言うべき書類があります。そこに掲載された日本センターの「創立趣意」では、ユネスコを

「国際的理解に立脚する『人類の知的道義的連帯』に基礎をおく永続的な平和をつくり出す」とする「国際的文化活動」と定義し、「演劇芸術は人類に共通せる表現であ

り、世界人民の広汎な集団を結びつける影響と力を持つてゐる」(ITI憲章より)ので、「演劇こそこの(ユネスコの)理念遂行の一つの強き力となりうる」と書かれています。

「ユネスコ憲章」の前文は「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と宣言しています。第二次世界大戦の敗戦国で

ある日本の演劇人が、平和を求める世界の動きにいち早く応答し、協働のためのネットワークづくりを目指そうとする強い思いが表現されています。

INTERNATIONAL
THEATRE
INSTITUTEINSTITUT
INTERNATIONAL
DU THEATRE

創 立 趣 意

国際演劇協会
ITI
日本
センター

世界の平和は各国政府の政治的経済的協定によつても可能であらうが、それにもまして永久に持続しない平和は人類の知的道義的結合においてのみ確保されるであらう。

ユネスコは国際的理解に立脚する「人類の知的道義的連帯」に基礎をおく永続的な平和をつくり出すとする国際的文化活動であつて、現在における最も重大な問題に立ち向つてゐる。

ITIの組織はユネスコと緊密な連絡のもとに、このユネスコの大なる課題と崇高なる理念に演劇の分野において答へようとするものである。

「演劇芸術は人類に共通せる表現であり、世界人民の広汎な集団を結びつける影響と力を持つてゐる」(ITI憲章)が故に、演劇こそこの理念遂行の一つの強き力となりうるであらう。

日本がこの組織に参加することは、日本演劇が国際的につながるだけでなく、日本文化そのものが世界に結ばれる重要な一筋の糸をもつことになる。

現代にあつてはいかなる国家も結核し激動する社会情勢において一國として孤立的ではありえない。日本もその文化も国際的交流の中に自らをおくことによつてのみ世界と歩みを共にし、おのれを発展せしめることができる。

日本演劇がITIの組織に結ばれることは日本演劇の立脚すべき世界に共通した地盤を見出すことである。それは演劇における我が交流をとおして日本演劇を質的に向上せしめると同時に、演劇に対する国民の関心を広範囲にわたつて高め、さらに引いては演劇をとおして平和の基礎としての人類の精神的結合に役立たんとするものである。

従つてITI日本センターはいかなる意味においても演劇の「統制機関」ではない。それは国際的の機構を通して、国内の演劇諸活動になんらの強制力を含めぬ協力ななすところの文化推進体である。従つてそれはまたなんらの政治活動に干渉しない。しかしそれは文化運動としての面をもつ限りにおいて、幅の広い平和運動に結びつき、さらにその根底において人権尊重、自由擁護の精神に繋がれるものである。

ITI日本センターはこのような性格をもつが故に、対外的にはバリ国際本部を通して世界各国のセンターと結ばれ、国内的には、一方において文化の対外組織として日本ベンクラブその他と提携し、一方において国内の演劇諸団体と密接な連携を保ち、財政の許すかぎり広汎な活動をなさんとするものである。

ITI日本センターの設立は、日本演劇にとつてのみではなく、国家にとつて大なる急務であると信じるので、日本演劇人各位の新旧演劇のいづれにあるを問はず、これに対する熱意と協力を希望してやまない。

「国際演劇協会」

(ITI)の輪郭

「インタナショナル・シアター・インスティテュート」(略称ITI)は、ユネスコを生みの親として生れた演劇の国際組織である。

大戦終結の翌年である一九四六年の冬、パリにおけるユネスコ会議において演劇の国際的結合の組織をつくることが討議され、翌一九四七年の七月、パリのユネスコ会議においてその準備会がもたれた。それにはフランスの劇作家ジュール・ロマン、演出者にして俳優であるジャン・ルイ・バロ、イギリスの劇作家J・B・プリーストリー、演出者ティム・ガスリー、オールド・ヴィクトリアの首領部の一人であるユニウス・リリーズ、アメリカの演劇評論家ロザモンド・ギルダ、女優、女流劇作家リリアン・ヘルマンなど、世界各國の著名な演劇人が集まつた。かくて、翌一九四八年第一回大会がブライッドで開かれ、ユネスコと密接な関係をもつた。それと並行して設立した国際組織としてのITIが成立したのである。第二回大会はチェリグ、第三回はパリ、そして本年度の大会はイブセンの祖国であるノルウェーのオスロで開かれる。

現在この組織に加入している国は三十三、そのうち演劇センター(中心部)の結成されている国は二十五、本年度大会ではその数の増加することが予想される。ソヴェトは加入していない。

各国センターはその國の事情に応じて組織されているようであり、なんらかの形式で政府と結ばれているが、専門的な組織としての自主性をもつて活動している。会の運営は毎年大会において選出せられた十一センターの代表による十一人の委員によつて行はれている。

ITIは演劇の国際組織として世界的規模において広汎にして多様な活動を開始している。

ITI日本センターの創立世話人・川端康成

「日本センター設立の経過」にあるように、日本ペンクラブ代表としてエディンバラの国際ペン大会に参加した北村喜八は、パリでITI本部事務局長（書記局長）のアンドレ・ジョウ

セに会い、日本センターの設立を直々に要請されます。設立世話人の筆頭は、当時の日本ペンクラブ会長で、「伊豆の踊子」「雪国」など、「日本人の心の精髓を優れた感受

性で表現する、その物語の巧みさ」で日本人初のノーベル文学賞（一九六八）を受賞した作家の川端康成（一九〇九～一九七二）*。北村と川端は東京帝国大学英文科の同級生

で、帝大劇研究会の試演会では北村が劇作・俳優を、川端が会計係を務めるなど、旧知の仲でした。友人の北村からの設立世話人を依頼する電話に、川端は快諾します。

世話人にはほかに、演劇学者で当時日本演劇学会会長を務めていた河竹繁俊（一八九一～一九六七）、劇作家・小説家の久保田万太郎（一八九一～一九六三）が名を連ねています。

J・B・ブリーストリー

「国際演劇協会」

「国際演劇協会」(I・T・I)は演劇人にとつてけだし多大の価値をもつものであらう。その主要なものを二、三箇条に挙げてみよう。

先づI・T・Iは、次のやうな重要な情勢を数多蒐集し、且つ頒布する。即ち、すべての国にわたり、その新作戯曲、新上演について、その主要劇場の舞台面積、技術上の諸工夫、収容能力について、又I・T・I加盟国における著作権法、検閲規定、支払及び雇傭の方

法についてなどである。又I・T・Iは、劇団の四清な交流を妨げる多くの障礙を除去し、海外演劇団の輸送計画を促進し、通貨調整、関税の障礙を打破しようとする。更にI・T・Iの基礎が確立され、すべての国の演劇人が聯合した際には、祝典、展覧の催し

を行ひ、数ヶ国語で書かれた機関誌を発行し、演劇奨学金の制度を設け、新しい国々、優良劇団の組織に關して助言を与へ、著名劇団の海外旅行、必要ならば広く世界各国へ

I・T・I(インタナショナル・シアター・インスティテュート)は、ユネスコに關係を持つ、演劇の国際的組織として、戦後に結成され、すでに世界の活動をしております。昨年、北村喜八君が日本ペン・クラブの代表として渡欧の際、I・T・Iのパリ本部国際書記局長アンドレ・ジョウセ氏から、これの日本センターをつくる相談を受けました。北村君は帰国後、關係各方面の意向をたゞして、設立の必要と可能とをたしかめ、また国際本部からは日本も当然加入するものとして今年度の世界大会に代表派遣の招きがありました。

これは日本演劇、また広く日本文化が世界と結びつき流れあひ、意義深い組織で、たとへば日本ペン・クラブなどのように、國際的に文化活動の重要な団体として、舞台芸術各方面の協力によつて日本センターの設立を奨励する次第であります。

川端康成
(日本ペン・クラブ会長)

この両会議において演劇人の代表がいかに事務的に、思慮深く、又協力的であるかを見て非常に驚いたと、多くの人々が私に語ってくれた。しかしこれは少しも驚くには當らない。

演劇自体がその本質から言つて非常に共同的な芸術であるからである。戯曲のよき上演には、かなり多数の人が共通の目的を達するために協力することが必要である。劇作家、監督、演技者、装置家その他の技術者は、この緊密な、時には非常にデリケートな協力の条件を完全に知悉しているのである。彼等は又かなり高い程度の緻密な組織に馴れてもいる。といふのは、よい演劇は、複雑なその場

かぎりのやり方では上演出来ないからである。従つて演劇人が彼等の会議を成功裡に運んだのは驚くに當らない。そして終始会議に出席している人々が示すやうな例を、彼等も又示したのである。それ故、私は、I・T・Iがすでに立案している仕事のすばらしい計画を、充分実行出来るものと確信している。

このやうにI・T・Iの演劇人にとつての価値は大きい。だが演劇の制作には関与しないが、観客として演劇を享受(さう希望するのだが)する劇場外の人々にとつてはどうであらうか。

I・T・Iは、その人々にとつて何らかの価値をもつものだらうか、或は單に職業的組織に過ぎないだらうか。私の考へるところではその答は次の通りである。

親衆、すべての人の到るところにいる普通の人も、又多大の利益をうけとることであらうと。劇場に費するものが又親衆にも役立つ

日本センター設立の経過

一、昨年十月日本ペン代表として渡欧した北村喜八がパリにおけるI・T・I国際本部の書記局長アンドレ・ジョウセ氏と会見のさい、日本センター設立を要請され、資料を授けて帰る。

一、帰国後、北村喜八は、日本ペン・クラブ幹事会にてこれが設立について瞭解を求めむ。

一、「東京新聞」紙上において北村これが設立を提唱(三月十、十一、十二日)

一、日本センター設立についてC・I・E関係外務省文化課、文部省ユネスコ連絡課、同芸術課の意向をたゞす。

一、川端康成、河竹繁俊、北村喜八、久保田万太郎によつて日本センター設立のための世話人会を成る。

一、四月三日駐日ユネスコ代表部を通じてI・T・I第四回大会(オスロ)にオブザーヴァーを招致したる。

一、四月六日玄海社にて設立準備のための世話人会を開く。その席上、オブザーヴァー派遣の件、議題にのぼれど、九日文部省の弱腰にて同じ問題を協議する会あり軍機をされてそれへざる。

一、四月九日文部省芸術課において、演劇諸団体の代表集まる。久保田万太郎(日本演劇協会設立準備会)、河竹繁俊(日本演劇学会)、山田聖(新演劇人協会)、小宮登(都民劇場)、菅原草(実験劇場)、勝本清一郎(ユネスコ協力会)、北村喜八(日本ペン)、小宮次郎(河竹事後遺著)同席上I・T・I第四回大会日本オブザーヴァーとして、久保田万太郎推薦される。

一、四月十三日外務省会議室にて世話人の名において、日本センター設立のための第一回準備会をもつ。議長久保田万太郎。外務省文部省オブザーヴァーとして列席。日本センター設立の問題について、懇談的に協議し設立可決。

〈参考文献〉 羽鳥徹哉(1985)『川端康成』『日本大百科全書 6』pp.68-69. 小学館／進藤純孝(1976)『伝記 川端康成』p.487. 六興出版／川端康成(1982)『文科生の頃』『川端康成全集 第三十三巻』pp.72-74. 新潮社／小谷野敦・深澤晴美(2016)『川端康成詳細年譜』p.48, 51, p.394-395. 勉誠出版／深澤晴美(2022)『川端康成 新資料による探究』pp.15-18. 鼎書房

※
つといふ理由により、彼等も観衆の一員として利益をうけることは明かである。戯曲の取材範圍は拡大され、劇場技術は充実され、彼等は他国民の演劇を享受する機会を与えられる。しかしそれにもまして重要なことがこゝに含まれている。

我々は今國際的理解を極めて必要とする時代に生きている。この理解なくしては、我々は間もなく文明のそもその基礎を破壊し始めるに至るであらう。私の考へでは、國家間の激しい不和の多くは非常に屢々、又惡意を以て語られてゐるやうに、宥和出來ぬ根本的哲學の見地から起るものではなく、主として交渉時における無知、漠然たる偏見、陰謀たる反目の響によるものと思はれる。この霧をうち払ひ、無知と偏見を払ひ去るものは何ものであれ、我々に大なる寄与をするものと云へよう。

さて私は、國際的理解といふ分野において、演劇はとりわけ重要であるといふ事を主張したい。その國民の真に親しい、信頼出来る姿を見せてくれるものは、劇作者と

I・T・I (國際演劇協會) はユネスコの肝いりで成立した演劇の國際的組織で、加盟國三十三、形式上はユネスコと別個のものですが、それと内面的關係をもつて、演劇の國際的交流を通して、各國の演劇の向上をはかると共に、世界の平和、各民族間の理解と親善に寄与せんとするものであります。日本センターのこれへの加入は、同組織を通して日本演劇が國際的につながる重要な問題でありますので、私ども世話人となつて協賛の結果、これが創立をはかりたく、日本文化の、とくに演劇の分野における御賛同を仰ぎたいと存じます。

世話人

川端康成
河竹繁俊
北村喜八郎
久保田万太郎

それを演ずる俳優である。そして我々はこの親しい姿をば、劇場における受容的で感動にあふれた雰囲気の中に見出す。そこでは我々が新聞をよむ時よりも、新しい思想、多くの感情を快くうけ入れることが出来る。よく書かれ、立派に演ぜられた一つの戯曲は、善悪の政治家の五十分の演説にまさるものがある。それは又、その國の人々の希望、恐怖、憤慨、夢などを示し、すでにその多くが時代遅れになつてゐる政治的、經濟的觀念の中に我々をとおこめるやうなことはしない。

従つて私は次のやうに強調したい。I・T・I が確立され、その企画されたすべての仕事は著々と仕送られてゆく世界は、演劇といふ芸術が國家の高い障壁の中にちぢめられてゐる世界より、はるかに安全であり、はるかに進歩した世界である。

I・T・I の存在が、我々のすべての問題を解決するとは誰も主張せぬであらう。にも拘らずI・T・I は、世界といふ一つの社會——國境を越え、この地上の諸國民を結合する、このやうな國際的組織の創設により始めて生ずる社會——の構築に、少くとも強靱な

一本の糸を提供するであらう。
もしあなたが劇場に仕事をもつ人なら、このI・T・I は直接あなたにとつて多大の価値をもつものであらう。又もしあなたが劇場に決して足を運ばぬにしても、あなたはこの國際的組織に関心を抱くのは当然であらう。というのは、それは今生れでようと努めてゐる新しい世界文明に対し、健全な寄与をせんとするものであるから。

J・B・ブライーストリー (I・T・I 臨時実行委員會議長にして現在I・T・I の名誉会長)
(文部省海外ユネスコ課、芸術課提供)

國際演劇協會大会

- 第一回 一九四八年 プラタグ
会期 六月二十八日—七月三日
参加國 二十
議長 J・B・ブライーストリー (英國劇作家)
- 第二回 一九四九年 チュニリス
会期 六月二十七日—七月三日
参加國 二十二
議長 エミール・オプレヒト (スウェーデン劇場支配人)
- 第三回 一九五〇年 パリ
会期 六月二十二日—二十九日
参加國 二十五 (他にオブザーヴァ出席八)
- 議長 リン・リーズ (英國俳優組合会長)
- 事務局長 アンドレ・ジョッセ
- 第四回 一九五一年 オスロ
会期 五月三十一日—六月八日

- 一 日本センター設立の問題について、國際的に協議し設立可決。
- 二 日本センターの組織規約等の草案検討及び次回準備金の準備のための委員會をつくらる。(四人の世話人に加ふるに、遠藤徹也、千田是也、菅原卓、山田肇の八名)
- 三 外に「オブザーヴァー」派遣の小委員會「舞台装置展覽會出席のための小委員會」をつくらる。(オスロ大会において同會) 期中舞台装置あり)
- 一、四月十六日文部省ユネスコ議長室にて上記八名の委員にてI・T・I・日本センターと國內演劇諸組織との關係を検討。
- 二、四月十九日、パリ國際本部書記局長ジョッセ氏より北村喜八の來信あり、日本センター設立を要請すると共に、ケイム氏日本へ向け出發せるを報ず。
- 三、四月二十二日、パリ國際本部議員ジャック・ケイム氏、ユネスコより派遣せられて、連絡をかね、日本における演劇、映画、ラジオ等の調査のため來る。北村、岡氏と會ひて、日本センター設立について協議す。
- 四、四月二十七日、外務省會議室にて第二回準備會をもつ。議長河竹繁俊、日本センター定款骨子を検討。ケイム氏も來り挨拶す。次の十四名創立準備委員となる。川端、河竹、北村、久保田、遠藤、千田、菅原、山田、内村直也、杉野海太郎、土方正巳、北條秀司、吉川義雄、吉田謙吉
- 一、四月三十日、ベントラップにて、北村、内村に弁護士居城策治を交へて日本センター定款草案を起草。
- 二、五月五日、駐日ユネスコ代表部一堂にて、創立準備委員會集まりて、定款草案その他を検討。

創立假事務所・日本ベントラップ内
(中央区京橋二ノ八明葉ビル五階)
電話京橋(56)七、七三一番

I・T・I 本部の事務局長アンドレ・ジョッセ

ここに書かれてゐる「來信」が、ベントラップにあるI・T・I 本部の事務局長、フランス人劇作家のアンドレ・ジョッセ (André Jossot、一八九七—一九七六) からのレターです。

フランス・パリに生まれたアンドレ・ジョッセは、父親の望みに従つて医師になりましたが、劇作家になる夢を諦めきれず、病院での当直の夜にエリザベス I 世を主人公にした戯曲「エ

リザベス——男なき女」(Elizabeth la femme sans home) を書き上げました。一九三五年、「エリザベス」はヴェー・コロンビエ劇場で初演され好評を博します。

一九五五年にはコメディ・フランセーズが再演し、その後、世界各國で上演されました。ジョッセはまた、テレビドラマの脚本家としても知られています。I・T・I の創設者で初代事務局長を務めたアメリカの劇作家

モーリス・カーツ (Maurice Kautz、一九一三—二〇〇四) のあと、一九四九年から一九五八年まで二代目の事務局長を務めました。

オスロでの第四回世界大会

「I・T・I」は二、三年に一度、世界中から「I・T・I」メンバーをはじめとする舞台芸術関係者が集う「世界大会」を開催しています。「I・T・I」が設立された一九四八年にはブラハで第一回が開催され、二

〇二四年のベルギー・アントワープでの大会を含め、現在までにヨーロッパで二十七回、アジア太平洋地域で五回、アメリカ大陸で五回開催されました。日本センターの加盟が承認さ

れた第四回オスロ大会（一九五二）には、「I・T・I」日本センター設立世話人の一人、劇作家で小説家、俳人の久保田万太郎がオブザーバーとして参加。文部省大臣官房渉外ユネスコ課が発行し

た小冊子「国際演劇協会——オスロ大会と日本センター」には久保田による報告書「オスロ大会に出席して」が掲載されています。また、オスロ大会では「現代

舞台美術展」が開催され、日本からは歌舞伎「金閣寺」や舞台美術家・伊藤嘉朔（二八九九〜一九六七）によるオペラ「ミカド」の舞台模型などが展示されました。

I・T・I 第四回

オスロ大会プログラム

本年度の「I・T・I」第四回大会は、ヘンリ

演の親類がある。

六月二日（土曜）大会の全体会議があり、本大会の議長一名、副議長二名の選出。十一名の執行委員の中で本年度改選する三名の選出があり、さらに「一般委員会」「情報委員会」「芸術研究委員会」の三つの委員会が組織され、各国代表はそのいづれかに参加する。

尚、この日の午後は、グリムスタットにあるイブセン博物館へ船による遊覧があるはずである。

四月から七日までの四日間は、午前中は各種委員会が開かれて、それぞれの重要問題を討議する。午後には講演があり、夜は主として親類に賞される。

六月八日（金曜）大会の最終日には、再び全体会議があり、午後、大学講堂にて大会を閉じる式があり、夜にはお別れの宴会が開かれる。

五月三十一日（木曜）各国代表歓迎会。六月一日（金曜）国王ハールコン七世の御臨席のもとに、会議はアカース城で開かれ、各国代表はノーウェー政府の賓客として迎えられる。歓迎の辞は、ノーウェー当局、ユネスコ代表、昨年のパリ大会の議長などによつて述べられる。午後は「美術展覧会」の開会とその観覧、夜は国民劇場における「建築師ソルネス」（イブセン作）上

ンフレットと「世界演劇」最近第二号が発行された。の問題、演劇関係の書籍の蒐集とそれが英仏両語による発行、月刊パンフレットに各国ラジオ劇の初演を記録する問題、I・T・Iの留学生、演劇学校の調査、各国演劇の進歩を受けいれうる劇場に関する調査、各国における演劇活動の統計的報告、国際演劇週間と世界平和のための演劇デー、文化的材料の輸入に関する国際的協定、輸送の便宜、戯曲翻訳奨励の方法などである。

「芸術研究委員会」の主要な議題は、新しい傾向の問題として、映画と演劇の関係、演劇と社会との関係、新しい劇作家への奨励方法、俳優に関する問題として、その訓練と養成の問題、俳優の社会的地位を保障するための契約の方法（一年契約とフリー・ランサーの優劣）、演劇自体の問題として、（一）恒久劇場、集団演劇、商演演劇、スター・システム演劇、（二）前衛、実験演劇、人民演劇、伝統演劇、祝祭演劇、（三）私的劇場は補助金を必要とするか否か、演劇は国家によつて統制されるべきか否か、（四）芸術の自由、などである。

午後の講演は、（一）演出、舞台装置、劇作における新傾向、（二）俳優芸術、（三）演劇における思想の役割と、それが芸術的社会的目的、講演のあとには、それに関する討論が行われる。

この会期と同時に開かれる「現代舞台美術展覧会」には、各国から多くの出品があり、一九三七年から一九五一年までの舞台装置の発展の全貌を示すことになる。

オスロ「現代舞台美術展」における日本の出品

一、「ミカド」 ギルバート作

製作 伊藤嘉朔

一、「ロミオとジュリエット」レエクスピア作

製作 吉田謙吉

一、「祇王村」田口竹男作

製作 古賀安一

一、歌舞伎舞台の模写

製作 長谷川勘兵衛

一、歌舞伎看板絵

製作 三笠山御殿

二、六歌仙客彩

製作 文屋と喜演

三、歌舞伎十八番の内

製作 島居忠雄

製作 松竹株式会社、歌舞伎座提供

航空便によつて五月二十日発送の予定

オスロ大会

オブザーヴァ派遣

本年度「I・T・I」第四回オスロ大会に日本よりオブザーヴァとして久保田万太郎氏を派遣することに決定し、目下旅券申請中。

ITI 憲章 (抜)

(一九五〇年の第三回大会で修正されしもの)

演劇芸術は人類に共通せる表現であり、世界人民の広汎な集結を結びつける影響と力を持つてゐるので、
下記に署名せるわれわれは、それぞれの国における演劇の各国センターを代表して、「インターナショナル・シアター・インスティテュート」と称する自主的な国際組織を形成することを決定した。

第一節 目的

本会の目的は、演劇芸術における知識と実技の国際的交換を促進するためのものである。

第二節 機能

この目的を達成するために、本会は国際本部を設けて、演劇に関するあらゆる種類の情報を蒐集整理せしめ、演劇のあらゆる種類の国際的交換に便宜な手段を講じせしめ、これらの目的を助けるための出版物を刊行せしめる。

第三節 会 員

一 本会は各国にたいして、その国の演劇芸術を代表するセンターを設立し、本会の機能遂行に尽力することを要請する。各国センターはITI(国の名)センターと称す。
二 センターは、地方としての便宜、或いは職業上の必要によつて、サブ・センター或いは支部をおくことができる。しかし、本会は一国において一つ以上のセンターを認めない。
三 センターは次の場合、本会の会員たる資格を失ふ。
(A) 脱退
(B) 本会において四分の三の多数決による除名。
(C) 年費未納。
(D) 年費未納の未納。

第四節 規 則

ITIは執行委員会及び書記局によつて、国際大会の目標と決定に際して運営せられる。第五節 国際演劇大会

A 構成。一 大会は各国センターによつて正式に任命された代表によつて構成せられる。各センターは三名以内の代表と三名以内の交代者を指名することができ、技術上の顧問及び大会が必要と認めるその他の専門家を作つてよろしい。

B 投票

一、決定は最初の二回投票による絶対多数によつて決せられる。多数とは、出席し且つ投票権をもつ代表の多数のことである。委任状による投票は認めない。一センターは一票である。

C 手続

二、会員であるセンターが、二年以上にわたつてITIにたいする分損金を滞納した場合には、年次大会において投票権を失ふものとする。(但し、かかるセンターが自己の力に及ばない状態によつて支払不能になつたことが認められるなら、大会における投票権を行使することが許される。)

D 手続

一 大会は毎年、常例の会期において開催される。執行委員会の三分の二の表決により、或いは会員センターの数の三分の二の要求ありたる時は、大会を延期、中止、又は特別の会期に開催することができる。

三 各会期において、次回会合の場所が大会によつて選定される。

大会は毎年、会長、その他の役員を選出し、手続上の諸規則を採用する。

四 大会は特別技術委員会、及び大会の目的に必要なと思へる他の補助的委員会を設ける。

第六節 執行委員会

一 執行委員会は国際演劇大会によつて選出せられたる十一のセンターから成る。各センターは委員会において自国センターを代表する正式代表一名を任命する。

二 これに加ふるに、投票権を有しない職員による四名の委員が参加する。

a 顧問の資格における大会の会長

b 大会の執行せられる国のセンターの代表

c 次年度大会の執行せられる国のセンターの代表

d 本会の創設たるユネスコの代表

三 選出されたセンターの在任期間は三年とし、再選して差支えない。最初の選出において九センターが選出され、その三分の一が第一年度の終りに辞任し、さらに三分の一が第二年度の終りに辞任するが、辞任の順序は選出の直後に抽籤によつて決定される。従つて三センターが毎年選出されることになる。

四 委員の一人が死にしくはは辞職した場合、執行委員会はそのセンターをして任期の残存期間のために代行者を任命せしめる。

五 執行委員会は、委員にして十八ヶ月連続して委員会のいかなる会合にも出席せず、又、正当な資格をもつ代理を出すことができない時には、その委員の席が欠員となりたることを宣言してよろしい。

B 機能

一 執行委員会は、大会により採用せられたるプログラムの遂行にたいして責任を負ふ。

二 執行委員会は、委員中より役員を選出する。

三 執行委員会は、一年に少くとも二回、定期の会合をもつ。議長は委員により、或いは委員四名の要求によつて召集される。特別の会期において集まることもできる。

四 執行委員会の議長は、国際演劇大会に、本会の活動状況にたいする本会書記局の年次報告を提出する。但し、その年次報告は予め執行委員会に手交される。

第七節 書記局

A 構成。一 書記局長は書記局長一名及び必要とされる局員から成る。その任命は国際演劇大会で承認されねばならない。

二 書記局長は執行委員によつて任命され、その任命は国際演劇大会で承認されねばならない。

B 機能

一 書記局長は執行委員会の監督の下に、国際演劇大会によつて承認された本会のプログラムの遂行及び書記局員にたいして責任を負ふ。

二 書記局長及び局員の責任は、その性質において特に国際的である。その責務の遂行にあつては、いかなるセンターからの指図も、協会外のいかなる権威からの指図も、求めてはならないし受けてはならない。各国センターは、書記局長及び局員のもつ責任の国際的性格を尊重し、その責務遂行にたいして彼らを左右しようとはしてはならない。

第十節

この憲章は第一回国際演劇大会によつて採用せられて以後効力を発生し、爾後、新しく加入する会員はこの憲章を受入れ、会員中込みの書類の中にそれを表示するものとする。

(北村喜八署名)

ITI: 国際本部パリ、クレヴェル街、ユネスコ会館内

国際書記局長——アムドレ・ジョセ

日本センター初代理事長、北村喜八

ITI日本センター創設の立役者で初代理事長を務めたのが演出家・劇作家の北村喜八(一九〇〇—一九六〇)だ。石川県小松市に生まれ、高校在学中に詩集を刊行するなど文学青年だ

つた北村は、東京帝国大学英文科に進学。発足間もない帝大劇研究会に入り、川端康成も会計係として参加した試演会で上演した自作の「狂人を守る三人」が劇作家、小山内薫に認め

られて演劇の道へ進みます。大学卒業後の一九二四年には、小山内らと日本初の新劇の常設劇場「築地小劇場」創設に参画、一九三七年には妻で俳優の村瀬幸子と「芸術小劇場」

を結成しました。「美しき家族」(一九四二)などの戯曲や『演出入門』(一九四六)、『西洋演劇史概説』(一九四八)などの評論を発表する一方、ユージン・オニールやヘルトル・ブレヒトなど

多くの戯曲翻訳も手掛け、こゝではITI憲章(抜粋)の仮訳もしています。一九六〇年に没するまでの約十年間、理事長としてITI日本センターを精力的に牽引しました。

(参考文献) 尾崎秀樹他編(1991)『北村喜八』『新潮日本人名辞典』p.578. 新潮社/藤木宏幸(1985)『北村喜八』『日本大百科全書 6』p.569. 小学館/一ノ瀬隆隆編(2004)『北村喜八』『20世紀日本人名事典』p.848. 日外アソシエーツ/北村喜八(1926)『帝大劇研會の頃』『新しき演劇へ』pp.245-253. 原始社/井口哲郎編(1996)『北村喜八:年譜と著作目録 改訂版』井口哲郎

当時のITIはユネスコから補助金を受けており、多くの各国センターはその国の政府からの資金援助を受けて運営されていきました。しかし、ここにあるように「経済的援助をう

ける場合でも、おぼろね、それによって拘束を受けることのない民間団体として自主的な活動」をしていたようです。ITI日本センター初代理事長の北村喜八は、「さうあること

によつて、ユネスコ運動に対する演劇人の創意と熱情を自由に且十分に発揮させることになるからであらう」と推察しています。

ITI日本センターの創立時

における協賛団体は、二十二団体。協賛団体一覧には、日本ペンクラブ、松竹株式会社、新聞各社などの前に、「外務省、文部省、駐日ユネスコ代表部」とあります。敗戦国日本

社団法人国際演劇協会日本センター定款(草案抜)

第一章 総則

第一条 (名称) この会は社団法人国際演劇協会日本センター(略称ITI日本センター)

The Japanese Centre for the International Theatre Institute と称する。

第二条 (事務所) この会は事務所を東京都におき、必要に応じて地方に連絡所をおく。

第三条 (国際演劇協会との関係) この会は演劇の国際組織である国際演劇協会(ITI)以下この略称を以てする)の一部をなすものである。

第四条 (性格) この会の性格は国際演劇協会(ITI)の憲章に規定される。

第五条 (包含範囲) この会の包含範囲は劇、ラリオ劇、オペラ、バレエ等の演劇芸術である。

第二章 目的および事業

第七條 (目的) この会は国際演劇協会(ITI)の方針全国に呼応し、各国演劇センターとの交流をとおして国際的理解を促進せしめると共に、国際的関係において日本の演劇芸術の向上とそれが社会的普及をはかるのが目的である。

第八條 (事業) この会は前條の目的を達成するために、左に掲げる事業を行う。
一、国際演劇協会(ITI)より得たる各国演劇の情報、知識、技術、その他の、国内演劇への提供とそれが普及。

日本演劇センターと日本政府との関係

日本はまだユネスコ(国際連合教育科学文化機関)へ加盟することが認められていないが、近頃加盟が認められると、日本におけるユネスコ活動は政府が国際的関係において行ふ最も大きな文化事業となることが予想される。

ITI(国際演劇協会)はユネスコとは形式上別個の組織であるが、ユネスコと密接な関係をもつていて、ユネスコから補助金を受けて共に、ユネスコ内の演劇対策はすべてITIをとおして行はれる。従つて、ITIの各国センターは、それぞれの国の政府から経済的援助をうけて活動してゐるのが多い。

ITI日本センターが第四回大会でITIへ加入することが認められるとすれば、日本のユネスコ加盟よりも一足先に、ユネスコ関係の国際組織へ加盟することになる。

日本センターと日本政府との関係は、日本がユネスコへ加盟してからでないと、決定的なことを規定するわけにはゆかない。しかし近い将来に日本ユネスコ委員会が成立すれば、それと緊密な関係をもつことになる。さういふ意味で、日本の外務省、文部省、ユネスコ駐日代表部が、ITI日本センターの設立に助力を与へてゐるのである。

ね、それによつて拘束を受けることのない民間団体として自主的な活動をしてゐるやうである。さうあることによつて、ユネスコ運動に対する演劇人の創意と熱情を自由に且十分に発揮させることになるからであらう。日本の場合には、今も言つたやうにユネスコ加盟以前であるから、この問題について疑問をいふ必要があるまい。

ついでだが、日本における「ユネスコ協力会」は、ユネスコ運動に協力せんとする民間団体であり、日本のユネスコ加盟が認められるまでは、組織的には国際的なものでなく、国内的なものに留まつてゐる。日本のユネスコ加盟が認められた時、ユネスコ協力会が直ちに日本ユネスコ委員会となるかどうかは、日本演劇人の組織であるITI日本センターの周知しない問題である。従つて、日本センターは日本ユネスコ協力会とは、現在組織的には直接の関係をもたないものであるが、精神的には共通した目的をもつてゐるので、必要に応じて連絡し協力してゆくことになるであらう。(北村)

本年度国際ペン大会

第二十三回国際ペン大会はスウェーデンのロゼンムで六月二十二日から一週間開催。本年度の議題は「歴史と文学」。イタリアの世界の文学者にしてペン国際会長であるクロチエの講演がある。本年度は日本ペンから正式代表として芥沢光治、石川達三の両氏が派遣されるが、外に池島信平氏がオブザーヴァとして同行する。日本出発は五月下旬。

J.M.S.

AGENCE GÉNÉRALE
DE LA

Société des Auteurs & Compositeurs Dramatiques

9 & 11, Rue Ballu, Paris (9^e)

DIRECTEUR: A. LECLAIR

TELEPH: Portulier TRINITE 17-29
Standard TRINITE 44-07
(3 lignes groupées)
ADRTÉLEGR AUTEURS PARIS

Le 21 Août 1951

Monsieur Kihachi Kitamura
618 Izumi-cho
Suginami Ku
TOKYO (Japon)

LOI DES 13-19 JANVIER 1791, ART. 3
LES ŒUVRES DES AUTEURS VIVANTS (ET
CINQUANTE ANS APRÈS LEUR MORT POUR
LEURS HÉRITIERS OU AYANT-DROIT - ARTI-
CLE 1^{er} DE LA LOI DU 14 JUILLET 1844) NE
PEUVENT ÊTRE REPRÉSENTÉES SUR AUCUN
THÉÂTRE PUBLIC, DANS TOUTE L'ÉTENDUE
DE LA FRANCE, SANS LE CONSENTEMENT
FORMEL ET PAR ÉCRIT DES AUTEURS, SOUS
PEINE DE CONFISCATION DU PRODUIT TOTAL
DES REPRÉSENTATIONS AU PROFIT DES AU-
TEURS.

Monsieur,

Notre sociétaire, Monsieur André Josset, m'a fait part de votre proposition de représenter au Japon, en langue japonaise, la pièce de Monsieur Jean Anouilh intitulée "L'INVITATION AU CHATEAU".

Nous avons pu faire accepter par Monsieur Jean Anouilh l'établissement d'un contrat - sans versement à valoir - prévoyant 50 % des droits produits pour sa part. Je vous en remets sous ce pli le premier exemplaire que je vous serai obligé de vouloir bien me retourner revêtu de votre signature, précédée des mots "lu et approuvé" et avec vos initiales au bas de chacune des trois premières pages. Dès réception de ce document, je vous ferai parvenir l'exemplaire du traité signé par M. Anouilh.

Bien que le Japon n'ait pas encore adhéré à la nouvelle Convention de Berne, je suppose qu'il vous sera possible d'effectuer le transfert des sommes revenant à Monsieur Anouilh, à l'ordre de la Société des Auteurs et Compositeurs Dramatique, 9 rue Ballu - PARIS.

Dans l'attente de vous lire, veuillez agréer, Monsieur, l'assurance de mes sentiments distingués.



ジャン・アヌイ『城への招待』著作権に関するレター

一九五六年八月、渋谷の東横ホールで「第三回新劇合同公演」と銘打ってジャン・アヌイの『城への招待』が日本で初めて上演されました。演出は久保田万太郎、翻訳は鈴木力衛で、俳優座、文学座、劇団民藝の俳優が出演しました。

この作品の翻訳・上演権についてのやりとりが始まったのは、遡ること五年前。一九五一年八月二十一日付のパリの「劇作家・作曲家協会」(Société des Auteurs et Compositeurs Dramatiques)からのレターは、日本センター理事長の北村喜八がITI本部の事務局長アンドレ・ジョッセに日本での上演の打診をし、本来の著作権料の半額を支払うことをアヌイが承諾、契約を進める旨が書かれています。

末尾には、まだ日本は一九四八年に改正された「文学的及び美術的著作物の保護に関するベルヌ条約」に加盟していないが、協会宛に送金することはできると思うと書かれています。日本がベルヌ条約に加盟するのはこの二十三年後、一九七四年を待つこととなります。

「日本の舞台芸術」への窓口として

「ITI」日本センター設立から
およそ四カ月後に発行された「ITI通信」一号からは、早くも
各国の演劇人たちと活発なやり
とりが行われていることが読み取
れます。

小見出しに「イプセン著作

権」とありますが、このあと日
本センターは、日本の出版社や
上演団体とストックホルムのイプ
センの著作権を管理する出版社
との間を仲介し、両者の同意書
作成の手助けをしました。また
「外国演劇の上演権」の問題に

ついては、パリのITI本部が立
ち上げたこの件に関する特別委
員会に送るべく、日本センター会
員の意見を募っています。
さらに、ITI本部が発行す
る月刊誌「世界初演 (World
Premieres)」のために、芥川

龍之介原作、八木隆一郎作・演
出の歌舞伎「羅生門」と森鷗外
原作、宇野信夫作・演出の新歌
舞伎「ぢいさんばあさん」の情
報を送るとあります。
日本センターにはほかにも世界
の舞台関係者からのさまざまな

問い合わせの手紙が残っています。
日本の舞台芸術についての情報が
少なかったこの時代、ITI日本
センターは世界の舞台関係者にと
つて「日本の舞台芸術」へアクセ
スするための窓口だったと言える
のではないのでしょうか。

INSTITUT
INTERNATIONAL
DU THEATREINTERNATIONAL
THEATRE
INSTITUTE

国際演劇協會

I.T.I

日本
センタ

本協會創立以来、大變御連絡ができていたが、
第四回オスロ大会の報告が参りましたので、文部省
ユネスコ課の好意によつて小冊子を作りましたから
お送りいたします。いよいよ上講和も締結されて本會
の使命も重きを加へてきたので、會員並びに関
係諸団体の一そうの御協力をお願いいたします。

イプセン著作権

久保田万太郎氏がオスロで新聞記者との會見にお
いて、日本で戦後イプセンの戯曲が上演されて好評
だったことを話したので、その新聞記事を見たイプ
センの著作権所有者から、日本の興行者と上演に関
する契約をしたことがないが、日本では戯曲は法律
によつて保護されているのかという手紙が、久保田
氏のホテルへ歸ひこんだ。ITI日本センターは久
保田氏からこの手紙を受けたので、早速調査し
占領期間中はC.I.R.によつて保護されていることを
確めて、その旨、ストックホルムのイプセン著作権
所有者に返事を出した。イプセンの著作権は故園ノ
ーウェーではなく、歸りのスウェーデンにある。著
作権の問題は、今後の日本の国際的信用のため、慎
重に取扱はねばならない。

現代舞臺裝置展

オスロ・センターのタスト・トマセン氏より事務
局長書簡によれば、日本より出品の模型舞台作品は、

大会開会後数日にして到着し、一ヶ月間の会期中同
様に多大の密着をなした。このためノーウェーセン
ターは特に日本出品の作品のみによる特別展覽會開
催を準備中である。又、日本出品の作品をノーウェ
ーに寄贈する旨申し出てあつたが、先方からたしか
に買つてよいのかと問合せてきたので、返送の場合
は運賃がまた十一萬圓かかるので、ノーウェーへ寄
贈の旨を折返し申し送つた。

パンフレット「世界初演」

国際本部発行の月刊パンフレット「世界初演」へ
の寄稿の日本作品を選定するための「小委員会」を
演劇記者クラブに委嘱し、久住 東日(土方(東京))
兩氏が委員長役の予定
尚、同誌第三巻、第一号に第一回分として「羅生
門」並に「おひさん、ばあさん」の記録を事務局よ
り送附す。

外国演劇の上演権

調和後における外国演劇上演は、金商者側において
原作者と個々に折衝すべきものと考へられますが、
ITI本部においてこの問題に関する「特別委員会」
をつくり、調査研究に乗り出しましたから、日本と
しても現状を知らせて、交渉手続の簡易化、上演料の
適正化を図るべきではないかと思ひます。つきまし
ては日本側の希望を述べるに當つて、それを事付け
する資料につき委員各位の御意見を希望致します。

事務所 東京都中央区京橋二ノ八明集ビル

国際演劇協會日本センター

振替東京一六四三五〇番
電話京橋(56)七七三三番
昭和廿六年十一月

ジャン・ポール・サルトルの新作劇

『悪魔と神様』(パリ・テアトル・アントワ
ーヌに於て、一九五一年六月七日初演)
三幕十一場、道具は九杯。上演時間三時間。
プロデューサー ルイ・ジュノー
舞臺装置 フォリ・タス・ラビッス
衣裳考案 フランシス・カリヤール・リ
スレー
配 役 男三十一人、女十三人
主要人物 ビール・フラスール、ジャン・
グイラル、アンリ・ナシエ、
ジャン・トウロン、マリア・
カザレス、マリー・オリヴィエ。
サルトルの住所はパリ市ポナバル街四十
二番地。
(梗概)……

マルテンス・ルールの宗教改革運動初期の頃、ドイ
ツでは農民一揆がさかんに行われていたが、羅漢ゲ
ッはウオルムスの城門にあつて同市を包圍し且つ
限なる軍事遂行以外の理由なくして、同市民の虐殺
を演説しつつあつた。しかしながら、この包圍中に
ゲッは、遂には絶望のみをもたらすであらうとこ
ろの、彼の行動の愚劣さを大悟するに至つた。一大
決心をした彼は、過去に於て悪事をなしたと同様系
統的に將來善事をなさんと心に誓うのであつた。彼
は自分の全財産を部下に分ちあたえたが、この予期
せざる彼の態度が、彼の所領内外に驚異と恐怖と、

日本センター初代会長、高橋誠一郎

「I-T日本センター」の初代会長（一九五〇～一九七〇）を務めたのは、経済学者の高橋誠一郎（二八四〇～一九八二）*でした。新潟の廻船問屋の一人息子として生まれ横濱で育った高橋は慶応義塾

大学政治科を卒業後、経済理論・経済学史研究のためイギリスへ留学。帰国後の一九四四年に母校の教授に就任し、九十四歳で退任するまで教鞭をとり続けます。戦後間もない一九四七年に

は第一次吉田茂内閣で文部大臣として教育基本法と学校教育法を制定し、戦後教育の骨格づくりに尽力しました。

者として世界にも名を馳せ、また歌舞伎を愛する演劇人であり、随筆家でもありました。三十年間にわたって務めた日本芸術院長をはじめ、東京国立博物館長、国立劇場会長、文化財

保護委員会委員長、日本舞踊協会会長ほか文化・芸術分野の要職を歴任し、戦後の文化行政を指導。I-T日本センター会長に就任した当時は、日本演劇協会の顧問も務めていました。

路には紛争すら生ぜしめる結果となった。ゲッツの卦くところ、すべては敵意と憎悪のみ。ここに於て彼ゲッツは、善事に成功するためには、農民一揆の首領であるナースティの如き悪魔に担担するか、然らずんば、貧民の間に見出した少女ヒルダの場合のように一般大衆の共感を得るだけの才能を持つべきであることを知る。結局、善悪の観念は神或は悪魔の存在と何ら係りあるものでなく、むしろ人類社会の宿命とこそ関連するものである、というのが、ゲッツの結論となった。彼は再び武器を帯び、いまや一揆の首領として、人民義戦を開始するのだった、が、このたびは、彼の闘争は人類全体の幸福のために捧げられたものだった。

（新聞論評抜粋）

ロブセルグ・ワイル紙：「この劇はジャン・ポール・サルトルが芝居のために書いた作品中たしかに

刊行物希望申込

（一）「世界演劇」World Theatre（季刊・英文）

新聞四折大の判・大四頁。各国演劇の最近の活動を紹介し、数多くの写真挿入。大衆を惹きつける。すでに三冊発行。希望者に頒布したいと思ひますから申込み下さい。値段は大抵、一部一ドル（三六〇圓）一年四冊四ドルの決定ですが、申込みをまとめて本部と交渉します。

バック・ナンバーも必要なのはその旨御記載下さい。

（二）「世界初演」World Premieres（月刊・英文）

これは雑誌判、十六頁前後のパンフレットで各国の初演が記録されています。会員にして希望者には無料で差しあげます。但し郵費があまり多くありませんので、希望者の多い場合は公平に分配できるように処理します。一応申込み下さい。

最も野心的でかつ内容豊富なものだ」（J・ネアグ・ドガ）

パリ・プレス紙：「『悪魔と神様』は驚嘆すべき倫理観と論理の最も鋭格な法則にしたがつて處理された学校劇でも評すべきか。この作者は往々にして彼の理論家の要素のために完全に覆いかくされてしまふのだ。（M・フ・グザヴィエ）

ル・イ・ガロ紙：「第三場の終りまでは、この作品に殆ど抵抗することの出来ない力と、誠実と、情熱とさらに雄大な私を驚かした。それ以後になると、この劇は、舌たらずとなり、過重負担となりついに莫々たる微事の中に我々自身を見失つてしまふのだ。（J・J・グーティエ）

フランス・ソワール紙：「サルトル氏のせりふには詩がない。それにしても、何たる力、何たる応用の利いた形式であろう」（F・ゴルドオ）

「世界初演」第二巻第十號（一九五一年七月）所載

日記抄

六月五日 第一回理事會、日比谷山水樓。會の方針

事業内容、財政、評議員推薦について。

「十一日 常任理事會。

「十五日 第六次常任理事會。

「二十二日 オスロ大会へ日本代表として出席の久保田万太郎氏、羽田空海に無事歸着。

「二十六日 常任理事會、劇団の代表を招いて懇談

主として會の事業内容について。

「二十七日 會員鳴海弘氏、コロンビア大学へ留学

につき、アメリカ・センターへの紹介状をわたす。

「三十日 本會副會長吉垣鉄郎氏（NHK會長・渡

欧・イギリス・センターへの紹介状を託す。

七月三日 常任理事會。

「九日 常任理事會。

「十六日 常任理事會。

「十七日 松竹演劇部長高橋誠一郎氏と常任理事懇談

「二十五日 常任理事會。

「二十五日 久保田万太郎氏及びアメリカに演劇映頭

を觀察に赴き大谷竹次郎氏の歸朝歓迎會。九ノ

内リッパ。甚だ盛會なり。

「三十一日 常任理事會。

八月七日 日本演劇協會、ラジオ作家協會、及び本

會の三者懇談會を開く。

八月二十八日 常任理事會。

八月三十日 本會會長高橋誠一郎氏、サンフランシ

スコに開催の日本古美術展覧會の代表者として渡

米。八月パリ本部より第四回國際演劇大會の記録

及び「世界初演」六月号到着。後者は興行會社、劇

団、理事に配在す。

お願ひ

（一）會費 會費はできるだけ低廉にしたいと思ひますが、本年度は總會で入會金二〇〇圓、會費一ヶ月一〇〇圓と決まりましたから、本年度はそれで御承諾願ひたく、會費のまだ御納入なき方は同封の振替を御利用下さい。

（二）入會申込み まだ御入會になっていない方は此さい入會金に會費の一部をそへてお申込み下さい。

（三）本會は団体加入も認めています（議決権一票・定款参照）参加団体に所属の方でも勿論個人加入ができます。

（四）本會は海外との交渉が多く、とうてい會員だけではまかないきれませんので、一般の寄附を仰ぎたいと思います。せいで御賜顧下さるよう

（参考文献）飯田鼎（1987）「高橋誠一郎」『日本大百科全書 14』p.656. 小学館／／瀬雅隆編（2004）「高橋誠一郎」『20世紀日本人人名事典』p.1464. 日外アソシエーツ／高橋誠一郎（1973）『回想九十年』pp.3-4. 筑摩書房

World

PUBLICATION BI-MENSUELLE DE L'INSTITUT INTERNATIONAL
DU THÉÂTRE - INTERNATIONAL INFORMATION ABOUT
THEATRE PUBLISHED WITH THE ASSISTANCE OF UNESCO

PREMIÈRES

RÉDACTEUR EN CHEF : JEAN DARCANTE INSTITUT INTERNATIONAL DU THÉÂTRE 6, RUE FRANKLIN, PARIS (16^e) Tél. 870-77-26

MESSAGE

by Sir Laurence Olivier

From March 25th-28th 1964 the third World Theatre Day will be celebrated throughout the whole world - Two messages by Sir Laurence Olivier and Jean-Louis Barrault will be broadcasted and published on this occasion. We publish below the text by Sir Laurence Olivier, the text by Jean-Louis Barrault will be included in our next issue.

I and my friend, Jean-Louis Barrault, are honoured at being invited to say a few words on the occasion of World Theatre Day. For my part, I would like to begin by saying something about our newly-created National Theatre. Last year, after more than a century of struggle, we in Britain were finally given a National Theatre, and I was entrusted with the task of directing it. One of the first things on which my colleagues and I agreed was that we wanted it to be not only a National but an International Theatre; and we intend to plan our repertory so that it preserves a balance between plays of British origin and plays from abroad.

Of all the performing arts, theatre finds it hardest to be international. Ballet and music can cross

La guerre des Antigones

par Georges Sion

Président du Centre Belge de l'I.T.T.

Il y a quelques semaines, l'éminent auteur belge, Georges Sion, au cours d'une conférence donnée au Palais de Chaillot, à Paris, traitait très brillamment des dangers qui guettent le Théâtre contemporain. Nous lui avons demandé de bien vouloir réserver aux lecteurs de « World Premières » son point de vue sur certaines « démystifications » à la mode, entre autres la remise en question des thèmes et des formes qui finit par remettre en question le Théâtre contemporain lui-même.



« ANTIGONE » - J. Ancuith. Kitee Arts Society, Northern Rhodesia.

XV^e ANNEE - Nlle SERIE
JANVIER-FEVRIER 1964

N° 41

Prix de l'abonnement :

10 F. — \$ 2.00

Prix du numéro :

2 F. — \$ 0,40

世界各国の新作情報を紹介する小冊子『世界初演』

「ITI通信」第一号でも紹介された『世界初演』(World Premières)は、ITI本部がユネスコの資金援助を受けて、創刊当初は年十冊、その後、隔月で発行していた小冊子で、毎号十六ページ前後の誌面に各国の舞台芸術に関する最新情報が英語とフランス語で掲載されています。

『世界初演』を開くと、中に「テクニカル・データ」と書かれたひとまわりサイズの小さな別冊が挟み込まれています。「テクニカル・データ」は各国の新作のデータを一覧したもので、作品のタイトル、上演された劇場、会期、作者、演出家、出演者数、上演時間、あらすじとともに、新聞などの劇評も掲載されています。

コンピュータもインターネットもない時代に、二カ月ごとに世界各国のセンターから新作の情報や写真を集めて冊子をつくる……大戦を経て、各国の演劇人がお互いのことを知ろうとする情熱が紙面から溢れてくるようです。

*『世界初演』は一九六四年一／二月号と一九六四年三／四月号の二冊しかITI日本センターに残っていないため、これらを図版として使用しています。

FRANCE

Le Peis Dominique 1963 de la République mine en scène est revenu à Jean-Louis Barrault pour sa réalisation de « Souffleur de Satin » de Paul Claudel, à l'Odéon-Théâtre de France. C'est là, en effet, un spectacle admirable. Mais, Jean-Louis Barrault a en outre donné un exemple, avec exceptionnel sans doute, de renouvellement d'inspiration, en inventant une mise en scène radicalement différente de celle qu'il avait trouvée, voilà vingt ans, lorsqu'il créa la pièce. Et sa nouvelle vision scénique a servi avec une puissance plus rigoureuse le poème dramatique claudélien, nous faisant pénétrer plus profondément dans son univers spirituel.

Exemple remarquable encore de mise en scène : celle de Roger Laroche, récent lauréat du Concours des Jeunes Compagnies, pour « Le Mariage » de W. Goethe (au Théâtre Ricamaric) ; un travail très achevé, très précis, dans son parti pris insolite.

Parmi les jeunes animateurs, Pierre Debussche vient de s'affirmer avec force en révélant la « Judith » de Rabelais (jamais jouée en France) comme la tragédie la plus vivante qui soit, sur le sujet biblique (Théâtre Daniel Sorano, à Vincennes, puis Studio des Champs-Élysées). Pierre Debussche vient d'être installé dans une salle de la proche banlieue parisiennaise. Il contribue ainsi à développer la démocratisation théâtrale — un des faits les plus importants du théâtre français depuis la guerre.

Le quatre centième anniversaire de la naissance de Shakespeare continue à être célébré sur les scènes françaises. À l'Odéon-Théâtre de France, Jean-Pierre Grand a monté « Comme il vous plaira », au Théâtre Montparnasse de Versailles, Claude Chabrol a mis en scène « Macbeth », et Marcelle Tassinourt « Othello » et « Romeo et Juliette » ; à Villiers-sur-Seine, Roger Planchon a choisi « Troilus et Cressida ».

Georges Wilson a inauguré sa direction de Théâtre National Populaire avec « Les Enfants de Seldi » de Gorki. Des le premier spectacle, on a eu le plaisir de constater que la succession de Jean Vilar était assurée dans les meilleures conditions.

Quatre pièces étrangères ont retenu particulièrement l'attention : « Le Visage » de Rolf Hochhuth (Albion), « Les Derviches » et « Le Tige » de Murray Schlegel (Lyon) et « Photo-Finish » de P. O'Neil (Ambassadeurs).

P. L. M.

Milan BOGDANOVIC, l'éminent homme de théâtre yougoslave, qui fut Président de l'I.T.J., vient de mourir. Milan Bogdanovic fut non seulement un défenseur du théâtre et des idéaux de l'I.T.J., il fut aussi l'un des meilleurs, le plus charmant et le plus dévoué. Sa perte est ressentie profondément.

Milan BOGDANOVIC, the outstanding man of theatre in Yugoslavia, who was President of the I.T.J., has just died. Milan Bogdanovic was not only a defender of the Theatre and the ideals of the I.T.J., he was also the most charming and devoted friend. His loss is deeply felt.

Zeami, Founder of the Noh, and his importance today

by Akira Maruyama

Noh, this unique theatre form in the world, was completed by Kan'ami the father and Zeami the son about six centuries ago.

Kan'ami was born in 1333 when there already existed several professional troupes of sarugaku, a kind of mimic art, in Ōmi and Yamato districts near Kyoto. There were also professional troupes of dengaku which was characterized by its symbolized dancing in Kyoto and other places. Dengaku had been more popular than sarugaku for half a century before and had Ichu as one of the best performers. Kan'ami, son of a sarugaku family in Yamato, was excellent in mimicry which was characteristic of his family. He, however, was not content with this only, but learned much from Ichu who was especially good at symbolic dance.

The first point that Kan'ami contributed to create a new type of Noh out of the mere mimic art of sarugaku was that he introduced *hassei* dance which was popular in those days. As *hassei* is the dance performed to the accompaniment of story chanting, its introduction into the Noh had influence on the formation of the Noh as lyric drama. In 1374, Kan'ami had a chance to present Noh before Yoshimitsu, feudal ruler of the time. After this, Noh came to be recognized as representative entertainment of the capital. At that time, Kan'ami was forty years old and Zeami was a handsome boy of 12. The young lord of 18 especially loved Zeami's performance.

As already mentioned, it is Kan'ami and Zeami who completed Noh. But it is quite natural that the theory of Kan'ami who developed sarugaku, a country entertainment, into more refined stage art against many difficulties was different from that of Zeami who had the ruler as benevolent protector for him. And it is considered that Noh owes much more to Zeami and his ideal in that it aimed at developing its symbolic and lyric dancing to the accompaniment of chanting rather than deepening its dramatic elements by describing the conflicts of men against men.



The « Noh ».

Zeami was, at the same time, a performer, an author and a producer as well as his father. Furthermore, he left many books in which he described the theory of Noh from all viewpoints. And those theoretical writings already found today amount to 23, some of them having been translated into foreign languages. His theory can be well accepted as that of the contemporary theatre and is full of fresh suggestions.

As it is supposed that this year is the sixth centenary of his birthday, we have celebrated it through the year holding several ceremonial events; Noh festivals, exhibitions, lecture meetings, etc.

The life of Zeami was full of ups and downs. In the days of Yoshimitsu's reign, he enjoyed a happy prosperous life as the only favourite Noh player. When, however, Yoshimitsu succeeded Yoshimune, a dengaku player named Zeami replaced him. At the time of Yoshimune, the next ruler, his nephew Oshichi took the position of trust, while his own son Motomasa died suddenly during his travel through the country. Added to this, in 1435 only two years after Motomasa's death, Zeami himself was exiled to the isolated Isle of Sado. He was already seventy years old at the time. The reason why he was banished is unknown. We, however, can guess from a chapter of the book he wrote that the crime was not serious and that he was exiled because of a sudden fit of anger of the ruler. The date of his return is also unknown. It is supposed that in autumn 1437, he was at Yamato, his native place.

It was not until 1907 that some of the theoretical books written by Zeami were printed and came to attract the people's interest. Zeami, therefore, can be said to have shown himself before us quite recently. The vagueness of his life is due to this fact in part and also partly to the fact that detailed records of those Noh players are seldom left behind, because their social status was very low in spite of the patronage of the ruler.

According to the theory detailed by Zeami, the ideal of Noh is in « Yagen ». The word « Yagen », which cannot be borrowed from the theory of our traditional poetry of 31 syllables, means « exquisite elegance » and is thought to have been the expression for the essence of the sense of beauty in those days. Zeami in one of his books entitled « Kakyo » explains about the



« L'ÉTHÈRE », de Friedrich Schiller. Compagnie Pierre Debussche.

NORTHERN RHODESIA

Northern Rhodesia, a landlocked country in the centre of the African Continent, is moving rapidly towards independence. When the Federation of Rhodesia and Nyasaland officially ceases to exist at the end of this year, Northern Rhodesia will attain internal self-government, as the next constitutional step.

One of the many problems which will face the new country is the organisation of the Arts on a National basis, and Dr. Kameko, the present Minister of Welfare, and almost certainly Prime Minister designate of the new Government, is very conscious of it.

At present there are seven « Little Theatres » in the major towns which have been built by the strongly organised amateur Drama Societies formed by the European citizens of Northern Rhodesia.

Although very few Africans have joined these amateur groups, the urban population is becoming increasingly aware of their existence, and many are beginning to attend performances. These European groups are naturally performing plays from the Western World, which Africans find difficult to appreciate, both because of the content, which is so different from their own cultural background, and also because of the English language difficulties.

能楽を日本の古典から世界の演劇へ

『世界初演』一九六四年一月／二月号には、小説家・能楽評論家の丸岡明（一九〇七—一九六八）が「能楽の創始者、世阿弥と今日におけるその重要性」を寄稿しています。丸岡は能楽書林を創立した丸岡桂の長男で、ITI日本センターの理事でした。「能は西洋の歌劇（lyric drama）」と「能は異なるもの」と説き、「能が日本の古典としてだけでなく、世界の演劇として多くの外国人に研究され、評価されることを願っています」と結ばれています。



TECHNICAL DATA FICHES TECHNIQUES

(Publié avec le concours financier de l'UNESCO)
SUPPLÉMENT AU NUMÉRO 42 DE WORLD PREMIERS

SOMMAIRE

ALLEMAGNE DE L'EST 18
ALLEMAGNE DE L'OUEST 19
ARGENTINE 20
AUSTRALIE 21
AUTRICHE 21
BELGIQUE 22
ESPAGNE 22
ÉTATS-UNIS 23
FRANCE 24
GRÈCE 25
HONGRIE 26
ITALIE 26
MEXIQUE 26
PAYS-BAS 26
ROYAUME-UNI 26
TCHÉCOSLOVAQUIE 26
TURQUIE 26
U.R.S.S. 26
URUGUAY 26
YUGOSLAVIE 26

SUMMARY

WEST GERMANY 18
EAST GERMANY 19
ARGENTINA 20
AUSTRALIA 21
AUSTRIA 21
BELGIUM 22
SPAIN 22
UNITED STATES 23
FRANCE 24
GREECE 25
HUNGARY 26
ITALY 26
MEXICO 26
NETHERLANDS 26
UNITED KINGDOM 26
CZECHOSLOVAKIA 26
TURKEY 26
U.S.S.R. 26
URUGUAY 26
YUGOSLAVIA 26

BONHEUR, IMPAIR ET PASSE. Comédie.

Théâtre Edouard-VII, Paris. — 16 Jan. 1964. — Aut. : Françoise Sagan. — a. : 2. — tab. : 7. — Reg. : Françoise Sagan. — Dir. : Claude Gédia. — Comp. : Henri Patterson. — Dec. : Wakhevitch. — Cast : 3 h., 2 f. — d. : 1 h 40 m.

クロード・レジに救われたサガン

この号の「テクニカル・データ」には、作家フランソワーズ・サガンが初めて演出を手掛けた自作の『幸福を奇数に賭けて』があらわした。ジュリエット・グレコ、ジャン・ルイ・トランティニャンなどが出演しましたが、サガンは演出に苦慮し、若き日の演出家クロード・レジ (Claude Régy, 一九二三—二〇一九) が助けに入ってくると、初日に漕ぎ着けました。なお、「Claude Gédia」と当時の著名な女優の名前が書かれています、誤植のようです。

「国際演劇月」の開催

当時、ITI本部は毎年三月を「国際演劇月」(International Theatre Month)と定め、「演劇にたいする社会的関心を高める」とともに、演劇の国際的交流をはかり、各国間における相互の

理解を深めることを意図した」催しを行うことを各国センターに働きかけていました。

日本センターが最初に「国際演劇月」を開催したのは日本センター設立からわずか九カ月後の

一九五二年三月。日本演劇協会

との共催で、松竹などの大手興業会社、劇場、劇団、さらに日本放送協会(NHK)の協力を得て、東京・大阪を中心に展開されました。参加公演は歌舞伎、能、

文楽、新劇、児童演劇のほか、パ

レエ、オペラ、レビュー、日本舞踊、さらにラジオドラマと幅広く、また、第二回目からは、プロの公演だけでなく、学生劇団、社会人によるアマチュア劇団の公演

も参加していました。

「国際演劇月」参加公演は原則として各劇場・劇団などが製作し、ITI日本センターは、上演作品の推薦、宣伝、観客動員などに協力していました。

INTERNATIONAL
THEATRE
INSTITUTE



INSTITUT
INTERNATIONAL
DU THEATRE

国際演劇協会 I.T.I 通信

No. 2

Dec. 15, 1951.

The Japanese
Centre of I. T. I.

Room No. 512,
Meiji Seika Bldg
No. 2, Kyobashi,
Chuo-ku, Tokyo.

国際演劇協会

日本センター

東京都中央区京橋2ノ8

明葉ビル

日本ペンクラブ内

振替東京164350番

電話京橋(56)7731番

「国際演劇月」の開催

来春三月を期して
全演劇活動の参加

ITIでは毎年三月を期して、国際的に「国際演劇月」The International Theatre Month(或いは演劇週間、演劇目)というものを挙行している。これは、かういふ催しをすることによって、演劇にたいする社会的関心を高めるとともに、演劇の国際的交流をはかり、各国間における相互の理解を深めることを意図しているのである。しかし、この企画は何ら強制的な意味合いをもつものでないから、ITI加入の各国はそれぞれ自国の実情に即してこの国際的企画に参加しているものであつて、国によつて盛大にやつていたりあるれば実現できずにいるところもあるが、アメリカなどは最も成功している国であつて、アメリカ全土にわたつて二十前後の演劇団体がこの催しに参加しているのである。

日本センターにおいても二回にわたる理事会においてこの問題を検討し、興行会社、劇場、劇団及び日本放送協会の賛同をえたので、いよいよ来春三月を期して、東京を中心にこの企画を展開する事となつた。従つて、三月の全演劇活動がこれに参加し、各自が自己の最高の芸術を創造するはずである。しかし、何分にも最初の金であるので第一回においては理想的な形

本会役員

戸田	高杉	菅	千	佐	大	南	九	久	小	川	勝	伊	儀	堀	土	林	泰	舟	達	蘆	安	北	河	吉	高
坂	中	橋	野	田	佐	田	江	保	堀	本	藤	藤	藤	内	方	橋	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤
康	高	藤	太	是	孝	元	治	万	康	一	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	藤	
二	司	雄	郎	卓	也	九	雄	郎	明	郎	清	成	郎	朝	夫	三	己	高	吉	一	吾	了	夫	八	俊

おいてこれをなし、主催者側の国際演劇協会（J.T.I.）はそれに協力する建前をとるものとする。

一、各企画については次のことが希望される。

（一）各団体の特色を發揮した最高の舞台であること。

（二）脚本は新旧を問わず、日本国民の美点と長所を示すと共に、人権尊重、ヒューマニティ、国際親善、平和思想などに通じるものであることが望ましい。

一、主催者側においては、参加演劇にたいし、脚本推薦、宣伝、観客動員等に尽力する。

「国際芸術会議」

明年九月、ヴェニスに於て
世界の芸術全分野を網羅して

昨年六月、イタリアのフロレンスにて開催のユネスコ第五回総会において、次のことが決議された。

「一九五二年度において、理事総長に次の権限が与えられる。——（一）芸術家の自由、（二）芸術家のユネスコ活動への協力、（三）芸術各分野における創造的な人々の業績についての国際的認識の獲得のための最善の方法を特別議案とする『国際芸術会議』（International Congress of the Arts）を企画し、本会議の企画及び運営にあたっては各国並びに国際的機関の協力を要請し促進すること。」

この決議にもとづいて、本年五月二十八日から三十日にかけて、パリ、ユネスコ会館において「準備委員会」が召集された。その委員会において具体案が起草され、その報告書がユネスコ理事総長ジェーム・トレス・ボデーの名において関係各方面へ配布された。日本では、十月下旬、駐日ユネスコ代表部を通じて、日本ペンクラブ、ITI日本センター等へと届けられた。

この報告書によつて「準備委員会」は、「国際芸術会議」の企画を満場一致で可決して、ユネスコ書記局から提出された「国際芸術会議」における議題を修正の上で採決した。この決議をすべての創造的芸術家（原則としてエッセイキヤント）演奏家のごとき芸術家（をも含む）に開放するのみでなく、芸術家と一般大衆との間の媒介的役職をなすに必要な組織（出版者の団体、美術商の団体、放送並びにテレビジョン会社等）からも代表をおくるやうに提案した。これら業者の代表は正式討議には参加しないが、必要に応じてその見解を披露する機会が与えられる。この準備

委員会の具体案が本年度ユネスコ総会に提出されて、「国際芸術会議」開催がいよいよ実現の路についたのである。報告書によると「国際芸術会議」の構想は、大体次のやうなものである。

この会議を施行に移すために、「名譽委員会」と「組織委員会」をつくる。前者は各国のユネスコ国内委員会と国際組織と折衝の上でユネスコが任命する。後者は次の組織を代表する六名をもつて構成する。

- 国際音楽会議 一名
- 国際演劇協会（ITI） 一名
- 国際建築家同盟及び国際近代建築会議（ICMA） 一名
- 画家・彫刻家・版画家 二名

これらの組織はそれぞれの組織を代表するに適當な、国籍の異なる五人の人のリストを提出する。これらの人々の資格は、創造的芸術家であるか、或いは創造的芸術家の特殊な問題及び活動にたいして十分な理解をもつ人であり、且つ仏語あるいは英語に堪能であることを条件としている。

ユネスコはこの五人の中から、地理的にうまく按配できるやうに考慮して、各組織にたいして二名宛選出、一名を委員、一名をその代理人とする。但し上記五つの分野にたいして、絵画、彫刻などの親密芸術の分野では、まだ国際組織ができていないので、各国内の美術家協会及び国際美術批評家協会が、適當な候補者のリストを提出することになっている。

こうして作られた「組織委員会」は、芸術会議そのものを組織する仕事に従う。

芸術会議への招請は、ユネスコ書記局が「組織委員会」と協力して、各国のユネスコ国内委員会から提出されたリストを基にして行つて、右の選出は、できる限り各種の国際組織との協力の下になすべきことが規定されている。

会議への出席者は一五〇名に制限されているが、その外にオブザーヴァの出席を認めている。開催地はヴェニスであるが、同地で二年ごとに開かれるフェスティバルと期日を同じくすることが考慮されている。会期は一九五二年九月下旬の六日間である。

報告書には出席者の旅費については明示してないが、原則的には各国においてそれぞれ処理すべきものと理解されるが、ただ「国際組織により親密芸術の場合は国内組織により」指名された若干名を、ユネスコの費用において招請することが主張された」とあるから、出席者のうち若干名の旅費はユネスコによつて

監事 北吉山内
久吉田村
住条川田
良秀義謙
三司三吉
*印は常任理事。尚、常任理事会は書記局を構成。

本会評議員

劇文学	秋山安三	久板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
文学	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
音楽	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
演劇	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
建築	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
絵画	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
彫刻	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
版画	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌
その他	山安三	板栄二	岩谷小波	岸田國一	小宮正一	久松義典	岸田國一	三宅宗昭	佐々木茂	新関良	佐々木茂	里見昌	関根昌	高橋昌	成瀬昌	内中昌	長山昌	山本昌	八木昌	米川昌

ユネスコ主催「国際芸術家会議」への参加

一九五〇年六月、イタリア・フイレンツェで開催されたユネスコの第五回総会で「芸術各分野における創造的な人々の業績についての国際的認識の獲得のための最善の方法を特別議案とする『国際

芸術会議』（International Congress of the Arts）の企画、開催が決議されました。この時点で日本はまだユネスコに加盟していませんでしたが、メキシコの文学者、政治家で第二代

ユネスコ総事務局長を務めていたハイメ・トレス・ボデー（Jaime Torres Bodet・一九〇二—一九七四）から外務大臣宛に、日本からも当会議に代表者を派遣するよう要請があり、文部省芸術課が対応に乗り出します。

当会議は名称を「国際芸術家会議」（International Congress of Artists）と改称され、二年後の一九五二年九月二十二日から二十八日、ヴェネツィアで開催。日本からはITI日本センターの内村直也と吉川義雄のほか、長谷川路可（画家）、清瀬保二（作曲家）、益田義信（画家）、佐藤武夫（建築家）が参加しました。

パトロネージの時代の終わりと国による支援への提言

同会議のレポートや声明などをまとめた『The Artist in Modern Society』(一九五二・ユネスコ刊)には、「法律の不備、経済的困窮、公権力による支援の欠如あるいは過剰な介入によって、文学・芸術の分

野全体に生じている多くの問題のいくつかを検討するため」「四十四カ国から二百人以上の代表者と十一の国際的な芸術分野の団体が招かれ、オブザーバーとして百五十人以上の芸術家が参加した」と記録されています。

開幕の挨拶でハイメ・トレス・ボデーは以下のように述べています。「パトロネージが失われようとしている今、国は支援に値する才能を掘り起こし、支援することによって、間もなく空席になるその場所を埋めなければなら

ない。しかし一方で、芸術が専門家や技術者の領域である以上、国家が創造そのものに介入する資格はないことを忘れてはならない。他方で、国はこうした技術者たちのために可能な限り最良の具体的な環境を整え

るよう努めなければならない。国の使命は、才能を方向づけることではなく、ましてや従わせることでもなく、学校や美術館を増やし、研究助成金や渡航助成金を与えることによって、その才能を育成することなのである」。

附はれるものように考えられる。

「国際芸術会議」に予定されている主なる議題は次のようである。
一、「芸術家に与えられている不十分な条件と財政的困難性」にたいする矯正の方法として、

(A) 万国著作権会議に関する計画を実現するための積極的研究、かかる協定を採用するに当つての、できるかぎり多数の国々の参加を実現するための積極的研究、及び芸術家に対する保護制度と調和せしめるための努力、

(B) 著作者の各種団体や協会にたいする援助。——ここでは軟貨国にて外国人著作者により獲得された印税の問題、文化交流(例えば、外国オーケストラ、劇団、演奏者、講師の招聘)における金銭上の決済において生ずる問題なども含まれている。
二、「設備、材料の高値による困難、スタディオオ入手に関する困難、及び不適合な税率」にたいする矯正方法として、

(A) この種の設備並びに材料(画家の材料、彫刻家の材料)の輸入にたいする便宜、
(B) 楽器及びオーケストラ楽譜の輸入にたいする便宜と、現代音楽のスコアの再生複製への補助金、
(C) 住宅の不足に備へて、国家による下記の施策。——スタディオオの確保、その適正な賃貸料。また芸術家の生涯が不定の収入と不測の危険あるものなる故の寛大な課税の規定。

三、「これらの状態下において、公共団体当局者並びに国家よりの不十分な援助」に対する矯正方法として、
(A) 観覧芸術、書籍、原稿、音楽作品などの展覧会の国際的交換に対する便宜、
(B) 芸術作品の出版、頒布、展覧、演出にたいする改善。それには出版にたいする課税の軽減、頒布にたいする障害の除去などの問題も言及。

(C) 官公吏、或いは半官公吏(この方を希望)たるを間はず公的權威者を招いて、彼らが文化的表示と文化的演出の編成を助成するため、とくにあらゆる種類の現代作品に挙げられるラジオ並びにテレビジョン番組にさらに大なる努力をすること、
(D) 商業的競争のない文化センターの設立並びに維持(例えば、各大都市にすくなくとも一つの劇場、音楽会場、展覧会場、文化映画館)さらに可阻なかり、芸術的催し物(音楽会、展覧会、劇上演)に経済的援助するように、地元当局者に奨励すること。

(E) 書籍、雑誌、映画、彫刻、楽譜、蓄音機のレコード、楽器、演劇材料のごときものを、外国へ送付、又は外国から受領することに便宜。
最後に、芸術家の精神的自由の問題を取りあげ、「國家は芸術

家にたいし、その政治的あるいは宗教的意見、並びに芸術的傾向のいかにいかかはらず、なんらの圧迫を加へることなく、且つ完全に公平無私なることを確保する」ことを議題としてある。

以上は議題の主なるものを要約し列挙したのであるが、この芸術会議は、芸術家の自由を精神的、物質的の両面から確保するとともに、芸術の自由なる国際的交流をはかるための種々の重要な問題を討議せんとするものやうであり、国際的規模における歴史の会合になることが予想される。

芸術の各分野において、観覧芸術は国際組織をもつてゐないのであるが、会議までにそれを組織する準備がなされるようであり、もしこの国際組織が作られるならば、五つの国際組織が存在することになるので、今回の会議を第一回として、「芸術と文字の国際会議」を恒久化せんとする意図もあるやうに予想される。

一九五〇年エディンバラにおける国際ペン大会には、日本から阿部知二、北村喜久が代表として出席したが、その大会における議題の一つ「作家と自由の理念」は、今にして思へば、この芸術会議の前提をなすものであり、その思想的骨格をつくるためのものであつたやうに考へられる。

国際演劇協会(I.T.I.)の日本センターである本会は、この報告書を受取つたとき、これはユネスコ国内委員会が中心となつて処理すべきものやうに理解されたが、日本ではまだ国内委員会が成立してゐない、会議の性質上本会単独で処理しえないものであつたので、書記局としては理事会に報告するにとどめて、その後の経過を待つてゐた。

ところが、幸い文部省芸術課で、この問題の促進に乗りだしてゐたのである。それはユネスコ理事部長ボデーの名において、日本外務大臣宛の書翰によつて、代表五名のリストを送るやうに要請してゐたからである。かくて文部省芸術課において、外務省文化課、文部省ユネスコ課の下に、代表の旅費は各国においてそれぞれ適当な方法によつて処理するやうに要請されてゐる。

本会では、この会議に基いて、本会理事会において、この問題を、代表の自費というやうなことで演劇外から代表一名をおく合にしたいといふことになり、その旨を演劇諸団体へ伝達して、意見を求めることになつた。

代表の人数については、最も適当な人を、最も民主的な方法で選ぶという建前に立つことが好ましいので、その人数についてはいづれ皆さんに広くおはかりする予定である。

歌謡伎		新国		新劇		能		オペラ		舞踊		真方		係行関		ユネスコ関係	
坂東三津五郎	市川右衛門	花柳章太	喜多川重	島田八重子	青島千春	山田村安	喜多川重	小谷八重子	伊藤正英	長谷川勘兵衛	金井忠次郎	小林富三郎	小戸四郎	森田一雄	大谷竹次郎	藤山愛一郎	コ関係

「世界演劇」へ寄稿

ITIの機関刊行物「世界演劇」(季刊)の編輯エイノ氏(フラスセル)より來信あり、同紙のために、歌舞伎、新派、新劇等の最近の舞台写真十数張及び一九五〇年秋より五一年夏までの一年間の日本演劇の活動報告を英文にて送致す。

尚、同紙にたいする日本における通話員を、河竹繁俊、北村喜八の両氏とすること、第三回理事會にて決定。

「世界初演」へ寄稿

ITI機関紙「世界初演」のために第二回分の原稿として、次の舞台の初演記録を送致す。「英の人」「渾氏物語」「霧の音」「天守物語」「はだかの舞台」「その秘密」「彼女は答へる」「宮太夫節」

ロクツフエラー三世

來朝中なりしロクツフエラー三世より、十一月上旬、本會會長高橋誠一郎氏招かれて、種々の質問を受け應答す。岡氏は日本

「例会」の件

來春一月から、毎月中旬、定期的に「例会」を開くことに致します。それは海外からの通信の報告、演劇の國際交流に関する意見の交換、海外から來朝の演劇人のある場合はその招待などを主とした、應接の茶會にする予定です。追つて期日は御通知いたしますから、奮つて御出席下さい。

の学術並びに文化活動を奨励したき意向のよし。

イタリア演出家よりの來信

ローマ在住の演劇批評家にして、演出者であるルチニャーニ氏より來信あり、現代日本演劇を研究したきよにて、日本演劇に關して英、仏、或いは独の言葉にて書かれた文獻及び写真の類を希望し、それと交換にイタリア演劇に關する書籍をおくる旨を言つてきた。(十一月五日ローマ発信)

日記抄

九月六日 アメリカにおける「青年藝術家會議」に出席の日本代表選出に關する相談會が文部省藝術課にて行われ、本會より北村理事長出席。

十月二日 アメリカの劇作家ポール・グリニャーニ氏來朝につき、それが歓迎についての打合せ會、早稲田演劇博物館の召集にて開かれ本會より書記局長出席。

十月十二日 ポール・グリニャーニ氏歓迎會、各文化團體、演劇團體の共同主催にて、毎日會館セント・ポールにて開催。

十月十八日 常任理事會。

十月二十四日 ロクツフエラー三世夫人、外交局長シーボルト夫人等、本會の案内にて新橋演舞場に新橋公演芸術祭参加の「はだか舞台」「天守物語」を観劇。

十一月十三日 第三回理事會。海外連絡などの報告、「國際演劇月」の件、「國際芸術家會議」の件。あとの二問題については、改めて理事會を開いて検討することとする。

同日 五時より、丸の内リッツにて、アメリカより歸朝されし本會會長高橋誠一郎氏、並びに今夏歐米を視察されし本會副會長古垣鉄郎氏の歸朝の祝ひをかねて、岡氏の土産話をきく會を開く。

十一月十九日 文部省藝術課の召集にて「國際藝術家會議」に關する打合せ會あり、本會より北村理事長出席。

十一月二十二日 第四回理事會「國際演劇月」開催の件、並びに「國際藝術家會議」代表選出の方針を決定。(別項参照)

十一月二十四日 プリテイアッシュ・アランシールのスコット氏を新橋演舞場の「東おどり」に案内す。

編集後記

◆本會の通信第一号(十一月附、二頁)と第二号(十二月附、四頁)をお送りします。

◆本會の規約、成立經過、オスロ大会報告などをまとめた小冊子を作製中ですが、この小冊子を通信第一号とし十一月下旬にお手許へとくように予定してまいりました。小冊子の方がまだ出来あがりませんので、取りあえず通信だけをお送りいたします。

◆年末御多忙の折ですが、各項目ともに重要な問題が多いので丁寧に御説明とりの上御意見をお寄せ下さい。

◆本會は発足早々のこととて、いろいろと不備な点も多く、評議員その他の人選においても漏れている方もあり、會の財政的基礎も固立していませんが、それらの諸問題は會員諸君の御協力によつて順次に整備してゆきたいと思ひます。本會が日本の演劇活動に海外へ紹介する機関として、全演劇人の會として発展するやうに、建設的な意見をどしどしお寄せねがいと思ひます。

世界各国の新作情報を紹介する季刊誌「世界演劇」

「世界演劇」(World Theatre)は、世界各国の舞台芸術の動向を多くの写真とともに紹介する季刊誌です。一九五一年十一月発行の「一丁一通信」一号に「すでに三冊発行」とあるので、

創刊は一九五〇〜一九五一年頃以降、一九七〇年代まで刊行されてきたと思われる。版元は國際的學術専門出版社エルゼビアのブリュッセル支社、創刊から一九六八年まで編集を

務めたのは、俳優で「一丁ベルギー・センター」初代ディレクターのルネ・エノ(René Enon) (一九一八〜二〇二二) でした。エノは、「一丁」創設メンバーで、ベルギー国立劇場を創設したこと

でも知られています。「一丁一通信」二号には「エイノ氏(フラスセル)より來信あり、同誌のために、歌舞伎、新派、新劇等の最近の舞台写真十数張及び一九五〇年秋より五一年夏

までの一年間の日本演劇の活動報告を英文にて送致す」とあり、当時、「一丁」日本センター副會長を務めていた河竹繁俊と北村喜八が同誌に關する連絡員に決定されたと記されています。

ITI日本センター設立時の役員・評議員

*印は常任理事。尚、常任理事会は書記局を構成。(肩書きは編集部調べ)

本会役員 計34人

◆会長

高橋誠一郎 (経済学者・日本藝術院院長・国立劇場会長・文部大臣)

◆副会長

古垣鉄郎 (ジャーナリスト・外交官)

河竹繁俊 (演劇学者・早稲田大学教授)

◆理事長

北村喜八 (演出家・劇作家)

◆理事

安藤鶴夫 (小説家・演劇評論家)

蘆原英了 (音楽・舞踊評論家)

遠藤慎吾 (演劇評論家・編集者) *

舟橋聖一 (小説家)

秦豊吉 (東京宝塚劇場社長・帝国劇場社長)

林弘高 (吉本興業社長)

土方正巳 (ジャーナリスト・評論家) ※「己」は誤植

堀内敏三 (作詞家・作曲家・音楽之友社社長)

俵藤丈夫 (東宝舞台社長)

伊藤嘉朗 (舞台美術家)

勝本清一郎 (文芸評論家)

川端康成 (小説家)

小松清 (評論家・フランス文学者)

久保田万太郎 (小説家・劇作家・俳人・文学座創立者)

丸岡明 (小説家・能楽評論家)

南江治郎 (詩人・人形劇研究家)

大田黒元雄 (音楽評論家) *

佐佐木孝丸 (俳優・演出家・劇作家・日本俳優連合理事長) *

千田是也 (演出家・俳優・劇団俳優座代表・日本演出者協会理事長・日本劇団協議会初代会長)

菅原卓 (劇作家・演出家)

杉野橋太郎 (演劇研究家・早稲田大学教授)

高橋歳雄 (都民劇場理事)

田中高司 (三越劇場支配人)

戸板康二 (演劇・歌舞伎評論家・推理作家・随筆家) ※「坂」は誤植

内村直也 (劇作家・翻訳家) *

山田肇 (演劇学者・明治大学教授)

吉田謙吉 (舞台装置家・映画美術監督・衣裳デザイナー)

吉川義雄 (演出家・芸能評論家) *

◆監事

北条秀司 (劇作家・演出家・日本演劇協会会長)

久住良三 (毎日新聞記者・演劇評論家)

本会評議員 計61人

●劇文学

秋山安三郎 (演劇評論家・随筆家)

浜村米蔵 (歌舞伎・演劇評論家)

久板栄二郎 (劇作家・脚本家)

岩田豊雄 (演出家・小説家・文学座創立者)

金子洋文 (小説家・劇作家)

川口松太郎 (小説家・劇作家)

菊田一夫 (劇作家・演出家・プロデューサー・東宝取締役)

岸田国士 (劇作家・小説家・文学座創立者)

小宮豊隆 (独文学者・文芸評論家・演劇評論家)

久米正雄 (小説家・作家・俳人)

正宗白鳥 (小説家・劇作家・文学評論家)

光吉夏彌 (翻訳家・絵本研究者・舞踊評論家)

三宅周太郎 (演劇評論家)

三宅襄 (能楽研究家・評論家)

新関良三 (ドイツ文学者・演劇研究者)

佐佐木茂索 (小説家・編集者・文藝春秋新社社長)

里見淳 (小説家)

関口次郎 (劇作家・演出家)

澁沢秀雄 (東宝取締役会長・松竹相談役・随筆家)

高田保 (劇作家・演出家・随筆家)

辰野隆 (フランス文学者・随筆家)

成瀬無極 (ドイツ文学者・随筆家・劇作家)

内藤濯 (フランス文学者・評論家)

中島健蔵 (フランス文学者・文芸評論家)

長与善郎 (小説家・劇作家・評論家)

山本有三 (小説家・劇作家)

八木隆一郎 (劇作家・脚本家)

米川正夫 (ロシア文学者・翻訳家)

●歌舞伎

坂東三津五郎 (七代目・歌舞伎俳優)

市川猿之助 (二代目・歌舞伎俳優)

中村吉右衛門 (初代・歌舞伎俳優)

●新派・新国劇

花柳章太郎 (俳優)

喜多村緑郎 (初代・俳優)

水谷八重子 (初代・俳優)

島田正吾 (俳優)

辰巳柳太郎 (俳優)

●新劇

青山杉作 (俳優・演出家)

東山千栄子 (俳優・日本新劇俳優協会初代会長)

杉村春子 (俳優)

滝沢修 (俳優・演出家・劇団民藝創立者)

田村秋子 (俳優)

山本安英 (俳優)

●能

観世華雪 (観世流シテ方楽師)

喜多六平太 (十四世・喜多流シテ方楽師)

野口兼資 (宝生流シテ方楽師)

梅若実 (二世・観世流シテ方楽師)

●オペラ

藤原義江 (オペラ歌手)

●バレエ

貝谷八百子 (バレエダンサー・振付家)

小牧正英 (バレエダンサー・振付家)

●舞踊

花柳寿輔 (二世・花柳流日本舞踊家)

伊藤道郎 (ダンサー・振付家)

●裏方

藤波与兵衛 (三代目・藤浪小道具社長)

長谷川勘兵衛 (十一代目・長谷川大道具株式会社社長)

金井忠次郎 (金井大道具株式会社社長)

●興行関係

小林富佐雄 (帝国劇場社長・東宝社長)

小林一三 (宝塚歌劇団・阪急東宝グループ創業者)

城戸四郎 (映画プロデューサー・松竹会長)

森岩雄 (映画プロデューサー・脚本家・東宝副社長)

永田雅一 (映画プロデューサー・大映社長)

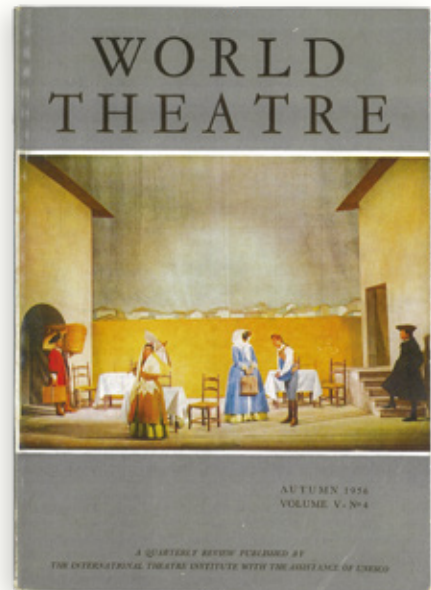
大谷竹次郎 (松竹創業者)

●ユネスコ関係

藤山愛一郎 (外務大臣・日本商工会議所会頭・初代日本航空会長)

日本の新作も掲載された季刊誌『世界演劇』

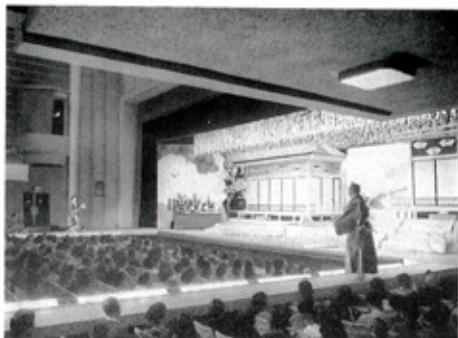
『世界演劇』1956年秋
第5巻・第4号



表紙は、ルキノ・ヴィスコンティ演出のカルロ・ゴルドーニ作『宿屋の女主人』（一九五二）。「イタリヤの舞台美術」「小説の舞台化」「演出家の自由」などの原稿のほか、『日本の歌舞伎劇（The Kabuki Theatre of Japan）』（一九五六）という著書もあるA・C・スコット（Adolph Clarence Scott・一九〇九〜一九八五）の「現代中国における古典劇」も掲載されています。

世界の新作を紹介する「ワールド・レビュー」では、日本センター理事長の北村喜八が、菊五郎劇団『妹背山婦女庭訓』と劇団民藝『遠い凱歌』を紹介。

また、巻末には過去七号で取り上げられた劇作家名、記事、写真（図版）の一覧も掲載されています。



Incognito (A Couple of Hills - Les Deux Collines), Kabuki, Kikugoro Troupe, Shimbashi Embryo Theatre, Tokyo, 1955.

school is the actress Yarko Mizutani. The Shingai presented *The Ten-hour of the Angel Moon* in a theatre usually reserved for the Kabuki; an adventurous project which won a failure commercially in spite of good reviews. The scene of this play is Okinawa and most of the original dialogue is in English, a part being in Japanese. This presentation followed the original, the roles of American soldiers being filled by foreign actors residing in Japan.

With the modern play called *Shingai*, three companies have a high standing—Bangko, Haiyu and Mingei—and have become professional. There are more than twenty others, either half-professional or amateur. The plays performed by the Shingai are works by contemporary Japanese writers who treat

modern subjects or translations of foreign plays.

Handel presented by the Bangko troupe received favourable notice. The adaptation and production by Tsunao Fukuda (just returned from England where he had seen it at the Old Vic) interpreted Handel as a positive character and so gave to the action and speech an unaccustomed speed.

Our young writers have produced some remarkable works, few of which are worthy of special mention. *Devil* (The Slave Hunt) performed by the Haiyu troupe drew attention as a modern satirical play of ideas.

The same troupe successfully presented *A Dancing Pair for Two* in four acts by Yoji Koyama picturing Japanese post-war life. *For Any*

Song of Triumph by Naoya Uchiuma was performed by the Mingei troupe at the Haiyu Theatre. This play, which begins in the present and goes back in time to 1929, describes the events and changes which have marked the life of the family of a partner in a shipping company. This unusual method around much debate and interest, but the underlying theme is obscure and the emotional appeal weak. The latest work by Kusun Fukuda *Light and Dark* was presented by the Bangko troupe in a local insurance company's hall. Secret and illicit love affairs of the past are gradually brought to light in an exciting way. The drama is made poetic by the use of rhetorical dialogue.

KIRACHI KIWAMURA

SWEDEN

THE biggest event of the year 1955-56 in the Swedish theatre-world was the first-night performance of Eugene O'Neill's posthumous and hitherto unknown *A Long Day's Journey into Night* at the Royal Dramatic Theatre, Stockholm. The play

was donated, just before the author's death in 1953, to the theatre which for more than three decades has presented his plays with such success. O'Neill's gratitude to this theatre and to the Swedish public was also expressed in the condition

that no author's fee for this performance was to come into the question. The tidings have now gone to an O'Neill stipend for the actors at the Dramatic Theatre. The theatre's thanks for the gift took the form of a brilliant performance directed by Bengt Ekroth, a congenial interpretation of the roles being given by



For Any Song of Triumph - Chants de Triomphe Incognito, Naoya Uchiuma, Shingai, Mingei Troupe, Haiyu Theatre, Tokyo, 1955.

vie quotidienne. La figure de prose de cette école est une œuvre, Yarko Mizutani. Le Shingai a présenté *La Petite Maison de Thé* dans une salle habituellement réservée au Kabuki; conception hasardeuse, qui aboutit à un échec financier malgré des comptes rendus favorables. Comme on le sait, le texte se joue en japonais et le dialogue original est écrit partie en anglais, partie en japonais. La pièce a été donnée telle quelle, les rôles de soldats américains étant assumés par des acteurs étrangers résidant au Japon.

Dans le domaine du Shingai, trois compagnies de qualité — Bangko, Haiyu et Mingei — sont devenues professionnelles. Il en existe plus de vingt autres, tantôt semi-professionnelles, tantôt d'amateurs. Le répertoire du Shingai comprend des œuvres japonaises

contemporaines à sujets actuels et des pièces étrangères.

Le *Handel* présenté par la compagnie Bangko fut bien accueilli par la critique. L'adaptation et la mise en scène de M. Tsunao Fukuda (qui revenait d'Angleterre et avait vu l'Old Vic) mettaient l'accent sur le côté positif du héros, interprétant à l'action et au dialogue un rythme plus rapide que de coutume.

Quant aux jeunes écrivains de chez nous, ils ont donné nombre d'œuvres remarquables dont quatre sont à signaler tout particulièrement. Présenté par la compagnie Haiyu, *Devil* (La Chasse aux Esclaves) nous livra ses idées et sa portée satirique. La même troupe nous a donné *Un Bal pour Deux*, quatre actes de Yoji Koyama montrant une vaste fresque de la vie japonaise d'après

guerre. Le succès du Mingei s'est produit au théâtre Haiyu dans *Chants de Triomphe Incognito* de Naoya Uchiuma. La pièce, qui débute de nos jours pour remonter jusqu'en 1929, fait se dérouler la cascade d'événements qui ont marqué la vie de la famille d'un associé d'une compagnie maritime. Ce prototype théâtral nous a fait voir la discussion, mais le thème fondamental est obscur et le ressort émotionnel faible. La dernière œuvre de Kusun Fukuda, *Light et Dark*, fut interprétée par la compagnie Bangko dans le local d'une société d'assurances. Des intrigues amoureuses du passé, secrètes et illicites, sont dévoilées graduellement d'une manière fort poétique. Le dialogue rythmé donne à la pièce une tenue poétique.

KIRACHI KIWAMURA

SUÈDE

L'ÉVÉNEMENT le plus marquant de la saison 1955-56 fut la création de l'œuvre posthume d'Eugène O'Neill *A Long Day's Journey into Night* au Théâtre Dramatique de Stockholm. Peu avant sa mort, l'auteur avait fait don de sa

pièce à ce théâtre qui, pendant plus de trente ans, avait présenté ses œuvres avec tant de succès. O'Neill avait fait don de sa reconnaissance au Théâtre Dramatique et au public suédois en stipulant qu'aucun droit d'auteur ne serait dû pour ces représentations. Les recettes alimentèrent à présent une « fondation O'Neill » pour les acteurs du Théâtre Dramatique. La gratitude de la troupe se traduisit par une représentation brillante, mise en scène par Bengt Ekroth, et par une interprétation vive et brillante assurée par ses meilleurs acteurs.

菊五郎劇団『妹背山婦女庭訓』

公演日 = 1955年9月 会場 = 新橋演舞場
(右) 大判事清澄 = 二代目尾上松緑
(左) 太宰後室定高 = 三代目市川左團次

劇団民藝『遠い凱歌』

公演日 = 1956年3月2日〜18日
会場 = 俳優座劇場 作 = 内村直也
演出 = 岡倉士朗 出演 = 滝沢修・高野由美ほか

『世界演劇』1961年春
第10巻・第1号



本号は「二十世紀の仮面」特集。
クロード・レヴィ・ストロースによる論考「さまざまな人の顔」で始まり、第一部「先住民族の仮面」、第二部「演劇における仮面」と続きます。ベルリナー・アンサンブルの仮面製作を担当していたエドワード・フィッシャー (Edward "Eddy" Fischer・一九一六～一九九二) による製作過程の写真入りの原稿「ブレヒトと仮面」や、ゴッリ原作、アルチュール・アダモフ (Arthur Adamov・一九〇八～一九七〇) 作、ロジェ・プランション演出の『死せる魂』における付け鼻についての考察「プランションの鼻」などが掲載。

俳優座『巨人伝説』と芸術座『がしんたれ 青春篇』評を日本センタ―理事の遠藤慎吾が寄稿しました。



The irresponsibility of the Japanese nation, personified by a Giant, at the cost of the War. This statue stands past and present, one side and the other.
L'irresponsabilité de peuple japonais, représenté lui par un Géant, a été à l'origine de la Guerre. Cette statue mélange présent et passé, productions et films.

Waves of Setsum and Drama in the Night, Brecht's *Waiting for Godot* and Ionesco's *Rhinoceros* have also been staged, *Rhinoceros* being best received and *The God Women of Setsum* favorably commented upon. One of the main topics of the year in the Shingeki theatre is the enthusiasm with which all the people connected with Shingeki took part in the Anti-Security Pact Movement. In May, all members of Shingeki participated in the demonstrations, and many were wounded after being attacked by the Rightists. By this active participation, Shingeki people, especially the younger ones, have become more sensitive than ever to politics. As these critics never agree in their judgment of Japanese plays, this shows that there is something to be said about Japanese dramatists. Brecht's: *The God*

After their return home, each member of the visiting team reported the admirable development of this country's politics, education (dramatic education, above all), and society.

Last but not least, the success of Jean-Louis Barrault's Théâtre de France must be mentioned. They visited our country with five repertory plays, mainly classics, including Molière's *Le Fâcheux*, Shakespeare's *Hamlet* and so on. The most popular play was Paul Claudel's *Le Lys de Chanaan*. Barrault and his company made a deep impression, their movement being more rapid and their style of acting more modern than that of the Moscow Art Theatre which had come here the previous year.

SHINGO ENDO

U. S. S. R.

International Exchange Visits

AN unusual autumn marked the opening of the new theatrical season in Moscow: snow fell in the middle of October! Yvette Chauvior,

jeune danseuse of the Paris Opéra visiting the capital on tour, expressed her surprise and delight at this: a true Parisian, she was very happy to have caught a glimpse of the Russian winter. Yvette Chauvior

danced with Yuliy Aglajoff in the theatres of Moscow, Leningrad, Riga and Vilnius.

Many other foreign artists were visiting our country at the same time. We were therefore able to enjoy, in our own land, performances given by the Romanian Opera and Ballet Theatre company:

Goshiki (The Simplicity - Le Japon), Kamei Kikaku, M: Kamei Kikaku, D: Kikaku Ito, Goshikusa, Tokyo, 1960.



An actress finds time to write poems while caring for his living. This is the author's own autobiography, who became a playwright at the age of 21. Un orphelin écrit des poèmes en même temps qu'il gagne sa vie. C'est l'autobiographie de l'auteur, devenu dramaturge à 21 ans.

Japanese Kyohei Abe par le Haiyusa également, *Blaise Spitz de Noël* Coward par le Bungaku-za ou Théâtre Littéraire, et *Un Oiseau au Japon* (Tori-tori-Tokugawa-Nai) du Japonais Sumie Tanaka par le Haiyusa encore. Aucune de ces pièces pourtant n'obtient une polémique unanime et ce partage de la critique prouve que les auteurs japonais sont dignes d'admiration.

Furent également représentées: *Le Bonnet d'âne* de St-Tobias ainsi que *Tombeau dans le Nid de Brecht*, *En attendant Godot* de Beckett et *Rhinocéros* d'Ionesco qui, de toutes ces pièces, obtint le meilleur accueil. L'un des principaux événements de l'automne en ce qui concerne le théâtre Shingeki fut l'enthousiasme avec lequel tous les sympathisants du Shingeki prirent part au

Mouvement de protestation contre le Pacte de Sécurité. Au mois de mai, tous les membres du Shingeki participèrent aux manifestations et beaucoup d'entre eux furent blessés par les «droiteurs». Cette protestation active des membres du Shingeki les a rendus — et par là même — plus sensibles à la politique.

En automne, de nombreux membres influents du Shingeki ont, sur invitation de la Chine communiste, visité en aéroport sa capitale des représentations. A leur retour, chacun d'eux relate le remarquable développement de la Chine nouvelle dans le domaine politique et social ainsi que dans le domaine théâtral, principalement en ce qui concerne l'éducation dramatique.

En outre, le dernier événement de l'année et non le moindre fut le succès remporté par Jean-Louis Barrault et son Théâtre de France. Il tourna dans notre pays avec cinq pièces de son répertoire, classiques pour la plupart, et parmi lesquelles: *Le Fâcheux* de Molière, *Le Misanthrope* de Molière et *Hamlet* de Shakespeare. La pièce la plus appréciée du public fut *Le Lys de Chanaan* de Paul Claudel. Barrault et sa compagnie firent sensation, d'autant que leur cyclisme et style d'interprétation étaient plus rapides et plus modernes que ceux du Théâtre d'Art de Moscou qui était venu chez nous l'année précédente.

SHINGO ENDO

U. R. S. S.

Exchange International

UN automne inattendu a marqué le début de la nouvelle saison théâtrale à Moscou: la neige est tombée vers la mi-octobre! Yvette

Chauvior, première danseuse de l'Opéra de Paris en tournée dans la capitale, en a exprimé sa surprise et sa joie: en vraie Parisienne, elle a été fort heureuse d'avoir ainsi goûté l'hiver moscovite. Yvette

Chauvior dansa avec Yuliy Aglajoff dans les théâtres de Moscou, de Leningrad, de Riga et de Vilnius.

A la même époque, bien d'autres artistes étrangers visitèrent notre pays. C'est ainsi que l'on apprécia beaucoup chez nous les spectacles du Théâtre Roumain d'Opéra et de Ballet: *Genius de Brest*, *Odette*

俳優座『巨人伝説』

「戦争の原因として巨人に擬人化された日本国家の無責任さ。過去と現在を交錯させ、スライドやフィルムで映し出す風刺作品」

公演日＝1960年4月4日～30日

会場＝俳優座劇場 作＝安部公房

演出＝千田是也 美術＝安部真知

出演＝矢野宣・岸輝子・田中邦衛・市原悦子ほか

芸術座『がしんたれ 青春篇』

「ひとりの孤児が生活のために仕事をしながら、時間を見つけて詩を書く。21歳で劇作家になった著者自身の自伝」

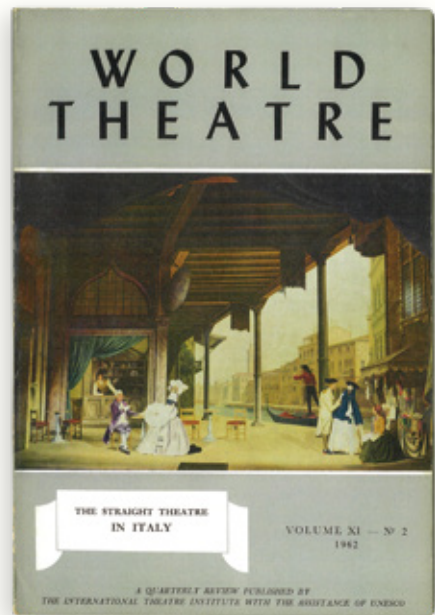
公演日＝1960年10月～1961年

会場＝芸術座

作・演出＝菊田一夫 美術＝伊藤薫朔

出演＝久保明・八千草薫・榎本健一・六代目三遊亭圓生・土田早苗・森光子ほか

『世界演劇』1962年夏
第11巻・第2号



「イタリアのストリート・プレイ」特集の表紙は、ジョルジョ・デ・ルッロ (Giorgio De Lullo・一九二一〜一九八一) 演出、ゴル・ドローニ作『レ・モルビノーゼ (Le Morbino)』(一九六〇) だす。

巻頭言は、四十年にわたりローマのエリゼオ劇場の支配人を務めたヴィンチェンツォ・トッラーカ (Vincenzo Torraca・一八八七〜一九七九) の「ジョルジ・ストレーレル (Giorgio Strehler・一九二一〜一九九七) とミラノ・ピッコロ座を作ったパオロ・グラッシ (Paolo Grassi・一九一九〜一九八一) も「成功した実験——ミラノのピッコロ座」を寄稿しています。

文学座『十日の菊』と俳優座の『黄色い波』について書いたのは、演劇・舞踊批評家の日下令光でした。



Table no. 10 (The Christians of the Tenth Day — Le Chrysanthème du Dixième Jour), Yukio Mishima. M: Takao Matsuzawa. D: Kinuko Ito. Bungakku Company, Daitchi Seimei Hall, Tokyo, 1961.

Writers in their fifties whose literary activities have survived the war are rare compared to all the newcomers. After a long silence, Yūji Koyama makes a return with *Kimi Nami* (Yellow Wave). In a realistic style he relates the vicissitudes of Kuri, the old military poet near Hiroshima, indulging in a touch of sentiment when he hopes that the poet activities will not become too warlike while so many victims still bear physical traces of the atomic bomb.

While the Bungakku company presented *Table No. 10*, and the Haiyusa company, *Kimi Nami*, the Mingi troupe revived *Enchanted Ti* (Land covered with volcanic ash), which was first performed in 1939. In his play, Sakae Kubo (who committed suicide after the war) chose the style of social realism to depict how, towards 1939, intellectuals and peasants were oppressed by the capitalist economy and feudal

financial system. The Mingi's Japanese dramatists, including the young ones, roughly fall into three categories divided, from Left to Right, among the Mingi, Haiyusa and Bungakku companies.

Of plays from abroad performed in 1961 we should mention: Tennessee Williams's *On the Waterfront*, Noel Coward's *Nude with a Violin* and Shakespeare's *Julius Caesar* at the Bungakku Theatre, *The Mad Women of Chailly* by Jean Giraudoux at the Haiyusa, *A Few from the Bridge* by Arthur Miller and, a major success, *Heavenly Bodies* by Alexis Arbasov at the Mingi.

The plays of Williams, Miller, Anouilh and Giraudoux are not so often talked as before and it was only after a long absence that Sartre was seen again, with his play *The Prisoners of Illness* given by a small company. But 1961 introduced Arbasov and Wladimir. The latter is certainly the man of the moment in the Shingeki world; students of the Bungakku gave us his *Chorus Song with Rely and I'm Talking About Jerusalem*, while a few months ago the Mingi produced *Rust*.

Actors such as Haruo Sugawara, Osamu Takizawa, Jukichi Uno, Eitaro Otowa and Eijiro Tono, who are all in their thirties, are still very active. As for the young ones, they suffer from a lack of good parts in which to do justice to their talents. Tatsuya Nakadai seems the most promising of all, and Kōryū Senda is piling up successes both as an actor and producer.

YOSHIMITSU HIRASHITA

Kimi Nami (Yellow Wave — Vague Jaune), Yūji Koyama. M: Kōryū Senda. D: Senta Aokura. Haiyusa Company, Tokyo, 1961.



Les auteurs d'une cinquantaine d'années qui continuent sur leur lancée d'avant la guerre ne sont pas nombreux, comparés à tous les nouveaux venus. Après un long silence, Yūji Koyama attire notre attention avec *Kimi Nami* (Vague jaune). Dans un style réaliste, il décrit les vicissitudes de Kuri, l'ancien poète militaire proche de Hiroshima. Non sans un peu de « sentimentalisme », il relate que les activités du port ne redevenaient par trop guerrières, alors que tant de victimes conservent encore dans leur corps le souvenir de la bombe atomique.

Tandis que le Bungakku présentait *Table No. 10*, et le Haiyusa *Kimi Nami*, le Mingi, lui, reprenait *Enchanted Ti* (Terre couverte de cendre volcanique), dont la « première » eut lieu en 1939. Sakae Kubo (qui s'est suicidé après la guerre) y montre, à la manière du réalisme social, comment, vers 1939, les intellectuels et les paysans étaient opprimés par l'économie capitaliste et un régime féodal de type féodal. L'invasion du Mingi de réviser le réalisme socialiste au théâtre avec cette pièce ne lui a pas trop mal réussi, puisqu'elle a battu, en 1961, tous les records d'affluence. Et c'est d'ailleurs un vaste courant dans ce sens.

Les dramaturges japonais, y compris les jeunes, peuvent être, grosso

modo, répartis en trois catégories, que se partagent, de gauche à droite, Mingi, Haiyusa et Bungakku.

Parmi les pièces étrangères jouées en 1961, nous retiendrons : *La Douceur d'Opéra* de Tennessee Williams, *Nu avec un Violon* de Noël Coward et *Julius César* de Shakespeare au Bungakku, *La Falla de Chailly* de Jean Giraudoux au Haiyusa, *Je de Paul d'Arthur Miller* et — succès majeur — *Heavenly Bodies* d'Alexis Arbasov au Mingi. Les œuvres de Williams, Miller, Anouilh, Giraudoux apparaissent toutes souvent à l'affiche, et c'est après une longue absence que Sartre nous est revenu avec *Les Prisonniers d'Illness*, présentée

par une petite troupe. Mais 1961 nous a révélé Arbasov et Wladimir. Ce dernier est vraiment l'homme à la mode dans le monde du Shingeki : les élèves du Bungakku nous ont montré, de lui, *Charles Song with Rely* (Chorus d'Israël au port) et *I'm Talking About Jerusalem* (Je parle de Jérusalem), et le Mingi, il y a quelques mois, *Rust* (Racines).

Des acteurs comme Haruo Sugawara, Osamu Takizawa, Jukichi Uno, Eitaro Otowa, Eijiro Tono, qui ont tous dans la cinquantaine, restent très actifs. Quant aux jeunes, ils souffrent d'un manque de bons rôles capables de mettre leurs qualités en valeur. D'entre eux, Tatsuya Nakadai paraît le plus riche en promesses. Kōryū Senda, le fondateur du Haiyusa, cumule les succès comme metteur en scène et comme interprète.

YOSHIMITSU HIRASHITA

文学座『十日の菊』

公演日 = 1961年11月29日〜12月17日

会場 = 第一生命ホール 作 = 三島由紀夫

演出 = 松浦竹夫 美術 = 伊藤薫

出演 = 杉村春子、中村伸郎、有馬昌彦、岸田今日子、北城真記子、荒木道子、三津田健ほか

俳優座『黄色い波』

公演日 = 1961年5月14日〜7月20日

会場 = 俳優座劇場 作 = 小山祐士

演出 = 千田是也 美術 = 朝倉 摂

出演 = 東野英治郎、村瀬幸子、大塚道子、武内亨、仲代達矢ほか

第一回「国際演劇月」と「現代世界演劇写真展」

一九五二年の第一回「国際演劇月」開催直前の三月一日に発行された「ITI通信」では、当初の予想以上に参加公演が拡大し、「東京および関西のほとんどすべての演劇活動が『国際演劇月』参

加」の名のもとに全力を傾注することとなった」と書き出している。二カ月前に発行された前号の「ITI通信」では、「国際演劇月」の開催決定を知らせるとともに、「会員諸氏から積極的な

意見や希望をどしどし聞かせていた」とあることから、短期間の間に各劇場・劇団などの賛同が得られ、迅速にプロジェクトが進行したことがうかがえます。また、並行して、ITI日本

センターが独自に企画した「現代世界演劇写真展」(於・日本橋三越)の準備も行われました。この写真展は、イギリス、アメリカ、フランス、カナダ、デンマーク、ベルギー、フィンランド、ソ

連などのITIセンターから、新作の舞台写真約三百点を借りて開催されました。戦争によって世界の演劇についての情報が断たれていた十余年の空白を埋めようとする強い思いが感じられます。

INSTITUT
INTERNATIONAL
DU THEATREINTERNATIONAL
THEATRE
INSTITUTE国際演劇協會
I · T · I 通信

No. 3

March 1, 1952.

The Japanese
Centre of I.T.I.Room No.512.
Meiji Seika Bldg
No. 2, Kyobashi,
Chuo-ku, Tokyo.

国際演劇協會

日本センター

東京都中央区京橋2ノ8

明葉ビル

郵便 東京 164350 番

電話 京橋(55) 7731 番

「国際演劇月」の壯観

国際的脚光をあびる
日本の全演劇活動

本年はじめて日本においても「国際演劇月」に参加することとなり、演劇諸団体の積極的な賛同をうけるにいたつたので、ここに三月を中心として、東京および関西のほとんどすべての演劇活動が「国際演劇月参加」の名のもとに全力を傾注することとなつたので、この企画は予想以上に壯観なものになりつつある。

この企画の目的とするところは(一)日本演劇も国際的な企画に参加するという認識は、日本演劇を孤立感から解放し、世界の文化に繋がるという自覚をよびおこし、国際的な親密感を深めるのに役立つことであり、(二)三月、社会的な関心を演劇に集中することによつて、演劇活動を鼓舞することであり、(三)演劇創造者側には、全力を傾け、熱情を注いで、最高の舞台をつくらうとする意欲をおこさしめることであり、(四)演劇の国際的交流を通して、国際的理解を深めることであり、それには各国のすぐれた戯曲の上演されることが、より直接的に役立つであろうが、世界の各国民、各民族がたがいに知りあうという「国際的理解」こそ、平和のためのゆるぎない基礎となるものである。

このような高い目的は、一朝にして達しうるものではない。しかし、世界のすべての演劇人の熱意の結集が、それを可能にするであろう。日本においても本年度の企画は、この問題にたいして、一應の懸念をとり除いたこととなる。

もちろん本年度は第一回のことであり、種々の面において不十分な點もあろうが、この企てが年一年とくりかへされてゆくうちに、演劇が活気づき、質的に向上し、劇作が振興し、この企画もつづいていくことが期待されるのである。

日本演劇はこの企画をとおして国際的視野のなかにおかれ、国際的批判にさらされることになるが、それは歌舞伎、能、文楽などの日本伝統演劇が、世界演劇のなかにどのやうに位置づけられるかの問題につながつてくる。「能」は本年度の企画に、全流こそつて参加し、東京および関西において十七の舞台を展開することになったが、それだけでも一大壯観であつて、能のルネサンスを思はしめるものがある。「能」は、新しく世界演劇のなかでどういう位置を占めることになるであろうか。

今度の企画にたいして「国際演劇月」というレッテルをはるだけで、普段の興行と變りがないおやないかという向きもあるかもしれぬ。まさにその通りである。しかし、ITIはいかなる意味の「統制」もなしてはならない。それが厳として守らるべき根本精神である。従つて、この催しにあつては、各団体の上演企画を指示したり拘束したりしないし、又参加資格や脚本内容を審査したりするやうなこともしない。すべてを創造者側の自主的責任と熱意にまかすのであり、舞台の成果も内容の適不適も、観客の批判にゆだねるのである。かくすることが、演劇を向上させる最も根柢的な力となるであろう。

ただ、来年度から、非専門劇団が参加するとなると、参加のための一定の「枠」というものを設ける必要がある。また、将来、最も優秀な舞台を褒賞する制度の設けることが望ましいが、それは事前の審査ではなく、成果にたいする賞讃であり、ねきらひであるべきであろう。

今度の日本の参加にたいして、世界各国から暖かい好意にみちた激勵がよせられてつづつある。パリのユネスコ本部にあるトレス・ボデー博士から、一月下旬、電報で早くもメッセージが寄せられた。元のメキシコ文部大臣であり詩人であるボデー博士、今、国際文化の中心的存在として世界の焦點のなかにおかれている博士から、いち早く電報によつてメッセージの送られてきたことは、ユネスコの事務局長として演劇をとおしての国際理解という問題に、いかに強い関心をいだいてゐるかの証左である。つづいて、アメリカ、イギリス、スイス、ノールウェー、デンマーク、ギリシャ、オーストリアなどの著名演劇人から十七通のメッセージが次々と航空便で到着しつつある。

尚、三月の演劇月に關聯して、「現代世界演劇写真展」を企画したが、これはこの十餘年間に於ける海外演劇にたいする知識の空白を、多少でも埋めた意図にもとづくものである。これに對し、在東京のCIEや英、佛、カナダなどのミツシヨンから、好意的な援助をえつつあるが、海外の各センターに對する本会の出品依頼にたいして、期日が短かつたにかゝらず、英、米、デンマーク、ベルギー、ノールウェー、遠くフィンランドなどから、最近上演された舞台面の写真がおくられてきている。

日本センターは各団センター宛に直接依頼状を出すとともに、パリ本部からも各団センター宛に依頼状を出してほしいと申しおくつておいたところ、パリ本部書記局長ジョセフ氏から各団センターに出した「サーキユラー」(圓狀)の写しをおくつてきた。それには次のような一節がある。「日本はITIの仕事に十二分に協力し、われわれと密接な連絡を

維持するためにあらゆる努力をはらっている。

「国際演劇月」開催祝典

三月三日、東京・歌舞伎座にて同劇場三月興行の初日に、午前十一時より開催。これには、連合軍司令部、在日各国使節、関係官庁、文化団体代表、参加団体代表などを招待し、舞台にて本会々長その他の挨拶、各祝辞、各国センターよりのメッセージ発表等を行う。

「現代世界演劇寫眞展」

於日本橋・三越

世界演劇の現状を示す最近の舞台面を一ヶ所にあつめて、久しくわれわれから鎖されていた世界各國の演劇の新しい動きを示さうと、意図したものであり、この種の催しとしては戦後初めてのものであり、演劇の国際的交流という問題に一つの大きな役割を果たすことが期待される。イギリス、アメリカ、ベルギー、デンマーク、ノールウェー、フィンランド等の各センターより送られてきたものの外に、在東京の英、佛、カナダなどの外交使節団の好意によるものも出品され、特にCIE展覧会部からも多数の出品が予定されている。全部で十二三ヶ国になるはずである。主催、毎日新聞社。会期三月十日—十六日。

「演劇講演會」

東京都教育庁の希望により「国際演劇月」開催を記念して「演劇講演會」を開くことになった。これには「世界演劇の現状」の題名の下に、英、米、佛の演劇に関する講演、並びに海外の名優のレコードを解説つきにて紹介の予定。会場、日本橋、三越劇場。期日三月十四日午後一時より。

「劇作家国際會議」

三月イタリーにて開催

一月十四日附のITIパリ本部書記局長ジョワセ氏よりの來信は、三月七、八、九日の三日間、イタリーのサン・レモ（リグイニア）にて劇作家の国際會議を開く旨を言ひきたり、オブザーガー一名の出席を求めてきた。この來信には長文のアッピールが添へられ、現在、各國において劇作が不振である理由をあげて、劇作振興のために會議を開かうという趣意が述べられてゐて、議題は次の二つである。

一、全世界における「劇芸術（ドラマチック・アート）」の現状、それを脅かす危機、それが発展の途上に横たはる障害。

二、「演劇作品（シアトリカル・ウークス）」の自由な交流をさまたげる實際的・技術的障害。

つづいて、一月二十一日附の書簡には、各國センターより送る代表の数を増やすことを提案してきてゐる。會議の重要性にかんがみて、出来るだけ多くの意見の提出されることを望み、劇作家のみでなく、演出者、興行者、俳優など、一センターから最大限

大名まで派遣してほしいという。尚、演劇において演劇批評家の占める役割も大きいから、以上の外に、三名以内の劇評家を、彼の所屬する新聞社の費用で派遣することができないかという。

代表派遣の申込みは二月十日が期限であつたので、日本センターでは協議の結果、期日が迫つてゐること、適當な人を見出すことができなかったため、代表派遣の件は断念した。この會議にはフランスのジュール・ロメーン、ロジェ・フェルディナンド、英国のアシュリー・デュラス、イタリーのシルヴィオ・ダミコなどの出席が予定されている。

兒童劇にたいする調査

ITIパリ本部から「兒童劇」にたいする調査を依頼してきた。

これはオスロ大会において、世界の兒童劇について調査し、もし可能なら何らかの具体案を立てるという決議がなされたが、その決議に基づくものであつて、四月中旬、パリにおいて、それにたいする予備會議が開かれ、さらにこの夏、アメリカで引きつづいて會議がもたれることが予定されている。

四月のバリ予備會議は、各國からの情報をあつめて、調査の基礎材料をつくらうとしてゐるものよりである。タエツシヨネールの大要は次のやうである。

一、十一才以下の兒童に対する演劇。一、學校でドラマに関する授業があるか、またそれが教育の實習のために、特別に訓練された教師がいるか、などの調査。

連合国軍占領下での「国際演劇月」開催

一九五二年三月三日、銀座の歌舞伎座で「国際演劇月」のオープニングを飾る祝典が執り行われました。出席者には、在日各国使節、関係官庁、文化団体代表、参加団体代表に加えて、「連

合軍司令部」(GHQ)とあり

ます。日本はちょうどこの年まで、七年におよぶ連合国軍の占領下にあつたからです。

戦争中、多くの劇場が軍事転用されましたが、第二次世界大

戦敗戦後は、GHQが帝国劇場や東京宝塚劇場(アーニー・パイル劇場と改称)などを接收し、連合国軍関係者向けの娯楽施設として利用してゐました。「国際演劇月」に参加した歌舞

伎座、明治座、新橋演舞場は、一九四五年の東京大空襲で焼失してしまつた。最も早く復興を果たしたのは新橋演舞場で、三年後の一九四八年三月に再開場しています。次いで、明治座が五〇

年十一月末に再開場し、二カ月後の五一年一月に歌舞伎座が興行を再開しました。また、当時、新劇は主に三越劇場で公演されており、俳優座劇場の再開は一九五四年を待つことになりました。

アメリカ・センターのディレクター、ロザモンド・ギルター

一九五二年一月一日、一ターア
メリカ・センターのロザモンド・ギル
ター (Rosamond Gilder、一
八九一〜一九八六) から、日本
政府の海外公演への支援につて
たずねる手紙が来たとあります。
演劇批評家で、月刊演劇誌「シ

アター・アーツ」(Theatre Arts
Monthly) 編集長だったギルター
は、国際演劇協会創設者のひと
りです。設立当初のユネスコには
「演劇」に関する規定がありませ
んでしたが、ギルターは、「演劇は
国際理解、国際協力、そしてユネ

スコが深く関心を寄せる世界平和
の原則を広める上で最も効果的
な手段の一つだ」とアメリカ各地を
巡って訴え続けました。一九四八年
に国際演劇協会が創設されると
アメリカ・センター議長に就任、営
利目的の商業劇場に代わる、アメ

リカの国立劇場となることを目的
としてギルター自身が創立し、ア
メリカ演劇の海外公演を支援し
た「アメリカ国民演劇およびアカ
デミー」(American National
Theatre and Academy、
ANTA) 内に事務局を構えまし

た。
著書『女優の登場 (Enter
the Actress)』(一九三二)で
は、十七世紀まで男性が女性を
演じていた演劇界に進出し、道
を切り開いた女性たちに焦点を
当てました。

二 十一才から十八才までの少年に対す
る演劇。——これは学校で演劇を上演して
いるか、指導者は専門的訓練をうけている
か、上演の脚本はどういう種類のものか、
上演の費用はどこから出しているかなどの
調査。

三 少年のための演劇。——これは、職
業劇団と非専門劇団とを問はず、
少年に見せる演劇が、どんな風にして演じ
られているかの調査である。

これらの問題は、教育に関する問題が
多いので、文部省に協力を求めて、回答を
作製中であるが、未開拓、未調査の事項が
多く、本センターの現在の力では処理しき
れないでいる。

月刊機関紙「世界初演」到着

「世界初演」(ワールド・プレミエール)
はITIの機関紙で、秋十月に第一号を出
し一年に十冊発行している。これには世
界各国のセンターから集まった新作初演を
記録し、それを各国センターへ配布するの
である。日本センターも今後、日本におけ
る新作初演をこれに記録してゆくわけであ
るが、日本において上演された新作は、こ
の冊子をおいて世界各国へ報告されるの
である。これには新作の作者名、筋、所演
時間、幕数、劇場、劇団、演出者などを記
すことになっている。日本センターでは第
一回分として「おひさま、ばあさん」と、
「羅生門」の原稿をおくつたのは既報のと
おりだが、今度その掲載されている十月
号(第三巻第一号)が十二月末に六十部刻
着したので、掲載記事に関係のある人々、

各劇団、理事の一部、希望申込みの人々に
無料配布した。希望の方は申込みお下さ
い。
又、二月二日、同紙十一月号到着。これ
には日本より寄稿の「炎の人」「天守物語」
「源氏物語」「霧の音」等の記録が掲載さ
れている。関係会員に配布。

シェイクスピア記念ライブラリー

英国センターより来信ありて、日本にお
いて最近上演されたシェイクスピア劇の
舞合写真およびプログラムを出来るだけ数
多く送ってほしいと申込んできた。これは
英国に「シェイクスピア記念図書館」があ
つて、世界各国から英国を訪れる演劇研究
者利用されているのであるが、この図書
館で世界各国で上演されたシェイクスピア
劇の舞合写真とプログラムを集めているの
である。日本センターではこの申込みに応
じて、最近俳優座で上演した「オセロ」
「ウィンザーの陽気な女房たち」の舞合写
真とプログラムをおくる予定であるが、会
員諸君の中でシェイクスピア上演に関係の
あつた方は、舞合写真とプログラムを本セ
ンター宛に御寄附願います。

海外よりの通信

最近、海外よりの通信が急激に増
加しつつあるが、十二月中旬以前
のものの中、主なるものをここに
記録して会員諸氏にお伝えします
一、十二月十五日、パリ本部書記局長アン
ドレ・ジョツセ氏より来信。本会より日

における「国際演劇月」の企画を知らせ
この企画に対して上演する脚本にして著
作権の無料のものあれば知らせてほしい
との問合せにたいする返信なり。国際演
劇月の企画をよるごと共に、申込みの
件についてはアメリカ・センターに問合
せよとの内容なり。(英文。十二月六日
パリ発信、航空便)

一、十二月二十八日、イギリス・センター
より来信。「シェイクスピア記念図書館」
のために、戦後日本にて上演されたシェ
イクスピア劇の舞合写真、パンフレット
の類を求む。(十月二十五日ロンドン発
普通便)

一、十二月二十八日、パリ本部書記局長よ
り来信。本会より「世界初演」紙の希望
者多きにつき六十部以上もらへぬかとの
問合せに対し、費用の関係上それ以
上の部数の無料配布は困難につき、必要
あらば日本にて増刷してもよしとのこと
なり。又、「世界初演」(季刊紙)の販売
についての指示あり。(十二月十七日パ
リ発信、航空便)

一、十二月二十六日、ベルギー「世界演劇」
編輯長エノール氏より、「観客の問題に
ついて各種の調査」を求めた。 (佛
文、十二月十五日ブラッセル発信、航空)
一、昭和二十七年一月一日、アメリカ・セ
ンターの議長ロザモンド・ギルター女史
より、本会々長宛に來信。日本政府は展
覧会、演劇などの海外派遣をなすつもり
があるか、又、過去五年間にさういう問
題について援助をしたことがあるかの問
合せなり。カブヤ渡米などの取沙汰され

ている折から、アメリカではこの種の問
題を調査したき意向の如く思はる。(十
二月二十一日ニューヨーク発信、航空)
一、一月一日、パリ本部書記局長より、青
少年演劇に関する調査を依頼した。 (十
一月十四日パリ発信、普通便)

一、一月七日、ニューヨーク鳴海氏より
來信。日本における「国際演劇月」につ
いて、本会よりアメリカ・センター宛の
直接依頼の書面の外に、鳴海氏を介して
国際演劇月における脚本のリスト、「現
代世界演劇写真展」への出品、メセージ
などを依頼せしに対し、アメリカ・セン
ターとして快く協力してくれとの返信
なり。(十二月二十八日ニューヨーク発
航空)

一、一月九日、ベルギー「世界演劇」の編
輯長エノール氏より來信。同氏は「わが
町」(ワイルダー作)の巡業に出かけて
ゐるため返事のおくれしことを詫言、本
会より発送せし寄稿および舞合写真と興
味をもつて受取りし旨言ひきたる。(佛
文、十二月二十七日ブラッセル発信、航空)

一、一月十日、アメリカ・センターのオリ
バース・パーティツク女史より來信。本
年度におけるアメリカの「国際演劇月」
のことを伝えるとともに、資料、メセー
ジ、舞合写真について協力を惜しまぬこ
とを記し、舞合写真はもし返送してくれ
るなら数多く送るとのことなり。(一月
三日ニューヨーク発信、航空)
一、一月十日、ニューヨークの鳴海氏より
パティツク女史が協力する旨のことを
伝え来たり、アメリカ・センターは、資

〔参考文献〕 Canning, Charlotte. "Anticipating Globalisation: Rosamond Gilder and the International Theatre Institute." In *Staging International Feminisms*, edited by Elaine Aston and Sue-Ellen Case, 113-120. Studies in International Performance. London: Palgrave Macmillan, 2007. https://doi.org/10.1057/9780230287693_11. (参照 2025-08-20)

国際演劇協会の名誉会長J・B・プリーストリー

二月八日には、イギリス・セン
ターから、一丁名譽会長J・
B・プリーストリー（John
Boynton Priestley・一八九
四〜一九八四）*らによる日本の
「国際演劇月」を祝うメッセー
ジが届いています。

小説家・劇作家のプリースト
リーは、フランスの演出家・俳優
ジャン・ルイ・バロー、アメリカの
劇作家リリアン・ヘルマン、前述
のロザモンド・ギルダードと並ぶ「一
創設者の一人です。」「一丁
通信」〇号には「一丁」の意義を

説く原稿が掲載されており、
「我々は今国際的理解を極めて
必要とする時代に生きている。こ
の理解なくしては、我々は間も
なく文明のそもそもの基礎を破
壊し始めるに至るであろう。」
(略)「一丁」は、世界といふ

一つの社会——国境を越え、こ
の地上の諸国民を結合する、こ
のやうな国際的組織の創設によ
りはじめて生ずる社会——の構
築に、少なくとも強靱な一本の
糸を提供するであらう」と書い
ています（七ページ参照）。

前年の一九五一年には代表作
『夜の来訪者』（一九四五）を、
後に「一丁」日本センターの第三代
会長を務めることになる劇作家
の内村直也が翻訳・翻案、舞台
を日本の戦後に置き換え、俳優
座によって上演されています。

金を十分にもつてゐるので、三月の演劇
月にたいして華々しい活動と宣伝を開始
していることを伝う。（一月三日ニュー
ヨーク発、航空）
「一月十九日、ベルギー・センターの名
において、エイノール氏より来信。日本に
おける「国際演劇月」の企画をよろこび
ベルギーにおける昨年度上演の舞臺写真
七枚を送る旨を話し、その目録を同封す
（傳文、一月八日ブラッセル発、航空）
「一月二十一日、在ホノコンの英人スコ
ット氏より来信。近く日本へ赴くの旨を
伝う。同氏は支那演劇の研究家にして、本
会会書『現代世界演劇』に支那演劇に
関する出品をなす予定。（一月十八日ホ
ンコン発、航空）
「一月二十五日、ユネスコ事務局長トレ
ス・ボデー博士より、日本における「国
際演劇月」に対するメッセージ、電報にて
来た。（一月二十四日パリ発）
「一月二十五日、パリ本部書記局長ジョ
ン・セ氏より、本年三月イタリーのサン・
レモにて開かれる演劇に関する専門会議
「国際演劇作家会議」に代表一名を送るよ
ロンドンの「タイムズ」紙に
日本演劇に関する記事掲載

うに要請した。（一月十四日パリ発
航空）
「一月二十六日、アメリカ・センターより
国際演劇月に関するパンフレット類を
送りきた。（一月三日ニューヨーク発、
普通便）
「一月二十六日、スウェーデン・センターの
書記局長テイル・アッカー博士より来信。
日本における「国際演劇月」の開催を説
ぶとともに、会長オブレヒト博士のメセ
ージを同封す。（傳文、一月二十一日チ
ュリッヒ発、航空）
「一月二十八日、アメリカ・センター会
長ヘレン・ヘイズ嬢（女優）及び議長ロ
ザモンド・ギルダード女史より、日本の「国
際演劇月」にたいするメッセージ来た。（一
月二十一日ニューヨーク発、航空）
「二月四日、パリ本部書記局長ジョン・セ
氏より来信。さきに本会より同氏宛に、
本会より直接に各国センター宛に国際演
劇月に対する協力を請うも、パリ本部より
も各国センター宛に協力依頼の書面を
出してほしいと申送つておいたのに対し
パリ本部より各国に宛てし現状の写しを
同封し、書記局長自身のメッセージを送り
きた。（一月二十二日パリ発、航空）
「二月四日、パリ本部より、さきに案内
し来た「国際演劇作家会議」にたいし
代表六名（劇作家、演出者、興行者、俳
優）及び三名の批評家を最大限としてそ
の範囲内で派遣してほしいと言ひきたる
（一月二十一日パリ発、航空）
「二月八日、イギリス・センターより、
入名の英國著名演劇人の、日本における

「国際演劇月」に対するメッセージを送り
きたり、尚、最近の舞臺写真を送りし旨
を書き添う。ITI名譽会長プリーストリー
、同じく名譽会長リユース・エリン・リー
ズ、イギリス・センター会長イーシア子
爵、名譽ローレンス・オリグアイ、同じ
く名譽ジョン・ギルグッド、名譽女優
ビル・ソリンダイタ、同じく名譽女優
イス・イーヴアンズ、新進劇詩人タリス
トフ・フレイの八氏である。（二月一
日ロンドン発、航空）
「二月九日、ニュージーランドのセンタ
ーより来信あり。「現代世界演劇展」へ
写真を送りたが、いい写真はベルギー
の「世界演劇」の編輯の方へ送つてある
ので、その返るのを待つて日本へ送つ
たのでは間に合ふまいから、別のを探し
て送るつもりであると言つてきた。（一
月二十八日ウエリントン発、航空）
「二月十六日、デンマーク・センターより
来信。同センター書記局長フリッドベル
グ氏のメッセージと共に、舞臺写真、ポス
ターなど送れるを報ず。（二月二日コペ
ンハーゲン発、航空）
「二月十二日、デンマーク・センターより
舞臺写真、プログラム、ポスターなど
を航空便にて送りきたる。
「二月十三日、ノルウェー・センター
より来信。ITI会長にしてノルウェー
・センターの会長を兼ねるオット・ノ
ールマン氏よりのメッセージを送りきたる
（二月四日オスロ発、航空）
「二月十三日、アメリカ・センターより
最近上演の舞臺面の写真を送りきたる

信あり。（二月七日ニューヨーク発、航
空）
「二月十五日、イギリス・センターより
送れる舞臺写真、航空便にて到着す。最
近の上演になる舞臺面の写真二十枚届。
「二月十九日、ニューヨークの海氏より
来信。ラジオ・ドラマの件につき問合せ
たるに対する返信にして、演劇月に放送
するに適當なるものなき旨伝へきたる。
ラジオ・ドラマ基本のカタログも同時
に到着。（十三日ニューヨーク発、航空）
「二月二十日、ギリシャ・センターより
会長、書記局長などの連名にてメッセ
ージ来た。（二月三十一日アテネ発）
「二月二十一日、フィンランド・センタ
ーより、舞臺写真とデザインを十四葉送
り来た。「日本における演劇月」の成功を
祈る」旨の書簡同封。（二月十四日ヘル
シンキ発、航空）
「二月二十二日、オーストリア・センタ
ーより来信。会長ウィルヘルム・シュミ
ット氏及び書記長レオポルド・コプカ氏
よりのメッセージなり。（二月十五日、ウ
ィーン発、航空）
「二月二十三日、ノルウェー・センタ
ーより舞臺写真多数、航空便にて到着。
「世界演劇」（ITIの季刊紙）その
他のフランスで発行されたもので本會
に關係ある演劇圖書に限り、フランス
から直接に取りよせる便ができたこと
から、御希望の方は本會書記局へ御相
談下さい。

フランス演劇圖書の輸入

「世界演劇」（ITIの季刊紙）その
他のフランスで発行されたもので本會
に關係ある演劇圖書に限り、フランス
から直接に取りよせる便ができたこと
から、御希望の方は本會書記局へ御相
談下さい。

〈参考文献〉 小野寺健 (1988) 「プリーストリー」『日本大百科全書 20』p.648. 小学館
J. B. Priestley official website. "Bibliography."
J. B. Priestley official website. <https://jb Priestley.co.uk/bibliography/>. (参照 2025-08-20)

第1回「国際演劇月」リーフレット (1952)

3

「国際演劇月」とは何か

ITI(国際演劇協会) International Theatre Institute
 というのは、戦後にできた演劇の国際組織であつて、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の文化活動にたいする協力機関であり、世界の28カ国が加盟して、それぞれの演劇センターを作っています。日本でも昨年5月、広く演劇の諸分野の人たちによつて、日本センターが結成されて、28番目の加盟国となりました。

このITIが毎年3月を期して国際的規模において「国際演劇月」というのを開催していますがこれには世界各国の演劇が参加することになっています。この企画は戦後のもので、その歴史が若く、国によつては参加するまでに到らないところもありますが、年々盛んになつてゆく傾向にあり、アメリカなどでは「演劇は国際的理解に役立つ」というスローガンの下に、全土にちかちか多くの演劇団体に働きかけて大変盛んにやっています。

この企画の目的とするところは、(1)自国の演劇活動が国際的な催しに参加しているという自覚により、国際的な親善感を深めることであり、(2)社会的関心を演劇に集中することによつて、演劇活動を鼓舞することであり、(3)演劇創造者に最高の舞台をつくらうとする熱情を湧き立たせることであり、(4)各国の脚本を上演することによつて観客側における国際的理解を深めることであり、そして、何よりも高い目的は、優れた演劇活動を通して、平和の基礎としての国際的理解と人権尊重の思想を導き出すことであります。

日本も本年初めてこの国際的企画に参加することになったのであります。最初のこととて不備な点も多いことと思われませんが、東京及び関西の殆んど全部の演劇活動の参加を見るにいたりしたので日本の優れた伝統演劇としての歌舞伎、能をはじめとし、現代劇、文楽、バレエ等の各種の演劇芸術が、絢爛たる舞台を展開し、戦後の日本演劇がここに国際的脚光を浴びることになったのであります。

主催並に協賛

共同主催 ITI 日本センター
 日本演劇協会

協賛 文部省、外務省、東京都、日本放送協会、
 共同通信社、朝日新聞社、毎日新聞社、
 東京新聞社、読売新聞社

4

演劇月参加演劇

Kabuki 歌舞伎

- 東京 吉右衛門、猿之助一座、三津五郎参加 歌舞伎座
 第1部 1. 室町御所 2. 熊谷陣屋 3. 江島生島
 第2部 1. お国と五平 2. 素戔落 3. 恋神大幸往
 来 4. らくだ
 菊五郎劇団 明治座
 第1部 1. 天一坊大岡政談 2. 梅松包妻松
 第2部 1. 盲長屋梅加賀島 2. 田舎泥氏露東雲
 大阪 東西合同大歌舞伎 歌舞伎座
 (昼) 1. 新雪物語 2. 色彩間菊豆
 (夜) 1. 新照手姫 2. 寿門松 3. 船弁慶 4. 雪驛
 夜入谷睦道
 東京 新派 新派大合同 新橋演舞場
 第1部 1. 訪問客 2. 紫雲橋 3. 白鷺
 第2部 1. 他人の手 2. 巖瀬面帖——難波屋おきた
 3. 安宅家の人々
 京都 新国劇 四條南座
 第1部 1. 霧の香 2. 荒神山
 第2部 1. 險の母 2. 殺人山村 3. だんじり囃子
 東京 大江美智子一座 浅草六区花月劇場
 第1回 1. 春風二丁一夜 2. お夏清十郎 3. 見世物
 群盗伝(前編)
 第2回 1. 旅の風来坊 2. 押しの富八 3. 見世物群
 盗伝(後編)

Noh 能

- 東京 梅若会 3月2日 多摩川能楽堂 東北・山姥
 鉄仙会 3月8日 水道橋能楽堂 弱法師・熊野・
 石橋
 九草会 3月9日 千手・男守
 喜多会 3月15日 水道橋能楽堂 安宅・松風・道
 成寺
 研能会 3月16日 染井能楽堂 土車・安達原
 宝生会 3月21日 水道橋能楽堂 小曾道我・岡田
 川・道成寺 3月22日 散野・景清・船弁慶
 3月23日 弱法師・熊野・石橋
 淡交会 3月23日 多摩川能楽堂 竹生島・巴・百

演劇は世界を結ぶ——
 The theatre unites
 all nations.

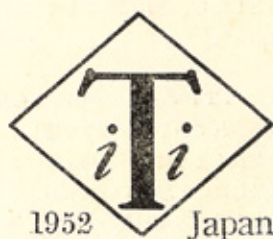
ITI本部が三月を「国際演劇月」と定めて各国内の劇場・劇団・舞台人を繋ぎ、さらには世界の演劇活動をゆるやかに結び、舞台芸術による国際的な交流をはじめたのは、ITI創設の翌年、一九四九年のことでした。それから三年後の一九五二年、ITI日本センターが第一回目の「国際演劇月」を開催します。

この翌月の四月二十八日には、サンフランシスコ講和会議で日本と連合四十八カ国が調印した対日平和条約が発効。日本は連合国軍の占領から解放され、独立を回復、国際社会へ復帰しました。

ITI日本センターの事務局には、第二回が欠番なものの、初回から第九回(一九六〇年)までの「国際演劇月」の四つ折りのリーフレットが保存されています。デザインは第一回からはぼろ雑襲されており、スミともう一色の二色づかいで印刷されています。そしてリーフレットの表紙には、どの年も「演劇は世界を結ぶ——The theatre unites all nations.」と、この国際演劇協会の目指すところが記されています。短く簡潔なメッセージですが、この言葉には、ユ

国際演劇月

International
Theatre
Month



“演劇は世界を結ぶ”

“The theatre unites all nations.”

国際演劇協会日本センター
日本演劇協会

文部省大臣官房渉外ユネスコ課

2

メッセージ

あなたの国において国際演劇月の開催されるのを知つて嬉しく思います。この企画のもつ高い目的は、国際的な文化のきずなを強め、人権を擁護し、引いては永続する平和の基礎を打ち建てるためのものであるが、その目的を達成するのにできるかぎりの成功を収められんことを望みます。

ユネスコ事務局長 ハイメ・トレス・ボデー

貴国の国際演劇月に心からなるお祝いを申し送ります。この世界において誰の連帯にもならず国際的でありうるものがあるとしたら、それはまさしく演劇です。貴国の企画に幸あれ。

ローレンス・オリヴィエ

日本に ITI のセンターがつくれ、そして国際演劇月が企画されているのを知つて嬉しく思います。私は最近日本を訪れるようにとの招待を受けました。私はそれをこの秋に果たしたいと思つていますが、その折 ITI 日本センターの会員の方々と会い、そして尊敬する長い伝統を背後にもつ日本演劇の最近の発達を私自身のために、觀賞し得ることを期待しています。

ITI 名誉会長 J.B. プリーストリー

アメリカ国民演劇アカデミーの会長として、国際演劇月の開催式にさいし、国際演劇協会の新しく創立された日本センターに御挨拶をするのは大変嬉しいことです。日本の偉大な古典劇である「能」は、世界の文化的遺産の一部でありますし、またあなたの国の大衆的な人気のある「歌舞伎」並に近代的な享楽劇についてもよく知っています。あなたの国の画家や映画製作者の精巧な芸術を通して、私たちは、あなたの国の演劇の伝統についてもよく知っています。しかし、あなたの国の今日の演劇についてもよく多く知りたいと熱望しています。それ故、私たちのアメリカ演劇芸術家は日本の演劇芸術家が ITI の仲間入りをされたことに、最大の満足を感じます。私たちは両国の演劇のアイデアと経験の新たな交換を期待し、あなたの国の舞台の偉大な芸術とその業績により多く親しむことによる喜びと靈感を待ち望んでいます。

アメリカ合衆国センター会長 ヘレン・ヘイズ

ネスコの掲げる「教育や科学、文化の振興を通じて、戦争の悲劇を二度と繰り返さない」という理念が投影されています。

参加公演を見ると、冒頭に東京・大阪の歌舞伎座三月公演がラインナップ。東京は初代中村吉右衛門「熊谷陣屋」、二代目市川猿之助「室町御所」、六代目中村歌右衛門と十七代目中村勘三郎の「江島生島」など、大阪は三代目市川寿海と二代目中村扇雀、後の四代目坂田藤十郎の「新雪物語」や二代目中村鴈治郎「船辨慶」が参加。『白鷺』『安宅家の人々』など（新橋演舞場）で参加した新派、新国劇（京都南座）に加えて、第二次世界大戦前後の浅草で流行していた女剣劇の大江美智子一座（浅草六区花月劇場）の名前も見えます。リアルな立ち回りの時代劇で主に戦前に人気を博した劇団・新国劇は、北条秀司が前年の一九五一年に書き下ろした『霧の音』の再演他で参加しています。尚、『霧の音』は、民藝『炎の人』（三好十郎作・滝沢修主演）、新派『天守物語』（泉鏡花作・伊藤道郎演出・花柳章太郎、初代水谷八重子主演）、歌舞伎『源氏物語』（舟橋聖一原作・九代目市川海老蔵主演）などとともに、ITI機関誌『世界初演』一九五一年十一月号に英語・フランス語で紹介されています。

第1回「国際演劇月」リーフレット (1952)

7

ITI 日本センター

1950年の国際ペン大会に日本代表としてエディン・バウに赴いた北村喜八氏が、船路、パリのITI（国際演劇協会）本部で書記局長アンドレ・ジョッセ氏と会見のさい、日本におけるセンターの設立を要請されたので、船国後、関係各方面の意向をただすとともに、川端康成氏、河竹繁俊氏、久保田万太郎氏とはかり、上記の4人を世話人として創立の準備をすめた。かくて、広く演劇界の各分野を代表する66名の創立発起人が全演劇界に呼びかけて、昨1951年5月24日、創立総会を開き、ここにITI日本センターの設立を見るにいたつたのである。

昨年6月、オスロで開かれたITIの第4回大会には日本から久保田万太郎氏が出席し、また同市で開かれたITI主催の「現代舞台芸術展」には、日本から模型舞台4点、舞台装置画数十点を出品した。そして、本年3月国際的企画である「国際演劇月」に初めて参加したのである。

ITI日本センターは、日本演劇の各分野を網らした専門家の組織であるが、それは今後、演劇の国際的交流を通して国際的理解をはかるとともに、国内の演劇各分野との組織上の整備、非専門（素人）演劇との関連、地方演劇の

8

組織、教育演劇、青少年演劇などの未開拓の多くの重要な問題を、漸次に取り上げるることによつて、日本の演劇文化の向上に資せんとするものである。

○国際演劇月開催祝典 3月3日午前十一時

歌舞伎座3月興行初日 歌舞伎座

在日各国代表部、日本文化団体、参加団体招待

ユネスコ及びITI各国センターのメッセージ発表

○「現代世界演劇写真展」

英、米、仏、カナダ、デンマーク、ベルギー、ソ連、日本等の最近の舞台写真約300点

参考出品 中国（A.C.スコット氏蔵）

3月11日より16日まで 東京三越6階

ITI 日本センター

事務所 中央区京橋2ノ8 明葉ビル

電話京橋 関 7731

会長 高橋誠一郎 理事長 北村喜八

日本演劇協会

事務所 中央区築地4ノ2共栄ビル

電話築地 関 0141

会長 久保田万太郎 事務理事 北條秀司

ユネスコの目的は、国際連合憲章が世界の諸人民に対し

て人種、性、言語又は宗教の差別なく確認している正義、法の支配、人権及び基本的自由に対する普遍的な尊重を助長するために教育、科学、文化を通じて諸国民の間の協力を促進することによつて、平和及び安全に貢献することである。

—ユネスコ憲章第一條より—

人はすべて、社会の文化生活に自由に参加し、芸術を鑑賞し、科学の進歩とそのもたらす福利とにあずかる権利を有する。

—世界人権宣言第二十七條より—

ITI 加盟国一覧表

- | | |
|-----------|------------|
| ① オーストラリア | ⑮ イタリア |
| ② オーストリア | ⑯ 日本 |
| ③ ベルギー | ⑰ メキシコ |
| ④ ブラジル | ⑱ オランダ |
| ⑤ チリ | ⑲ ニュージーランド |
| ⑥ 中国 | ⑳ ノールウェイ |
| ⑦ キューバ | ㉑ ポーランド |
| ⑧ デンマーク | ㉒ ノルウェーデン |
| ⑨ フィンランド | ㉓ スイス |
| ⑩ エクアドル | ㉔ 南アフリカ聯邦 |
| ⑪ フランス | ㉕ 英国 |
| ⑫ ギリシャ | ㉖ 米国 |
| ⑬ 印度 | ㉗ ウルグアイ |
| ⑭ イスラエル | ㉘ ユーゴスラヴィア |

古典芸能、現代演劇、
バレエ、オペラ、レヴュー、
放送劇まで

第一回「国際演劇月」で特に目を引くのは、東京・大阪・京都・名古屋あわせて十六もの能楽公演が参加していることです。東京では多くの能楽堂が東京大空襲で焼失しましたが、被災しなかった駒込の染井能楽堂、田園調布の多摩川能楽堂が使用されているほか、焼失したものの、一九五〇年にいち早く再建された水道橋能楽堂が使われました。

文楽は、一九四九年の文楽座員の労働組合結成に端を発して、組合派の三和会と非組合派の因会に分裂していた時期でしたが、双方ともに、三越劇場を会場として参加しています。

当時の三越劇場では新劇の本公演も多く行われました。文学座は信濃町のアトリエが竣工した二年後、創立十五周年にあたる年で、成井市郎演出のマルセル・パニョル作「マルセイユ三部作」で参加、三月公演がなかった民藝は四月の『巖頭の女』で参加しましたが、ともに三越劇場でした。また、俳優座は「青年劇場」と銘打ち、若者を観客としたシェイクスピア二作品で参加しています。

万

能楽協会 3月28日 水道橋能楽堂 放下僧・熊谷・乱
 大阪 梅若会 3月1日 大槻能楽堂 巻絹・藤戸・二人
 静・七騎落
 喜多会 3月8日 大槻能楽堂 田澄・求塚・秀嗣
 七宝会 3月15日 大槻能楽堂 芦刈・葛城・土御
 京都 金桜会 3月10日 金剛能楽堂 弱法師・熊野・鞍
 馬天狗
 梅若会 3月21日 金剛能楽堂 田村・景清・
 班安・道成寺
 名古屋 宝生会 3月16日 松屋ホール 小袖曾我・
 杜若・景清

Bunraku 文 楽

大阪 因会 三越劇場 佛渡氏物語・金閣寺・安宅閣・
 恋娘黄八丈・実盛物語
 東京 三つ和会 三越劇場 (昼の部) 釣女・恋飛脚大和
 往来・阿古屋琴責 (夜の部) 山姥・太功記・
 三勝半七

Modern Plays 新 劇

東京 創立15周年記念 文学座公演 3月1日～28日
 三越劇場 マルセル・パニヨルの三部作 3月1
 日～8日 マリウス 9～18日 ファニー 19日
 ～28日 セザール
 劇団民謡 4月1～20日 三越劇場 旗本の女
 俳優座 青年劇場のためのシェイクスピア祭 ウイ
 ンザーの陽気な女房連・オセロ

Theatre for Children 児童劇

東京 3月～4月 劇団東童 よだかの星・アリババと盗
 賊・あべこべ物語 巡回公演
 新児童劇団 魔法岩物語・ビノチオ 巡回公演
 緑ヶ丘 汚れた旗・蝶になりたい蝶 4月上演予定
 民衆座 野口英世・王子と盗賊 悪魔のしわざ 巡
 回公演 4月上演予定
 文化座 さくらんぼ大将 巡回公演
 つみき座 滑えない虹 巡回公演

Ballet バレー

東京 小牧バレエ団 日比谷公会堂

レ・ミルフィード・悲槍交響曲

東京オペラ協会 編舞

二期会 日比谷公会堂 ラ・ボエーム

Opera オペラ

大阪 藤原歌劇団 朝日会館「夕鶴」

服部バレエ団 日比谷公会堂 1. さまよえる肖像

2. セレナーデ 3. 恋は魔術師

Operetta and Revue レヴュー

東京 松竹歌劇団 国際劇場

大阪 松竹歌劇団 大劇場

宝塚歌劇 宝塚大劇場

Japanese Dance 日本舞踊

大阪 伊藤道郎研究所 大谷友右衛門・俳優座参加

鷹の井戸 耳なし法一

東京 霞町紅会公演 明治座 新曲 里見八犬伝・他

放 送

全国 日本放送協会(NHK) 1. ルイス・マックニース作

暗い塔(英国)——世界の名作 2. ディクソン・

カー作 池の中のドラゴン(英国)——灰色の部

屋 3. アーサー・ミラー作 猫と鉛管工(米国)

——放送劇

ラジオ東京(JOKR) 1. アリストファネス作リ

ュシトラテ(女の平和)——ギリシャ劇 2. 二郎探

母——中国劇

児童劇からは、宮沢賢治作品をいち早く取り上げた劇団東童の『よだかの星』をはじめ、新児童劇団『ビノチオ』、文化座、つみき座なども参加。バレエは当時、東宝専属だった小牧バレエ団の『レ・ミルフィード』と服部・島田バレエ団『さまよえる肖像』などが、オペラは東京オペラ協会、二期会、藤原歌劇団が名を連ねています。この後、日本の創作オペラの名作として名を馳せる藤原歌劇団の『夕鶴』(木下順二作・團伊玖磨作曲)はこれが初演でした。

少女歌劇団として人気を競っていた宝塚歌劇団と松竹歌劇団は、それぞれ雪組公演『猿飛佐助』(菊田一夫作・演出)と『第二十一回東京踊り』で参加しました。

日本舞踊からは、伊藤道郎研究所の舞踊劇『鷹の井戸』と『耳なし芳一』が参加。伊藤道郎が詩人イエイツとともに作った『鷹の井戸』は一九一六年のロンドン初演では伊藤が鷹役を演じましたが、この公演では、当時、二枚目映画スターとして活躍中の七代目大谷友右衛門、後の名女形・四代目中村雀右衛門が勤めました。

「霞町紅会」はこの前年に始まった新橋芸妓による舞踊の会。NHKとともに放送劇で参加した「ラジオ東京」は現在のTBSラジオで、開局から三カ月目の参加でした。

「国際演劇月」開催を祝う海外の名優からのメッセージ

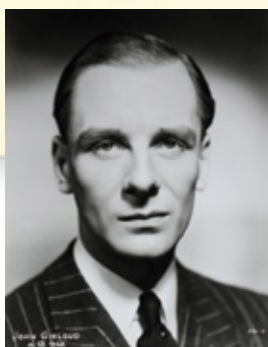
8.1.52.

Phoenix Theatre.
London. W.C.2.

JOHN GIELGUD

My very best wishes to the International Theatre
Institute of Japan for the International Theatre
Month which is to take place in March this year.
May your productions be successful and may they
help to bring a closer understanding between
the East and the West.

John Gielgud



この3月に開催される「国際演劇月」にあたり、国際演劇協会日本センターの皆さんに心からのお祝いを送ります。皆さんの舞台作品が成功を収め、東洋と西洋の相互理解を深める一助となるよう願っています。

ジョン・ギールグッド

ジョン・ギールグッドからの 祝辞（一九五二）

イギリスの俳優・演出家のジョン・ギールグッド (John Gielgud、一九〇四〜二〇〇〇) は、「二〇世紀最高のハムレット役者」と謳われ、知的で端正な演技で名を馳せました。『テンペスト』のプロスペローは二十六歳から八十歳を過ぎても舞台上で演じ続け、八十六歳で主演したピーター・グリーナウエイ監督『プロスペローの本』（一九九一）でその姿を見ることが出来ます。

ジョン・ギールグッドからの祝辞は、新年が明けたばかりの一月八日に書かれ、本人の直筆サインがされています。右上には、「フェニックス劇場」とありますが、この日、ギールグッドは三年前に初演したロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの『から騒ぎ』再演の稽古中でした。自ら演出し、ベネディック役で出演する舞台のプレス招待日を三日後に控え、日本への手紙を楽屋で書いたのでしょうか。ギールグッドはほとんど毎日手紙を書いていたとも言われるほどの手紙好きで、その一部をまとめた『ギールグッドの手紙 (Gielgud's Letters)』（二〇〇四）という本も出版されています。

1952

MESSAGE FROM SIR LAURENCE OLIVIER:

MY EVERY GOOD WISH TO YOUR INTERNATIONAL THEATRE MONTH.
IF THERE IS ONE THING IN THIS WORLD THAT CAN BE INTERNATIONAL
WITHOUT ANY TROUBLE TO ANYONE, IT IS THE THEATRE. GODSPEED TO
YOUR ENTERPRISE. SINCERELY LAURENCE OLIVIER.

MESSAGE FROM THE PRESIDENT OF THE BRITISH CENTRE.

THE BRITISH CENTRE OF THE INTERNATIONAL THEATRE INSTITUTE WELCOMES
THE INAUGURATION OF THE JAPANESE CENTRE AND WE SEND YOU OUR MOST
SINCERE GOOD WISHES SIGNED ESHER (VISCOUNT ESHER) C H A I R M A N



貴国の国際演劇月に心からなるお祝いを申し送ります。この世界において誰の迷惑にもならず国際的でありうるものがあるとしたら、それはまさしく演劇です。貴国の企画に幸あれ。

ローレンス・オリヴィエ

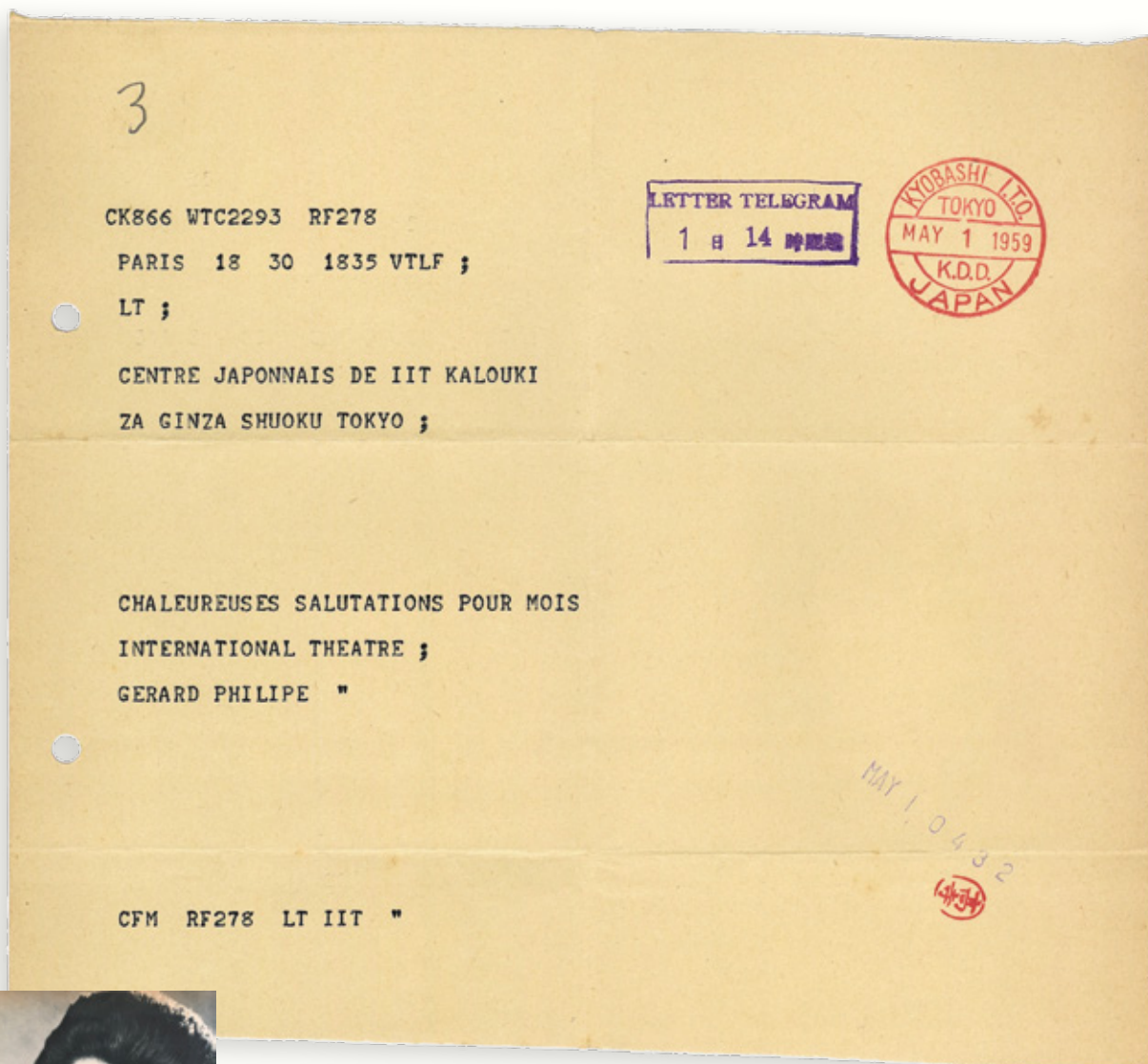
ローレンス・オリヴィエからの祝辞（一九五二）

ローレンス・オリヴィエ(Laurence Kerr Olivier・一九〇七〜一九八九)も、二〇世紀を代表する名優と言われるイギリスの俳優・演出家・映画監督です。シェイクスピア役者として名声を博し、一九四七年に主演・監督を務めた映画『ハムレット』(一九四八)では、ハリウッド製作の作品以外で初となるアカデミー賞の作品賞をはじめ、主演男優賞、美術監督賞、衣裳デザイン賞(ともにモノクロ映画部門)の五部門を受賞。躍動感にあふれたオリヴィエのハムレット、ギルグッドは内面的に抑制した動き、詩を歌い上げるようなセリフに魅力があったという。

一九七〇年には、俳優として初めて爵位(男爵)を授与されました。第一回「国際演劇月」に際して送られてきたもので、この訳文はリーフレット(二十九ページ参照)に掲載されたものです。

この祝辞の下には、当時のイギリス・センター会長、イーシャー子爵(Viscount Esher)からのメッセージもみえます。当時のイーシャー子爵は第三代オリヴァー・ブレット。ナショナル・トラストの委員長を長く務め、また、オールド・ヴィック劇場の支援者でもありました。

「国際演劇月」開催を祝う海外の名優からのメッセージ



国際演劇月に対し、熱烈な挨拶を送る。
ジェラルール・フィリップ

ジェラルール・フィリップからの 祝辞（一九五九）

八回目の「国際演劇月」が開催された一九五九年三月の一日、十四時に配達された電報です。パリのIIT本部から送られてきたもので、誤字があるものの、宛先は「東京中央区歌舞伎座 IIT 日本センター」と読めます。日本センターの事務所は一九五二年八月から歌舞伎座の四階にあり、「国際演劇月」の開会式も歌舞伎座で行われていました。

ジェラルール・フィリップ (Gerard Philipe・一九二二～一九五九) は「フランスの美」とも称される俳優です。一九四七年、映画『肉体の悪魔』で世界的な人気を博し、その美しさだけでなく演技力も高い評価を得ます。一九五一年には演出家ジャン・ヴィラル率いる国立民衆劇場 (TNP) に参加、アヴィニョン演劇祭で『ホンブルクの公子』を演じ大成功を収めるなど舞台でも活躍しますが、一九五九年、肝臓がんのために三十六歳の若さでこの世を去りました。

一九五三年に来日した際は日本のファンに熱狂的に迎えられ、また、日本映画に感銘を受けてパリで映画祭を開催するなど、日本映画がフランスで知られるきっかけをつくった人物でもあります。

ITI日本センター編 『Japanese Theatre PICTORIAL』



一九五四年の第三回「国際演劇月」の際には、英語の冊子『Japanese Theatre PICTORIAL』（日本演劇寫真帖）が刊行されました。ITI日本センターが編集を担当し、日本ユネスコ国内委員会の協力を得てつくられたものです。

見返しには「全七十二ページ・写真一二二点・カラー二ページ・世界中どこへでも送料込一ドル五〇セント」と書かれています。当時は一ドル三六〇円の固定相場制なので、一ドル五〇セントは五四〇円、書籍の価格で比較すると、およそ現在の一万二千円前後と言えます。

内容は「歌舞伎、能、文楽、民衆演劇、翻訳劇、現代演劇、バレエ、オペラ、学生演劇、児童演劇」と多岐にわたり、三年前にユネスコへの加盟を果たしたばかりの日本の意気込みが感じられます。



二代目松緑の弁慶と九代目海老蔵の富樫

1953年5月の歌舞伎座、昼の部は歌舞伎十八番の内『勧進帳』でした。武蔵坊弁慶は二代目尾上松緑（1913～1989）、対する富樫は九代目市川海老蔵、後の十一代目市川團十郎（1909～1965）です。

九代目 市川海老蔵の助六

1953年3月の歌舞伎座、夜の部の最後の演目は『^{すけろくゆかりのえどざくら}助六由縁江戸櫻』でした。蛇の目傘をさし、下駄の音を響かせて花道に出てきた九代目市川海老蔵。この公演は「国際演劇月」参加公演で、客席には外国人観客の姿も見えます。



十七世宝生九郎重英の『松風』か？

シテ方の名前が書かれていませんが、重厚堅実な芸風で知られる十七世宝生流宗家、宝生九郎重英（1900～1974）でしょうか。『松風』は「能の理想的な魅力とされる『幽玄』の香り漂う格調高い謡曲」と書かれています。

十四世 喜多六平太の『羽衣』

「不世出の名人」と謳われる十四世喜多流宗家喜多六平太（1874～1971）は、当時の能楽師では最年長の79歳。約150センチの小柄な身体ながら圧倒的迫力を持つ、華やかでスケールの大きな芸だったと言われています。

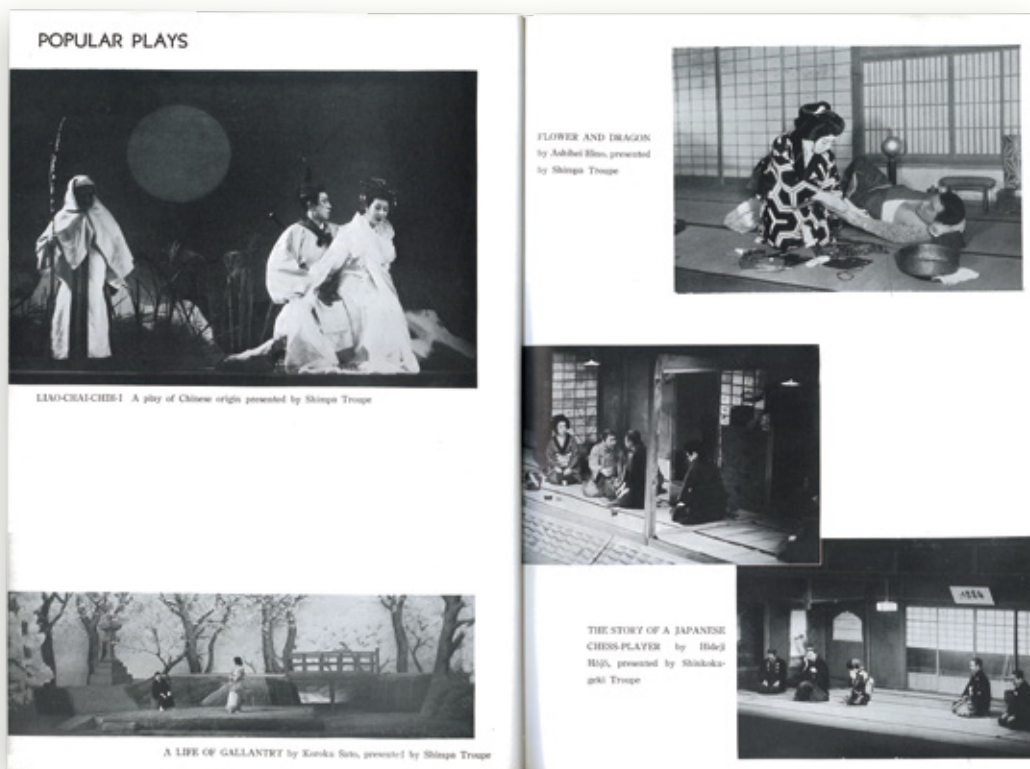


女形人形遣いの名手、吉田文五郎

『奥州安達原』の袖萩祭文の段、三味線を弾きながら哀しい身の上を語る盲目の袖萩。人形を遣うのは吉田文五郎（1869～1962）です。理論的な作品解釈と、可憐で官能的な遣いぶりで人気を博した女形の名手でした。

文楽人形遣いの卵たち

『絵本太功記』の山場、十段目「尼ヶ崎の段」の写真の下には、舞台裏で人形を手にする3人の少年たちの写真が掲載されていました。キャプションには「良い人形遣いになるには20年以上の修行が必要だ」とあります。

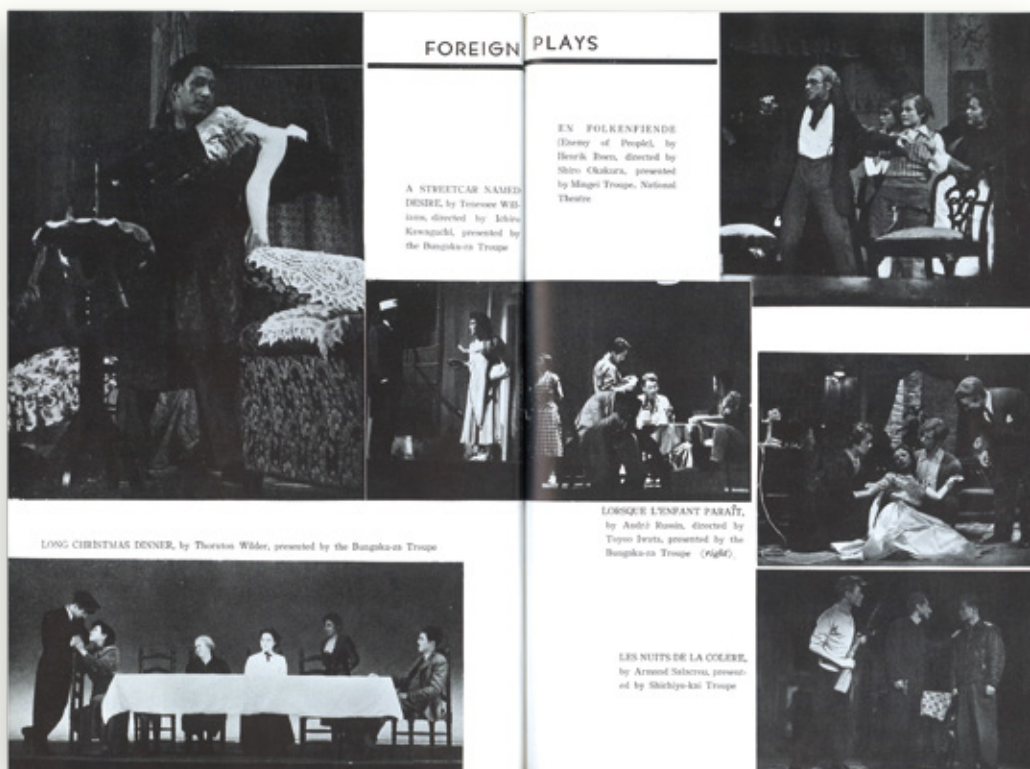


新派と新国劇 = 「Popular Plays」

ここでは新派と新国劇を「Popular Plays」＝民衆演劇と紹介しています。新派からは中国清朝の小説の翻案『聊斎志異』、佐藤紅緑作『侠艶録』、火野葦平作、久保田万太郎演出『花と龍』の3作品が取り上げられました。

新国劇・辰巳柳太郎の『王将』

三部からなる『王将』は、劇団新国劇の俳優・辰巳柳太郎（1905～1989）が、大阪の将棋棋士・坂田三吉を主人公にした作品を北條秀司に依頼し、辰巳の当たり役になった舞台です。北條は演出も担当していました。



文学座初演の『欲望という名の電車』

文学座が杉村春子のランチに北村和夫のスタンレーで再演を重ねたテネシー・ウィリアムズ作『欲望という名の電車』は、1953年が日本初演でした。下は同じく文学座のソーントン・ワイルダー作『クリスマスの正餐』。

劇団民藝、劇団七曜会の「翻訳劇」(Foreign Plays)

民藝のイブセン『民衆の敵』、文学座のアンドレ・ルッサン『あかんぼ頌』とともに掲載されたのは、劇団七曜会のアルマン・サラクルー『怒りの夜』。七曜会には1953年に劇団四季を創設した浅利慶太も所属していました。



above: TAKUTSU NA JIKAN (Tedious Time), a play in 3 acts, by Kiuru Morimoto (1933-46), presented by the Bungaku-in Troupe.



middle: UROKOSHI TO AMANJAKU by Junji Kinoshita, presented by the Bungaku-in Troupe.

below: TORU NO HIMAWARI (A sunflower in the darkness), by Yukio Mishima, presented by the Bungaku-in Troupe.



MODERN PLAYS

SHIPPON NO KISEKI (The weather of Japan), a world play in 5 acts, by Sakae Kato, presented by the Mugi Troupe



KAMOME (The seagull) directed by Munetaro Kishida, National Theatre.



FCBO (Wind and waves) by Junji Kinoshita, presented by the Bungaku-in Troupe.

1954年当時の「現代演劇」(Modern Plays)

文学座の森本薫『退屈な時間』と三島由紀夫『夜の向日葵』、ぶどうの会の下田順二『瓜子姫とアマンジャク』『風浪』、民藝の久保栄『日本の気象』、文学座・俳優座・民藝合同公演の久保田万太郎『鴉』が紹介されています。

国立劇場を目指した「国民劇場」(National Theatre)

新劇3劇団合同公演『鴉』は、文部省が一橋講堂を100日間借り新劇公演に提供する「国民劇場」プロジェクトの第3回公演でした。国立劇場へと発展させようとする試みでしたが、1953年度のための開催に終わりました。

The Modern Drama

Aside from these traditional theatres, there is the modern drama. This class of drama is divided into two schools, the one depicting modern life and manners in modernistic style and the other being, what might be called, the modern drama in the strict sense of this term.

The modern drama movement in Japan was started about 1908 through the stimulus given by the brilliant success of the modern drama movement in Europe. It was a revolt against the traditional theatres of Japan, and its objective was to depict modern social life and its morals in a realistic manner. The movement was imbued with a pioneering and experimental spirit, and those who gathered under its banner were well-educated and passionately artistic young people. These young people introduced many of modern European plays to serve as their models. They are called "translation plays" in Japan.

In Japan, the modern drama movement was carried out chiefly by amateurs, and it was so successful that it replaced the 19th

century drama, and pushed such great names as Dumas, Terry and Sir Henry Irving into the background. In Japan, however, despite the great reformatory significance embodied in this movement, its position, after forty years of efforts, is still quite uncertain. It has not reached the position where it can successfully compete with the Kabuki.

In Japan, the old theatrical heritage, which came down to us in the form of the traditional theatres, is shining brightly, and these generally stylized stage may give immeasurable inspiration to those Westerners who are dissatisfied with their own naturalistic plays. However, the tradition of these traditional plays does not live in the modern drama of Japan. Theatre people who make the modern drama their life's work have been trying rather to transplant the European tradition into the Japanese soil. This contradiction, at least in its present state, is tragic.

by courtesy of the Broadcasting Corporation of Japan who presented this lecture to University of Radiophonique Internationale, Radio-Television Française.

Prof. Victor Otake



Contd. from the page:

Collegian plays

This hard-working college troupe was led by Prof. Victor (Masaru) Otake who had somehow caught the spirit of Ruyter Falk, while he was studying in Syracuse University, N.Y. (1929-36).

"Our post-war tradition was soon established," says Prof. Otake, "when our basis for selection was decided to be a modern play in three acts, one scene, with a message."

He explains that the preference for three acts, one scene is chiefly due to financial reasons. The choice of modern plays is in part intended to cut down costume expenses, but it is mainly for the purpose of tackling the vital issues of the day.

"Drama may not be the place to study philosophy," but, he thinks, it is certainly

the right place for the Japanese students to come into close contact with large ideas of democratic liberalism.

Prof. Otake states, "To my mind, the college English dramatics for the Japanese students is a comprehensive and intensive seminar, in which students are given an opportunity to get kinesthetic grasp of various types of culture of other peoples. I have sensed their difficulties in understanding other cultures more clearly by watching their rehearsals than I have by their questions in classrooms. This was particularly so during the rehearsal of *Thunder, Rock, and Snow in Tomorrow*."

Prof. Otake once called his dramatic students "The Osaka Troupe", because they prepare themselves as long as *Winkler Boy* for example took nearly a year—before the actual performance. "Perhaps something ought to be done about this enormous cost of energy and time," says Prof. Otake, "but, it seems worth while as long as boys and girls are willing. The college authorities are supporting it wholeheartedly true to the tradition of Osaka School of Economics, which has produced such men as Mr. K. Hori of Nikkatsu Motion Picture Corp. and Mr. M. Sogabe of Toei, whose films twice received the grand prix."

BALLET

PARADISE LOST 3 acts ballet, Choreography by Haruki Yokoyama music by Yasuji Akazawa.



HUMAN BUDDHA 3 acts ballet, Choreography by Bae Ichi, music by Akira Takabe



Victor Otake 率いる戦後初の学生英語劇団

大学演劇からは東京経済大学の英語劇団が紹介されています。劇団を率いるアメリカ文学教授の大竹勝、別名ヴィクター大竹は、「演劇は日本の学生が民主的リベラリズムの大いなる思想に触れるのにふさわしい場だ」と言っています。

日本人振付家によるモダン・バレエ

バレエのページでは日本人によるオリジナル作品、横山はるひ振付『失楽園』(1950年初演)と石井漠振付『人間釈迦』(1953年初演)が紹介されています。前者は芥川也寸志、後者は伊福部昭が作曲を担当しました。

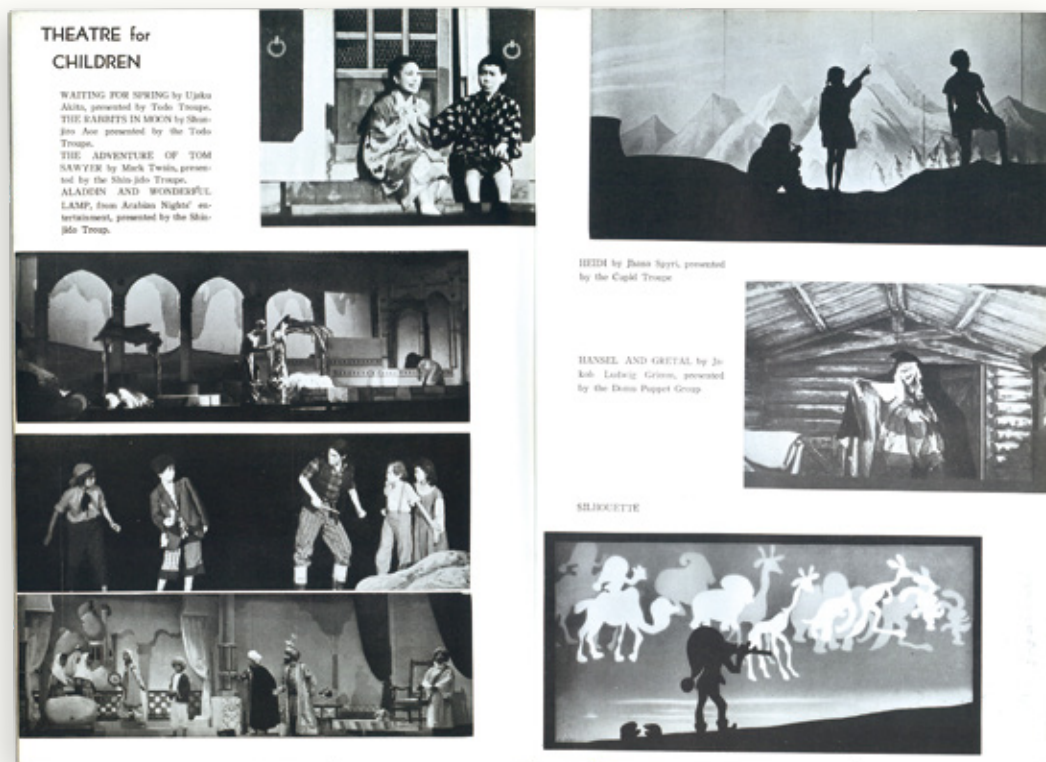


「吾等のテナー」と呼ばれたオペラ歌手・藤原義江

オペラの冒頭は1953年3月の藤原歌劇団創立20周年公演『カルメン』（新橋演舞場）。カルメンはこれが当たり役になった川崎静子（1919～1982）、ドン・ホセは歌劇団を率いた日本オペラの先駆者、藤原義江（1898～1976）でした。

海外で700回以上蝶々さんを演じた砂原美智子

1947年に藤原歌劇団『ラ・ボエーム』でデビューした砂原美智子（1923～1987）。そのわずか4年後に渡仏、1953年にはパリ国立オペラ＝コミック座の正座員になり、その後、約20年にわたりヨーロッパを舞台に活躍しました。



子どもが演じるリアルさを追求した劇団東童

児童演劇からは、1928年設立の児童劇団の草分け、劇団東童の秋田雨雀作『埋れた春』と青江舜二郎作『月の中には兎がいる』が紹介されています。下の2作は新児童劇団『トムソーヤの冒険』『アラジンとふしぎなランプ』です。

児童劇団の設立が急増した戦後

右ページには、後のアングラ演劇を牽引する唐十郎（1940～2024）、佐藤信（1943～）も所属していた劇団キュービットの『アルプスの少女ハイジ』、童夢人形劇団『ヘンゼルとグレーテル』、藤城清治（1924～）の影絵も見えます。



「いかにして男性の俳優が女性になるのか……」

この見開きでは、ひとりの歌舞伎俳優が鏡に向かって化粧をはじめ、衣裳を着て、かつらをつけ、『将門』の傾城如月、実は滝夜叉姫となってスッポンからせり上がり、花道へ現れるまでを連続写真で紹介しています。

歌舞伎女形・六代目中村歌右衛門

名前が書かれていませんが、この俳優は六代目中村歌右衛門（1917～2001）。華麗かつ気品のある演技で戦後最高峰の女形と呼ばれ、娘役から姫、武家女房や御殿女中、傾城、世話女房に至るまで、あらゆる役をこなしました。



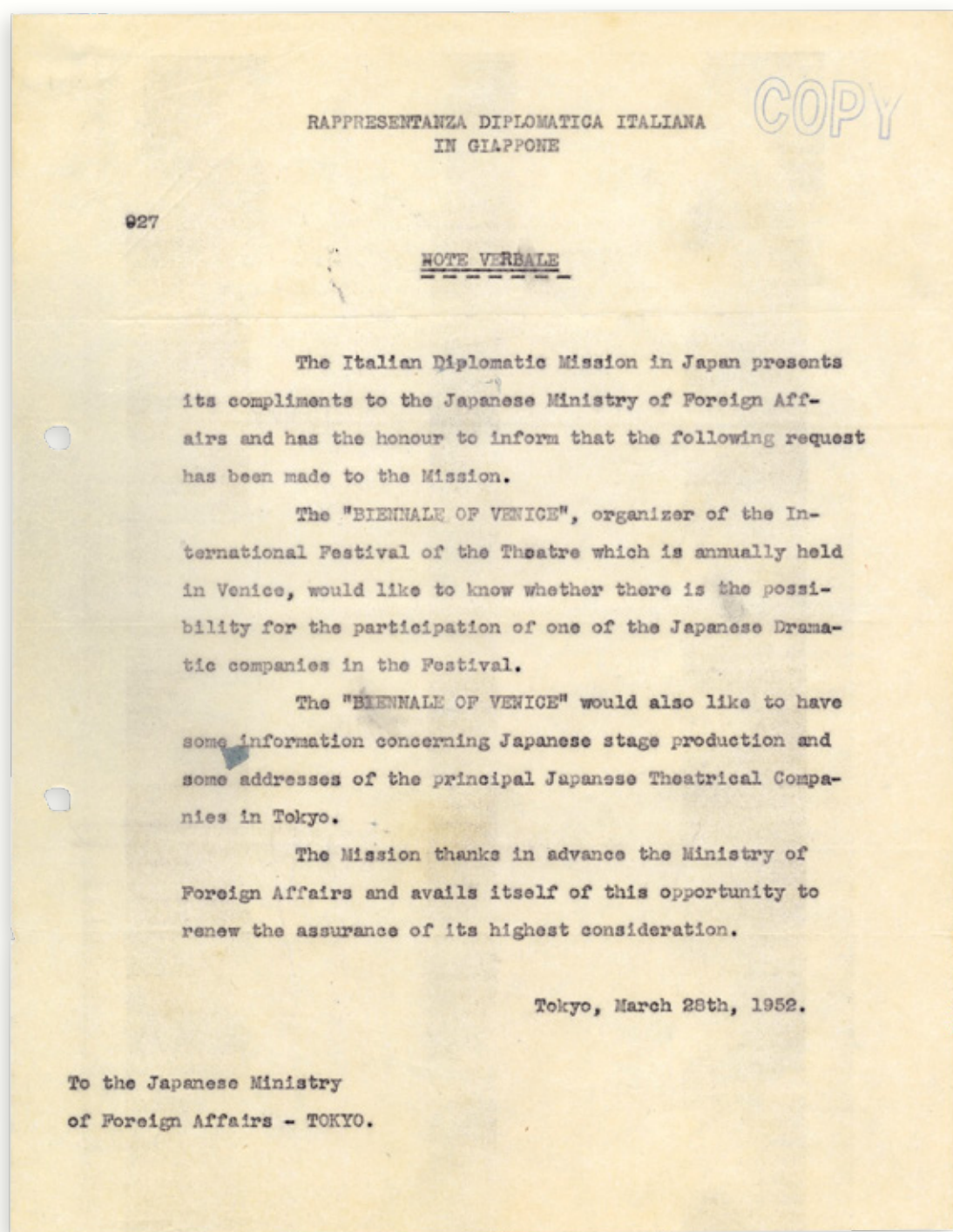
ユネスコ本部からの訪問客

後列はユネスコ本部と日本ユネスコ国内委員会の面々、前列は左から二代目市川猿之助（1888～1963）、四代目澤村鐵之助（1888～1959）、三代目中村時蔵（1895～1959）、六代目中村歌右衛門が並びます。下は猿之助とユネスコ文化活動局次長で教育学者のプレム・キルパル（Prem Kirpal・1909～2005）。

ITI日本センター会長・高橋誠一郎と 日本演劇協会会長・久保田万太郎

「国際演劇月」を共催する両協会の会長。「日本演劇の実態を紹介し、国際理解に貢献するため」、「国際演劇月」参加公演に限らず年間の舞台を広く紹介する『Japanese Theatre PICTORIAL』をつくったと書かれています。

能楽初の海外公演のきっかけをつくった口上書



イタリア政府から外務省を経て――日本センターへ

第一回の「国際演劇月」が開催された一九五二年三月、東京の駐日イタリア政府代表部から日本の外務省に一通の「Note Verbale」口上書が届きました。日付は二十八日。口上書とは、国家間あるいは国家と国際機関の間で交わされる外交文書の一つで、ITI日本センターに残っているのはそのコピーです。

曰く、「ヴェネツィアで毎年開催されている演劇祭、『ヴェネツィア・ビエンナーレ』が、日本のカンパニーが当フェスティバルに参加する可能性を知りたがっている。また同時に日本の舞台作品についての情報と、東京の主な劇団の連絡先を求めている」とのこと。

ヴェネツィア・ビエンナーレは一八九五年から始まり、一九三三年からは演劇祭も併催しています。すでに「ITI通信」四号（一九五二年三月発行）に、「イタリア政府からこの演劇祭へ（日本の）劇団をおくることができないかと問い合わせられている」とあることから、この手紙以前から打診があったことがわかります。

INTERNATIONAL
THEATRE
INSTITUTE



INSTITUT
INTERNATIONAL
DU THEATRE

国際演劇協会 I・T・I 通信

No. 13
August 25, 1954

The Japanese
Centre of I. T. I.
c/o Kabukiza
Theatre,
Ginza-higashi,
Chuo-ku, Tokyo.

国際演劇協会 日本センター

東京都中央区銀座東
横町1-15-1番
電話東京(56)3131-5

創立者	成俊八郎
代表者	康寛喜
常務理事	萬長一喜
理事	高北
幹事	川河
庶務	保
会計	高北
庶務	高北

能楽・ヴェニス演劇祭に参加

——その経過報告——

日本の伝統演劇のひとつである能楽が、本年度のヴェニス国際演劇祭に参加し、八月六、七の両日、サン・ジョルジョ島のテアトロ・デル・ヴェルデにおいて公開され、異常な成功をおさめた。この集積的な演劇がどの程度海外において理解されるかやぶされたのであるが、予想をこえて、ヨーロッパの観客の心をとらえるものがあつたらしい。日本独自の芸術が海外へ紹介され成功を見たというのは嬉しいことである。本会は、この金満の表現のために、推進力となつて努力してきたので、今日にいたる経過を全会員に報告するとともに、ここに記録してきたいと思う。

イタリアのヴェニス・ビエンナーレ委員会（一九五三年以来、隔年、国際美術展を開催している）は、戦後、毎年、国際演劇祭をも開催しているのであるが、数年前からこの演劇祭に日本演劇の参加を希望していた。

この委員会の意向が日本外務省を通じて本会へ伝えられたのは、たしか一九五一年、本会の創立された年の暮であつた。その時は多額の費用を要する問題のことで、そのままになつたが、翌五二年に入つて、再び外務省を通じて五三年度演劇祭への参加を要請してきた。最初のイタリア側の希望は、必しも断つたわけではなく、歌舞伎、能その他の日本演劇をということであつた。（本通年第六号参照）本会はこの関係方面へ伝えたが、積極的に参加の

意向を示する団体になつた。

ところが、後藤宋夫君などの若い能楽師の間でこれに参加したいという意向が燃えあがり、喜多喜氏を説いて結集者とし、本会理事丸岡朝吉を通じて本会に参加希望の申し出をされた。こうした気運が動いたので、本会は外務省と連絡し、この問題について協議したが、同省会議室において、演劇文化局の諸氏に川島雄三、三宅義、丸岡朝、北村喜八をまじえて相談を聞いたのもその頃である。一九五二年十二月十七日、イタリア側としては日本演劇の参加にたいして相当額の補助金を出すのであつたが、それ以外のことは不明であつたので、イタリア側へ具体的条件を問合せ、予算案などを送つて、交渉にはいつた。しかし、交渉に手間とつたことと、日本側で負担すべき費用の出所に十分な見通しが立たなかつたので、演劇祭開催の期日も迫るまじに、昨年五月、この交渉は一応打ち切りの止むなきにたつた。

昨年一九五三年の暮、在イタリア原田大使から同略外務大臣宛に、イタリア側で日本の能のヴェニス演劇祭への参加を、非常に熱心に希望しているのので、それが實現をはかられたしとの連絡があつた。外務省ではこの問題を以前の交渉の再開と見ず、全然新しい問題として、本年一月はじめ能楽協会および本会へ連絡があつた。これは新しい構想において實現を期そうとする上で、当然のことであるが、昨年中止となつた企画を全然無視するもの面白からぬことなので、それを考慮に入れつつ、問題は新しく金満案

界へ提出された。能楽協会では本年正月の理事會において、この問題を議したが、各派を調整する能楽協会としての性格上、とくに一議決を確断することの困難な立場にあつた。

今度の能楽・ヴェニス問題とは、國家が金費用を負担して日本能楽の代表を送るという金で金ではない。また個人の経済的リスクにおいてなされる私的銀行でもない。イタリア側が費用の一端を分担し、また金満の性質上國家の事業であるといへ、演劇する人々の経済的能力に關連のある問題である。

本会としては、能楽の演劇が文化的に意義のある問題である以上、どの派系であれ、海外において演劇をなして恥しむ技術をもつ人であり、且つ費用の一端を自己の負担において処理する人であるなら、これを擁護していい立場にある。

本年一月に入ると、イタリア側から、再度、能楽の参加を要請してきた。ビエンナーレ国際演劇祭の最高責任者ジョージ・アヌニ・ディ・ジョーラ氏（ITIイタリ・センター会長）は、原田大使と親交があり、熱心に能の参加を希望されていることも判明した。

二月十七日、喜多喜、横寛喜、丸岡朝、北村喜八の四者會議において、横寛、喜多の両氏が合同の見通しのあることも明らかになつた。そこで、本会としては高橋会長の意向をたすとともに、理事會にはかつて、両氏合同の一座を渡伊能楽團として正式に推薦することになつた。能楽協会も同じくこれを推薦した。そして、外務省もこの方針に賛同し、ここにヴェニス演劇祭参加にたいする国内的方針が一応成立したのである。

費用に關しては、一月のイタリア側からの来賓によつて、イタリア側の負担する費用の太いの方針が示されていたが、日本側の希望として、東京ローマ往復航空費の半額、及び滞在費全額をイタリア側で負担してもらいた。旨を二月二十四日、外務省を通じて問合された。もしこの希望が容れられるなら、

ITIがプロデュースした 能楽のヴェネツィア公演

口上書が届いた半年後に発行された「ITI通信」六号に「来年度ヴェニス国際演劇祭 日本演劇の出演を希望」という記事があります。「歌舞伎、能などの出演を希望」して、七月なら野外劇場、九月ならフェニーチェ劇場が提案されました。「費用にたいして相当補助し、滞在中はヴェニスの賓客として待遇する」という熱意のこもった文言も見えます。

ITI日本センターは、「推進体となつて」（ITI通信「十二号」）このプロジェクトを進め、予算の目処が立たずに中止という事態を経て、一九五四年八月、能楽初の海外公演を實現させます。

「ITI通信」十三号には、全四ページにわたる詳細なレポートが掲載されました。尚、報告の最後には、ハイフェッツなど、ロシア革命による亡命芸術家の日本公演をプロデュースしていたアレクサンドル・ストロークがヴェネツィア公演以降のヨーロッパ・アメリカ巡演を請け負うも、交渉がまとまらず「将来の機会に譲ることになった」と付記されています。

能楽ヴェネツィア・ビエンナーレ公演プログラム (1954)



伊・仏・英三カ国語で
全ページ和紙に印刷

公演は、八月六日(プレヴェー)、
七日、八日、サン・ジョルジョ・
マッジョーレ島に一九五二年に新
設されたギリシャ風野外劇場テア
トロ・ヴェルデで行われました。

総勢十七名の能楽団を率いたの
は後の喜多流十五世宗家・喜多実
観世流シテ方・二世観世喜之(一
九〇二―一九七七)、幸流小鼓方
十六世宗家・幸祥光(一八九二―
一九七七)のほか、若き日の観世
寿夫(一九二五―一九七八)、柴夫
(一九二七―二〇〇七)、静夫(八
世観世鏡之丞・一九三一)の三
兄弟の名前も見えます。

全四十六ページの公演プログラ
ムは、シルバーのインクを使った
美しい表紙に、中面は長い繊維を
漉き込んだ薄い雲龍紙に印刷され
た非常に豪華なものです。番組は
観音開きになっており、舞台写真
が貼り込まれた『鶯』『石橋』『景
清』などの演目解説から能楽師の
略歴、能楽の歴史、舞台、舞や所
作、音楽などの解説にいたるまで、
すべて伊・仏・英の三カ国語で掲
載されています。編集はITII日
本センターが行ったとクレジット
されています。

国際演劇祭「テアトル・デ・ナシオン」 リーフレット(1957)

一九五七年三月、ITI他の企画・運営による国際演劇祭「テアトル・デ・ナシオン」(Théâtre des Nations)の第一回が幕を開けました。「諸国民演劇祭」などとも呼ばれるこのフェスティバルは、一九五四年からサラ・ベルナル劇場で開催されていた「パリ国際演劇祭」を前身としています。ITIはパリに世界各国の舞台芸術を招聘して公演する劇場の設立を希望しており、一九五五年にクロアチアのドゥブロヴニクで開催されたITI世界大会でフランス代表から議案が提出され、決議されます。フランス政府とパリ市はこの決議に応じ、財政的支援を約束、サラ・ベルナル劇場を「テアトル・デ・ナシオン」(諸国民劇場)と改称して、同名のフェスティバルが実現したのです。



CALENDRIER DU THÉÂTRE DES NATIONS						
DATES	SPECTACLES	TROUPES	ENES	DATES	SPECTACLES	TROUPES
JUIN				JUIL.		
Dim. 2	PARTAGE DE MIDI (Paul Claudel) avec Edouard Frot, J.-Louis Barrault, Jean Desailly, Jacques Dacquin mise en scène : Jean-Louis Barrault	COMPAGNIE RENAUD-BARRAULT	FRANCAIS	Mar. 2	LONG VOYAGE DANS LA NUIT (O'Neill) avec Frederic March et Florence Eldridge mise en scène : José Quintero	A. M. T. A. DE NEW-YORK
Lun. 3	— d' —	—	—	Mer. 3	— d' —	—
Mar. 4	— d' —	—	—	Jeu. 4	— d' —	—
Mer. 5	Relâche	—	—	Ven. 5	— d' —	—
Jeu. 6	— d' —	—	—	Sam. 6	— d' —	—
Ven. 7	— d' —	—	—	Dim. 7	Relâche	—
Sab. 8	— d' —	—	—	Lun. 8	Relâche	—
Dim. 9	— d' —	—	—	Mar. 9	LE DIBOUK (Anski) mise en scène : I. Vahlsbørg	THEATRE HAHIMAN DE TEL-AVIV
Lun. 10	— d' —	—	—	Mer. 10	— d' —	—
Mar. 11	— d' —	—	—	Jeu. 11	— d' —	—
Mer. 12	— d' —	—	—	Ven. 12	— d' —	—
Jeu. 13	Relâche	—	—	Sab. 13	Relâche	—
Ven. 14	CENDRILLON (Rossini)	BALLETS BOLCHOÏ DE MOSCOU	SOVIETIQUE	Dim. 14	— d' —	—
Sab. 15	— d' —	—	—	Jeu. 15	— d' —	—
Dim. 16	— d' —	—	—	Mer. 16	— d' —	—
Lun. 17	— d' —	—	—	Jeu. 17	— d' —	—
Mar. 18	— d' —	—	—	Ven. 18	— d' —	—
Mer. 19	— d' —	—	—	Sab. 19	— d' —	—
Jeu. 20	— d' —	—	—	Dim. 20	— d' —	—
Ven. 21	— d' —	—	—	Jeu. 21	— d' —	—
Sab. 22	— d' —	—	—	Ven. 22	— d' —	—
Dim. 23	— d' —	—	—	Sab. 23	— d' —	—
Lun. 24	— d' —	—	—	Dim. 24	— d' —	—
Mar. 25	— d' —	—	—	Jeu. 25	— d' —	—
Mer. 26	— d' —	—	—	Ven. 26	— d' —	—
Jeu. 27	— d' —	—	—	Sab. 27	— d' —	—
Ven. 28	— d' —	—	—	Dim. 28	— d' —	—
Sab. 29	— d' —	—	—	Jeu. 29	— d' —	—
Dim. 30	— d' —	—	—	Ven. 30	— d' —	—
Lun. 31	— d' —	—	—	Sab. 31	— d' —	—
Mar. 2	— d' —	—	—	Dim. 2	— d' —	—
Mer. 3	— d' —	—	—	Jeu. 3	— d' —	—
Jeu. 4	— d' —	—	—	Ven. 4	— d' —	—
Ven. 5	— d' —	—	—	Sab. 5	— d' —	—
Dim. 6	— d' —	—	—	Dim. 6	— d' —	—
Lun. 7	— d' —	—	—	Jeu. 7	— d' —	—
Mar. 8	— d' —	—	—	Ven. 8	— d' —	—
Mer. 9	— d' —	—	—	Sab. 9	— d' —	—
Jeu. 10	— d' —	—	—	Dim. 10	— d' —	—
Ven. 11	— d' —	—	—	Jeu. 11	— d' —	—
Sab. 12	— d' —	—	—	Ven. 12	— d' —	—
Dim. 13	— d' —	—	—	Sab. 13	— d' —	—
Lun. 14	— d' —	—	—	Dim. 14	— d' —	—
Mar. 15	— d' —	—	—	Jeu. 15	— d' —	—
Mer. 16	— d' —	—	—	Ven. 16	— d' —	—
Jeu. 17	— d' —	—	—	Sab. 17	— d' —	—
Ven. 18	— d' —	—	—	Dim. 18	— d' —	—
Sab. 19	— d' —	—	—	Jeu. 19	— d' —	—
Dim. 20	— d' —	—	—	Ven. 20	— d' —	—
Lun. 21	— d' —	—	—	Sab. 21	— d' —	—
Mar. 22	— d' —	—	—	Dim. 22	— d' —	—
Mer. 23	— d' —	—	—	Jeu. 23	— d' —	—
Jeu. 24	— d' —	—	—	Ven. 24	— d' —	—
Ven. 25	— d' —	—	—	Sab. 25	— d' —	—
Dim. 26	— d' —	—	—	Dim. 26	— d' —	—
Lun. 27	— d' —	—	—	Jeu. 27	— d' —	—
Mar. 28	— d' —	—	—	Ven. 28	— d' —	—
Mer. 29	— d' —	—	—	Sab. 29	— d' —	—
Jeu. 30	— d' —	—	—	Dim. 30	— d' —	—
Ven. 31	— d' —	—	—	Jeu. 31	— d' —	—
Sab. 1	— d' —	—	—	Ven. 1	— d' —	—
Dim. 2	— d' —	—	—	Sab. 2	— d' —	—
Lun. 3	— d' —	—	—	Dim. 3	— d' —	—
Mar. 4	— d' —	—	—	Jeu. 4	— d' —	—
Mer. 5	— d' —	—	—	Ven. 5	— d' —	—
Jeu. 6	— d' —	—	—	Sab. 6	— d' —	—
Ven. 7	— d' —	—	—	Dim. 7	— d' —	—
Sab. 8	— d' —	—	—	Jeu. 8	— d' —	—
Dim. 9	— d' —	—	—	Ven. 9	— d' —	—
Lun. 10	— d' —	—	—	Sab. 10	— d' —	—
Mar. 11	— d' —	—	—	Dim. 11	— d' —	—
Mer. 12	— d' —	—	—	Jeu. 12	— d' —	—
Jeu. 13	— d' —	—	—	Ven. 13	— d' —	—
Ven. 14	— d' —	—	—	Sab. 14	— d' —	—
Sab. 15	— d' —	—	—	Dim. 15	— d' —	—
Dim. 16	— d' —	—	—	Jeu. 16	— d' —	—
Lun. 17	— d' —	—	—	Ven. 17	— d' —	—
Mar. 18	— d' —	—	—	Sab. 18	— d' —	—
Mer. 19	— d' —	—	—	Dim. 19	— d' —	—
Jeu. 20	— d' —	—	—	Jeu. 20	— d' —	—
Ven. 21	— d' —	—	—	Ven. 21	— d' —	—
Sab. 22	— d' —	—	—	Sab. 22	— d' —	—
Dim. 23	— d' —	—	—	Dim. 23	— d' —	—
Lun. 24	— d' —	—	—	Jeu. 24	— d' —	—
Mar. 25	— d' —	—	—	Ven. 25	— d' —	—
Mer. 26	— d' —	—	—	Sab. 26	— d' —	—
Jeu. 27	— d' —	—	—	Dim. 27	— d' —	—
Ven. 28	— d' —	—	—	Jeu. 28	— d' —	—
Sab. 29	— d' —	—	—	Ven. 29	— d' —	—
Dim. 30	— d' —	—	—	Sab. 30	— d' —	—
Lun. 31	— d' —	—	—	Dim. 31	— d' —	—

Ce calendrier est susceptible de modifications. Il est prudent de consulter les affiches particulières à chaque spectacle.

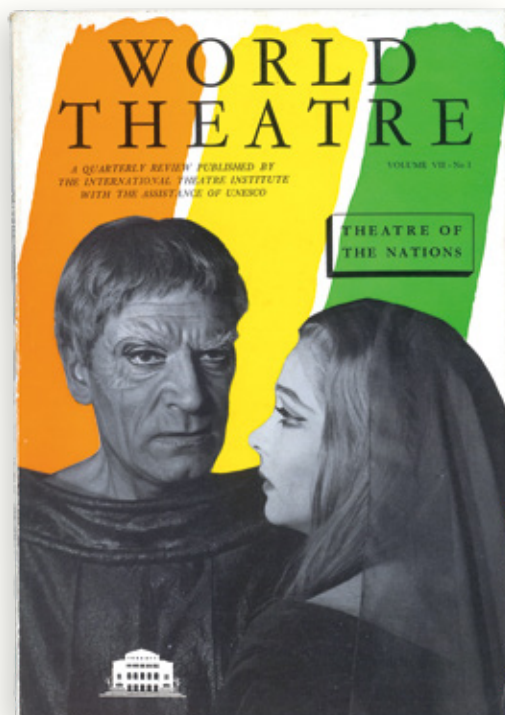
第1回に早くも日本から喜多実率いる能楽団が参加

公演したのは1954年のヴェネツィア・ビエンナーレに引き続き喜多実を団長とする能楽団。リーフレットに「THEATRE DE NO DE TOKYO」と書かれています。また、2年後には日本舞踊の二代目花柳壽輔が参加しています。

フェスティバル・ディレクターのA・M・ジュリアン

A・M・ジュリアン (A.-M. Julien・1903～2001) は、サラ・ベルナル劇場の支配人だった1954年にパリ国際演劇祭を創設。1920年代にジャック・コポーの劇団で俳優として活動し、歌手としても大成功を収めた人物です。

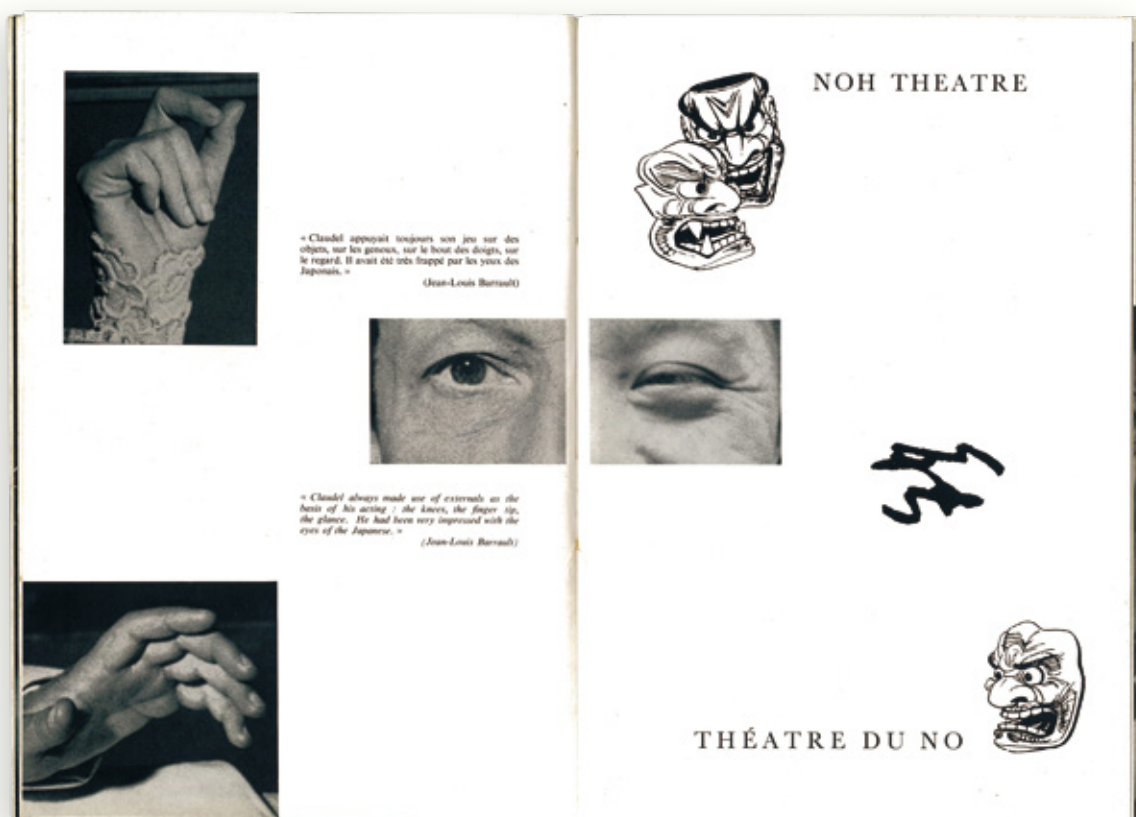
ITI発行『世界演劇』の 「テアトル・デ・ナシオン」特集号(1958)



一九五八年春に発行された『世界演劇』第七巻・第一号は、前年の三月二十七日から七月二十二日に開催された第一回「テアトル・デ・ナシオン」特集号でした。

表紙の写真は、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの前身、ストラトフォード・アポン・エイヴォンのシェイクスピア記念劇団公演『タイタス・アンドロニカス』から、タイタスを演じるローレンス・オリヴィエと娘ラヴィニアを演じるヴィヴィアン・リー。演出はピーター・ブルックです。また、参加公演には演劇だけでなくオペラやバレエも含まれていました。

また、演出家たちの作品についての原稿のほか、哲学者ジャン＝ポール・サルトルによる「古典としてのブレヒト」などの論考も掲載されています。



西洋人と日本人の手と目

10ページにわたる能楽を紹介するページの冒頭。ジャン＝ルイ・バローの言葉が引用されています。「クローデルはいつも膝、指先、視線といったものを演技の拠り所としていた。彼は日本人の目に強い印象を受けていた」。

ナジウム・バマテの能楽論「七分の動き」

能楽についての論考の筆者はナジウム・バマテ (Najm oud-Dine Bammate・1922～1985)。アフガニスタン系フランス人の言語学者、イスラム学者で、ユネスコの「東洋-西洋プロジェクト」のコーディネーターを務めていました。

Paris, rendez-vous des meilleurs metteurs en scène du monde...

TENTER de définir les différentes tendances de la mise en scène en sept ans de Théâtre des Nations, serait vain et fastidieux : du réalisme au baroque et du constructivisme au style épique, tout a défilé sur notre scène. Il serait aussi vain d'accorder la suprématie à un style plutôt qu'à un autre. La preuve est faite que le public se moque d'une mise en scène éblouissante si celle-ci n'est pas le résultat d'une étroite connivence de deux tempéraments : celui de l'auteur et celui de l'artiste qui recrée son œuvre. Il faut ajouter à ceci les remarquables mises en scène chorégraphiques qui nous viennent du théâtre oriental, ainsi que les reconstitutions du théâtre ancien (drame liturgique et comédie italienne) qui sont un enseignement des plus fructueux pour un possible musée de la mise en scène.

les metteurs en scène...

Plus de 200 metteurs en scène ont participé au Festival de Paris et au Théâtre des Nations. Nous ne pouvons citer ici que quelques-uns des metteurs en scène dont les réalisations ont été particulièrement applaudies :

- 1954 Bertolt Brecht : (« Mère Courage »). — Bohdan Korzeniewski : (« Le Mari et la Femme »). — Bojan Stupica : (« Oncle Maroje »). — Gabriel Axel : (« Le Cid »). — Cyril Cusack : (« Le Baladin du Monde Occidental »). — Vershilov : (« Le Golem »).
- 1955 Chao Feng : (Opéra de Pékin). — De Filippo : (« Sacrés Fantômes ! »). — Bertolt Brecht : (« Le Cercle de Craie Caucasiens »). — Alan Schneider : (« La Peau de nos dents »). — Alexis Minotis : (« Héroube », « Edipe-Roi »). — Joan Littlewood : (« Arden de Faversham », « Volpone »). — Alf Sjöberg : (« Mademoiselle Julie »). — Ria Mooney : (« La Charrue et les Étoiles »). — Arvi Kivimaa : (« L'Avare »).
- 1956 Erwin Piscator : (« La Guerre et la Paix »). — Hans Schalla : (« Faust », « Le Diable et le Bon Dieu »). — Luchino Visconti : (« La Locandiera »). — Joan Littlewood : (« Le Brave Soldat Schweik »). — Carl Ebert : (« Les Noces de Figaro », « Così fan Tutte »). — Bianca Gavella : (« La Kavantchina », « Le Prince Igor »). — Basil Coleman : (« Le Tour d'écrout »). — Per-Axel Branner : (« Oncle Vania »). — Joseph Milla : (« La Bonne Ame de Se-Tchouan »).
- 1957 Mladen Sabljic : (« Don Quichotte »). — Erich Engel : (« La Vie de Galilée »). — Hans Schalla : (« L'Opéra de Quat'Sous », « Le Marquis von Keith »). — Erwin Piscator : (« Requiem pour une Nonne »). — Vittoria Gassman : (« Oreste »). — Peter Brook : (« Titus Andronicus »). — Walter Felsenstein : (« Le Petit Renard Intelligent »).
- José Quintero : (« Le Long Voyage dans la Nuit »). — Peter Frye : (« Médée »). — Vachtangov : (« Le Dibbouk »).
- 1958 Luchino Visconti : (« L'Impresario de Smyrne »). — Luis Escobar : (« La Célestine »). — Alexis Minotis : (« Edipe-Roi »). — V.Y. Stanitsyn : (« La Cerisaie »). — Yosif M. Rayevski : (« Les Trois Sœurs »). — M.M. Kedrov : (« Oncle Vania »). — Oskar Walterlin : (« Biedermann et Hertz »). — Heinrich Voigt : (« La Condamnation de Luculus »). — Günther Rennert : (« Le Revizor »). — Alf Sjöberg : (« Le Canard Sauvage »).
- 1959 Johan de Meester : (« Troilus et Cressida »). — Günther Rennert : (« Ariane à Naxos »). — Luchino Visconti : (« Figli d'Arte »). — Joan Littlewood : (« The Hostage »). — Ingmar Bergman : (« Une Saga »). — Walter Felsenstein : (« Les Contes d'Hoffmann »). — Friedrich Schramm : (« Faust »). — Leopold Lindtberg : (« Les Noces de Figaro »). — Tavstonogov : (« La Tragédie Optimiste »). — Burgess Meredith : (« Ulysses »).
- 1960 Karl Heinz Stroux : (« Rhinocéros »). — Flavio Rangel : (« Gimba »). — Günther Rennert : (« Loulou »). — Peter Palitzsch et Manfred Wekwerth : (« Arturo Ui »). — Bertolt Brecht : (« La Mère »). — Eduardo de Filippo : (« Polichinelle à la recherche de la Fortune à Naples »). — Cyril Cusack : (« Le Héros et le Soldat »). — André Voisin : Ensemble du Mail. — Albert Botbol : Ensemble de la Côte d'Ivoire. — Enrique Buenaventura : (« A la Droite de Dieu »).



7回分の演劇祭を紹介するパンフレット (1961)

八年間で公演数は二倍以上、観客数は四倍に

一九六一年のテアトル・デ・ナシオン開催を機に、前身のパリ国際演劇祭がスタートした一九五四年から数えて七回分の演劇祭の概要をまとめたパンフレットが作成されました。

参加国のリストは一九六一年に初参加する七カ国を加えて計四十七カ国を数え、公演数は二百九十五に上りました。また、世界中から参加した公演の主な劇作家、演出家、作曲家、振付家、舞台美術家、俳優、歌手、舞踊家がリストアップされています。

演出家のページには「計二百人以上が参加」とあり、リストのはじめにはベルトルト・ブレント(Berthold Brecht・一八九八―一九五六)の名前が見えます。ブレヒトは第一回のパリ国際演劇祭に『肝っ玉おっ母とその子供たち』で参加し、最優秀作品賞と最優秀演出賞を受賞、この公演で世界的な名声を得ました。

また、一九六一年の演劇祭終了後に出された集計によれば、一九五四年と六年を比べると、参加国数は十二から十九に、劇団数は十二から二十九に、作品数は十二から三十六に、公演回数は四十七から百十二に増え、観客数は約二万五千人から十萬二千八百七十四人と、四倍にもなっています。

テアトル・デ・ナシオンに参加したアーティストたち

ジョーン・リトルウッド
Joan Littlewood(1914～2002)
イギリスの演出家

ピーター・ブルック
Peter Brook (1925～2022)
イギリスの演出家



Peter Brook, auteur de la mise en scène de « Titus Andronicus ».



Joan Littlewood, metteur en scène des spectacles du Théâtre Workshop.

ヴァルター・フェルゼンシュタイン(左)
Walter Felsenstein(1901～1975)
オーストリアの演出家

ジャン＝ルイ・バロー (右)
Jean-Louis Barrault(1910～1994)
フランスの俳優・演出家



Walter Felsenstein à l'issue de la représentation des « Contes d'Hoffmann », reçoit J.L. Barrault.



Maurice Béjart, devant sa troupe, acclamé après la présentation du « Sacre du Printemps ».



Jerome Robbins à son arrivée à Paris.



Anton Dolin, Directeur Artistique du London's Festival Ballet.

エルヴィン・ピスカトール
Erwin Piscator(1893～1966)
ドイツの演出家

イングマル・ベルイマン
Ingmar Bergman(1918-2007)
スウェーデンの映画監督・演出家



Erwin Piscator exposant ses conceptions devant une œuvre comme « La Guerre et la Paix ».



Ingmar Bergman arrivant à Paris.



Luchino Visconti reçoit à l'Hôtel de Ville les félicitations du Président Jean Rémond.

Le Prof. Carl Ebert, Directeur de l'Opéra de Berlin, metteur en scène du « Contes d'Ory », en conversation avec le Dr Günther Rennert, metteur en scène d'« Ariane à Naxos ». (Foto Jose Buhs)
Photos Pic.



ジェローム・ロビンス
Jerome Robbins(1918～1998)
アメリカのダンサー・振付家

ルキノ・ヴィスコンティ
Luchino Visconti(1906～1976)
イタリアの映画監督・演出家

ギュンター・レンネルト(左)
Günther Rennert(1911～1978)
オペラ演出家

カール・エーベルト(右)
Carl Ebert(1887～1980)
ベルリン・ドイツ・オペラ劇場監督・演出家

アントン・ドーリン
Anton Dolin(1904～1983)
イギリスのバレエダンサー・振付家

『国際演劇協会日本センター 小史と名簿 1961』 (1961)

ITI日本センター略史

1948年

大戦後ユネスコの要請によつて全世界の著名な演劇人が集まり、演劇の国際組織を作ることと協議したが、この年の6月、ブラグにおいて、第1回ITI大会が開かれITIを結成する運びになった。この大会には、22カ国の代表団が出席した。この時のセンター数は12（オーストリア、ベルギー、ブラジル、チリ、中華民国、米国、フランス、イタリア、ポーランド、イギリス、スイス、チェコスロヴァキア）。

1949年

7月 チューリッヒにおいて、第2回ITI大会開催。この大会で「世界初演」の形式が確定したほか、国際的な機関誌を創刊することに決定。アンドレ・ジョセ氏新しく事務局長となる。

1950年

6月 パリにて、第3回ITI大会開催。

1951年

この前年（1950年）エジンバラで国際ペン大会が開かれ、当時日本は占領下にあつたにも拘らず、阿部知二、北村喜八両氏が代表として渡欧することを許されたが、北村氏は帰途ITIなる組織のできた事を知り情報を得るために、パリのITI本部を訪れ、事務局長アンドレ・ジョセ氏と会見、その際、日本センターの設立を要望された。帰国後、北村氏は外務省、文部省、日本ペンクラブ、CIE（連合軍総司令部民間情報教育局）など関係者の意向をただしてその設立に着手。

その後川端康成、河竹繁茂、北村喜八、久保田万太郎の四氏が創立世話人として、設立をすすめ、1951年5月24日セントポールにてITI日本センター創立総会を開催。

(2)

創立協賛団体は、外務省、文部省、駐日ユネスコ代表部、日本ペンクラブ・松竹株式会社・各新聞社等22団体。

初代会長 高橋誠一郎

初代理事長 北村 喜八

創立時の理事 32名

続いて6月、オスロで開かれた第4回ITI大会（当時「国際演劇会議」と呼んでいた）に日本代表として久保田万太郎氏が入会に必要な書類（英文）を携えて出席。かくて日本は、戦後初めて国際組織への加入を認められた。日本のユネスコ加盟に先だつこと1年以前である。この時のセンターの数は28であつた。

同大会を機として、世界舞台装置展が弱められたので、日本からも歌舞伎の舞台模型、装置図等を多数航空便で送つた。この舞台装置展は14カ国の参加をみて、大成功を収め、その結果、特に重要な作品を収録して本を出版することとなる。（1956年『世界の舞台装置』としてエルスグイニ書店より刊行されたのは、それ以後の努力の積重ねによる成果である。）

なお、この大会以後大会は隔年に開かれることに決定。

1952年

演劇を通じて広く国際理解をはかるため、ユネスコが提唱し、ITIチューリッヒ大会において、各国がそれぞれの実情に即して自主的に開催するよう決議された「国際演劇月」は、1950年以来、各国センターによつて行われているが、本センターでもこの企画に参加し、この年の3月、第1回国際演劇月を開催した。これには東京及び関西地区の殆んど全ての公演が参加したほか、歌舞伎座において、3月興行初日開演に先立って、国際演劇月開催式典を挙げる。

この式典は、以後毎年行われる。これに出席した人々は高橋本会会長・元ユネスコ国内委員会会長前田多門氏・日本演劇協会会長久保田万太郎氏・松竹会長大谷竹次郎氏などのほか、外務大臣

(3)

国内外の主な出来事

※時系列で掲載／作品名は初演年
A 日本 B 世界 C 日本の舞台芸術 D 世界の舞台芸術

1950 (昭和25)	1949 (昭和24)	1948 (昭和23)
A GHQ、共産党幹部の公職追放を指令／金閣寺が放火で全焼／警察予備隊（自衛隊の前身）設置 B 中ソ友好同盟相互援助条約が締結／ストックホルムIIアピール採択／核兵器廃絶の国際運動始まる／朝鮮戦争が勃発 C 滝沢修、岡倉士朗、宇野重吉らが劇団民藝（第二次民藝）結成／明治座再建開始 D クルト・ヴァイル没（50歳）／E・アイヨネスコ『禿の女歌手』（ニコラ・バタイユ演出）	A 北大西洋条約機構（NATO）調印／ドイツ連邦共和国、ドイツ民主共和国成立／中華人民共和国建国 B 俳優座実験劇場開始／文学座アトリウム公演開始／俳優座が演劇研究所付属養成所を創設 C プレヒトがベルリナ・アンサンブル結成／A・ミラー『セールスマンの死』（エリア・カサン演出）トニー賞演劇作品賞、ピコリア賞他 D GHQ、1ドル＝360円の単一為替レート発表／湯川秀樹博士、日本人初のノーベル物理学賞	A 帝銀事件／極東国際軍事裁判終了 B ガンディー暗殺／イスラエル建国、第一次中東戦争勃発／ソ連がベルリン封鎖を開始／大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国成立／世界人権宣言が国連総会で採択 C 民衆芸術劇場第一回公演／山本安英、木下順一郎との会結成／秋田雨雀ら舞台芸術学院開校／新橋演舞場、名古屋御園座、浅草国際劇場、大阪角座など復興開始 D A・アルト没（52歳）／T・ウィリアムズ『欲望』という名の電車』ピコリア賞受賞

一九五一年に国際演劇協会日本センターが設立されてから十年。一九六一年春に発行された会員名簿の冒頭には、日本センターのそれまでの歩みを振り返る略史が付されています。

前年の十二月には、日本センターの創設に奔走し、設立後は初代理事長として八面六臂の奮闘を続け、当時「日本の演劇の専門家として海外で最も名前の知れた人物」とも言われた演出家・劇作家の北村喜八が亡くなり、そのこともこの「略史」をまとめるきっかけとなったことは想像に難くありません。

「略史」はユネスコの要請によりフランス・パリに国際演劇協会が発足した一九四八年から始まっています。当時の各国センターの数は十二。三年後には日本センターが加わり、一九六一年には四十一カ国にまで増えていました。

「略史」のあとは当時の日本センターの会員名簿になっており、会長以下の役員百二十三名の役員と会員三百一名、十九の団体会員が名を連ねています。

或いは文部大臣出席して祝辞をのべ、参加劇団の俳優、アメリカ大使館文化アタッシェ、マーガレット・ウィリアムズ女史、続いてグレン・ショウ氏、グレン・ショウ氏は日本語で話し、芝居がかったジェスチャーによつて、大いににぎやかな空気をかもしだした。

又、本会並びに毎日新聞共催によりITI各国センターから資料を仰いで、現代世界舞台写真展を日本橋三越で開いた。各国から送られた豊富な新しい材料によつて、戦後初めて見るけんらんたる展示会となつた。このほか、三越劇場において「国際演劇の現状」と題する講演会を開催。講師は菅原卓・倉橋健・内村直也・鈴木力衛・木下順二の各氏、主催は東京都教育庁。

ユネスコでは、芸術家の自由を保護するために、世界の芸術各分野を網羅する「国際芸術家会議」を9月にヴェニスで開いたがこの企画に参加したITIでも「演劇の現状とその発展を阻む障碍」を討議する為の「劇作家会議」をその直前に開いた。日本からは代表として内村直也・吉川義雄の両氏出席。

ITI名誉会長J・B・ブリストリー氏は朝日新聞社の招きで10月日本を訪れた。このため本会では、日本ペンクラブと共同主催で、一行の歓迎宴を、芝白金の般若苑で開き、折柄在日中の仏人舞踊家セルジュー・リファール氏一行、及び、英国のバレリーナ、ソニード・アロヴァ嬢を同時に招待した。この日は山田耕祐・市川猿之助・花柳春輔の各氏を初めとして、文学、舞台芸術、ジャーナリズム各方面の多彩な顔ぶれが見られ、きわめて盛会であり、川端康成氏の挨拶に続き、古垣鉄郎氏が本会副会長として英語で簡単な歓迎の辞をのべた。

1953年

第2回国際演劇月の一環として、3月4日（歌舞伎座3月興行2日目）の晩、在日外人を対象とした歌舞伎特別鑑賞会が、本会

(4)

並びにニッポンタイムズ共催で開かれた。場内は殆んど外人客のみで満員となつたが、観客の中にはカナダ大使夫妻、スイス公使、スウェーデン公使をはじめ、米国外務省高官連、在日米軍高級将校なども見と、数少ない日本人観客としては朝日新聞社長夫妻、外務大臣夫妻も交つて華やかな雰囲気をかもし出していた。又、3月3日から8日まで、日本橋高島屋地階では、毎日新聞主催による舞台写真展が開かれ、日本演劇の写真を中心とし、歌舞伎の衣裳、小道具などを展示したほか、米仏などの新しい舞台写真も飾られた。

この年、本会では、第1回国際演劇月に参加した舞合を中心集めた写真に英文の解説を附して英文写真帖を刊行し、ITI各国センター、ユネスコ各国委員会、世界の著名な演劇人、在外日本公館などに配布して好評を得た。

6月 ハーグにて第5回ITI大会開催、日本代表として宮田重雄・吉田謙吉両氏出席。

1954年

テレビや映画の発達にともなつて起つてきた種々の問題に対応するための国際演劇専門家会議が、5月、シンシリー島のバレモで開かれ、日本からはオブザーヴァーとして在パリの朝吹登水子氏が出席。

この年より我国の国際演劇月には従来参加していた専門演劇の分野のみならず、素人演劇も参加することになったため、学生演劇の便宜を考えて、これ以後国際演劇月の期間は5月に変更。この年の演劇月の特色としては、毎日新聞主催「東京都高等学校演劇発表会」（一ツ橋講堂）、読売新聞主催「読売児童演劇コンクール」（読売ホール）などの参加のほか、丸善ホールに於て、本会と文化懇話会との共催による「海外演劇文化の集い」を開き、英米

(5)

1954 (昭和29)

- A 日本がユネスコ加盟／サンフランシスコ平和条約および日米安全保障条約調印
- B 歌舞伎座復興開場／帝劇第一回ミュージカルズ「モルガンお書」／ムーラン・ルージュ新宿座開館／加藤道夫「なよたけ抄」(第五郎劇団)／三好十郎「炎の人」(民藝)
- C イヨネスコ「授業」／J・P・サルトル「悪魔と神」
- D サンフランシスコ平和条約発効、日本は独立を回復(沖繩・奄美・小笠原は除く)／メーデー事件／国際通貨基金(IMF)加盟
- E 韓国、李承晩ラインを設定／エジプト革命勃発
- F オペラ「夕鶴」(團伊玖磨作曲)／三島由紀夫、近代能楽集「綾の鼓」(俳優座)／卒塔婆小町(文学座)／日劇ミュージックホール開場／青俳結成／藤原歌劇団「蝶々夫人」で初の海外公演(NY)
- G ANHKがテレビ本放送開始／衆議院「バカヤロー解散」／奄美大島が米から日本に返還
- H 中国が第一次五カ年計画開始／スターリン死去／朝鮮戦争休戦協定締結／米韓相互防衛条約締結
- I 杉村春子主演で『欲望』という名の電車／日本初演(文学座)
- J S・ベケット「ゴドーを待ちながら」／A・ミラー「るつぼ」／トニー賞／E・オニール没(65歳)
- K 米水爆実験で第五福竜丸被曝／自衛隊発足／青函連絡船洞爺丸沈没
- L 第一次インドシナ戦争終結
- M 劇団四季旗揚げ公演／岸田國士没(63歳)／滝沢修主演で『ザ・スランの死』日本初演(民藝)／『新劇』創刊／俳優座劇場開場／三期会(現・東京演劇アカデミー)設立／新人会設立／俳優座こどもの劇場「森は生きている」／能楽初の海外公演(ウエネツィア・ビエンナーレ)／手織座旗揚げ公演／青年座旗揚げ公演
- N T・ラティガン「銘々のテーブル」／ブレイヒット「コーカサスの白黒の輪」

1953 (昭和28)

- A NHKがテレビ本放送開始／衆議院「バカヤロー解散」／奄美大島が米から日本に返還
- B 中国が第一次五カ年計画開始／スターリン死去／朝鮮戦争休戦協定締結／米韓相互防衛条約締結
- C 杉村春子主演で『欲望』という名の電車／日本初演(文学座)
- D S・ベケット「ゴドーを待ちながら」／A・ミラー「るつぼ」／トニー賞／E・オニール没(65歳)
- F 米水爆実験で第五福竜丸被曝／自衛隊発足／青函連絡船洞爺丸沈没
- G 第一次インドシナ戦争終結
- H 劇団四季旗揚げ公演／岸田國士没(63歳)／滝沢修主演で『ザ・スランの死』日本初演(民藝)／『新劇』創刊／俳優座劇場開場／三期会(現・東京演劇アカデミー)設立／新人会設立／俳優座こどもの劇場「森は生きている」／能楽初の海外公演(ウエネツィア・ビエンナーレ)／手織座旗揚げ公演／青年座旗揚げ公演
- I T・ラティガン「銘々のテーブル」／ブレイヒット「コーカサスの白黒の輪」

1952 (昭和27)

- A NHKがテレビ本放送開始／衆議院「バカヤロー解散」／奄美大島が米から日本に返還
- B 中国が第一次五カ年計画開始／スターリン死去／朝鮮戦争休戦協定締結／米韓相互防衛条約締結
- C 杉村春子主演で『欲望』という名の電車／日本初演(文学座)
- D S・ベケット「ゴドーを待ちながら」／A・ミラー「るつぼ」／トニー賞／E・オニール没(65歳)
- F 米水爆実験で第五福竜丸被曝／自衛隊発足／青函連絡船洞爺丸沈没
- G 第一次インドシナ戦争終結
- H 劇団四季旗揚げ公演／岸田國士没(63歳)／滝沢修主演で『ザ・スランの死』日本初演(民藝)／『新劇』創刊／俳優座劇場開場／三期会(現・東京演劇アカデミー)設立／新人会設立／俳優座こどもの劇場「森は生きている」／能楽初の海外公演(ウエネツィア・ビエンナーレ)／手織座旗揚げ公演／青年座旗揚げ公演
- I T・ラティガン「銘々のテーブル」／ブレイヒット「コーカサスの白黒の輪」

1951 (昭和26)

- A NHKがテレビ本放送開始／衆議院「バカヤロー解散」／奄美大島が米から日本に返還
- B 中国が第一次五カ年計画開始／スターリン死去／朝鮮戦争休戦協定締結／米韓相互防衛条約締結
- C 杉村春子主演で『欲望』という名の電車／日本初演(文学座)
- D S・ベケット「ゴドーを待ちながら」／A・ミラー「るつぼ」／トニー賞／E・オニール没(65歳)
- F 米水爆実験で第五福竜丸被曝／自衛隊発足／青函連絡船洞爺丸沈没
- G 第一次インドシナ戦争終結
- H 劇団四季旗揚げ公演／岸田國士没(63歳)／滝沢修主演で『ザ・スランの死』日本初演(民藝)／『新劇』創刊／俳優座劇場開場／三期会(現・東京演劇アカデミー)設立／新人会設立／俳優座こどもの劇場「森は生きている」／能楽初の海外公演(ウエネツィア・ビエンナーレ)／手織座旗揚げ公演／青年座旗揚げ公演
- I T・ラティガン「銘々のテーブル」／ブレイヒット「コーカサスの白黒の輪」

『国際演劇協会日本センター 小史と名簿 1961』 (1961)

仏三国の演劇事情を、フィルム、レコード、写真等によつて紹介したことや、本会提供の海外ラジオ・ドラマをラジオ東京から放送したこと、国際演劇月委員脚本集の出版などが挙げられる。

7月 米國からジョン・ミツチエル博士の引率する演劇研究旅行団の一行十名が来日、三週間程滞在し、本会をはじめ各方面の協力により、各種の演劇、及び茶道、陶芸などに接して行つた。

ヴェニスで隔年に8月頃開かれる国際演劇祭に本会のあつせんによつて日本から能楽が参加し、喜多実・観世喜之両氏を中心とする一行十七名の渡欧能楽団は、彼地の屋外劇場で、夜間「葵上」、「石橋」その他を上演、好評を博した。之は能楽の歴史にとつて初めての出来事である。

1955年

6月 第6回ITI大会がユーゴのドウブロヴニクで開かれ、日本からは代表として北村喜八理事長出席。この大会では、チェリツヒ大会以来懸案の「諸国民の劇場」設置が決定し、その場所としては、毎年パリ国際演劇祭を開催していたサラ・ベルナール座を当てることになった。

パリのフランス放送局では7月、本会あつせんの北条秀司作・宮城道雄音楽によるラジオ・ドラマ「狐と笛吹き」を放送した。

1956年

この年は本会創立5周年に当り、又、イブセン死後50年に当るので、第5回国際演劇月はこの2つの記念をかねて行われた。

恒例の開催式典を皮切に、各分野の演劇がこの企画に参加したほかイブセンにちなんで舞台写真展を歌舞伎座別館で開き、国内は勿論、広く海外より豊富な資料を集めて一般の観覧に供した。

例年、本会並びに文化懇話会主催で開く、海外演劇紹介の会は、3回にわたつて丸善ホールで開かれ、うち1回は特に「イブ

(6)

センを偲ぶ講演会」とした。当日はノルウエー公使ハースレブ・フオクト氏を始め、柳田国男・正宗白鳥・前田暁各氏の講演があった。

又、本会創立5周年を記念しての国際交歓パーティが、国際文化会館で開かれ、ノルウエー公使館、アメリカ大使館、英国文化振興会などの関係者を始めとする在日外国文化人が出席。日本側は、本会関係者多数が出席、きわめて盛会であつた。なお当夜は余興として 歌舞伎女形の扮装や、下座音楽の実演などが行われた。

第1回ITI世界会議 10月 ボンベイにて開かれ、日本代表として青江舜二郎氏出席。アジアにおけるITIの活動をより活発ならしめるために、アジア演劇研究所を設立することを決議。(1958年1月ニューデリーにおいて設立さる)。

11月 パリのサラ・ベルナール座支配人A・M・ジュリアン氏は、ボンベイの世界会議からの帰途日本に立寄り、本会並びに松竹のあつせんにより、各種の演劇を見て帰国した。

1957年

国際演劇月の一環として、第一回海外ドラマ・シリーズ連続公演(毎日新聞社後援)、を神田一ツ橋講堂にて開催。この催しには、七曜会・現代座・四季・作品座・仲間の五劇団が参加して好評だった。又、早稲田・東大・立教・学習院・外語大・慶応の6大学の参加による第1回大学演劇合同発表会(朝日新聞社後援)を開いたが、これも好評だった。ほかに読売児童演劇祭も例年通り行われた。なお、この年の国際演劇月開催式典は、東京(歌舞伎座)と大阪(新歌舞伎座)の二カ所で行われた。

7月 アテネにて第7回ITI大会開催。日本代表として飯沢匡氏出席。本大会では、翌年秋にラテンアメリカ会議を開くことを決議。メキシコ代表団は、ITIの支部として「ラテンアメリ

(7)

1958 (昭和33)	1957 (昭和32)	1956 (昭和31)	1955 (昭和30)
A 自由民主党結成、五十五年度体制始まる B アインシュタイン没(76歳)／アジアリフリカ会議開催／ワルシャワ条約機構が成立 C 芥川比呂志主演「ハムレット」(文学座)／「都民劇場」財団法人設立／安部公房「どれいけり」(俳優座)／アーニー・パイル劇場返還、東京宝塚劇場として新装開場／加藤道夫「なよたけ」(文学座) 完全上演 D ウィリアムズ「熱いタン屋根の上の猫」ピョリツァー賞 E 経済白書に「もはや戦後ではない」／日ソ共同宣言調印、国交正常化／日本が国際連合に加盟 F スターリン批判／ハンガリー動乱勃発／第二次中東戦争勃発 G テアトロン賞設置／小山祐士「二人だけの舞踏会」(俳優座)／秋浜悟史「英雄たち」(早大劇団自由舞台)／新劇団協議会発足／青山杉作没(67歳)／テアトル・エコー発足／新宿、梅田コマ劇場開場 H オズボーン「夜への長い旅路」／「オズボーン」怒りを込めてふり返れ／フレヒト没(58歳) I ソ連が人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功 J 小林三三没(84歳)／芸術座開場／関西芸術座結成／狂言初の海外公演(パリ国際演劇祭)／砂防会館ホール開場／日本俳優協会発足 K ポルト「花咲くチェリー」 L 東京タワー完成 M 欧州経済共同体、欧州原子力共同体発足／米が人工衛星の打ち上げに成功／中国で人民公社設立開始 N 東京宝塚劇場焼失／久保菜保没(58歳)／フエスティバルホール開館／矢代静一「国姓爺」(文学座)／安部公房「幽霊はここに」(俳優座)／三好十郎没(56歳)／モスクワ芸術座初来日／ジロドゥ「オンディーヌ」日本初演(四季)／日本新劇俳優協会発足 O E・オルビー「動物園物語」	A 自由民主党結成、五十五年度体制始まる B アインシュタイン没(76歳)／アジアリフリカ会議開催／ワルシャワ条約機構が成立 C 芥川比呂志主演「ハムレット」(文学座)／「都民劇場」財団法人設立／安部公房「どれいけり」(俳優座)／アーニー・パイル劇場返還、東京宝塚劇場として新装開場／加藤道夫「なよたけ」(文学座) 完全上演 D ウィリアムズ「熱いタン屋根の上の猫」ピョリツァー賞 E 経済白書に「もはや戦後ではない」／日ソ共同宣言調印、国交正常化／日本が国際連合に加盟 F スターリン批判／ハンガリー動乱勃発／第二次中東戦争勃発 G テアトロン賞設置／小山祐士「二人だけの舞踏会」(俳優座)／秋浜悟史「英雄たち」(早大劇団自由舞台)／新劇団協議会発足／青山杉作没(67歳)／テアトル・エコー発足／新宿、梅田コマ劇場開場 H オズボーン「夜への長い旅路」／「オズボーン」怒りを込めてふり返れ／フレヒト没(58歳) I ソ連が人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功 J 小林三三没(84歳)／芸術座開場／関西芸術座結成／狂言初の海外公演(パリ国際演劇祭)／砂防会館ホール開場／日本俳優協会発足 K ポルト「花咲くチェリー」 L 東京タワー完成 M 欧州経済共同体、欧州原子力共同体発足／米が人工衛星の打ち上げに成功／中国で人民公社設立開始 N 東京宝塚劇場焼失／久保菜保没(58歳)／フエスティバルホール開館／矢代静一「国姓爺」(文学座)／安部公房「幽霊はここに」(俳優座)／三好十郎没(56歳)／モスクワ芸術座初来日／ジロドゥ「オンディーヌ」日本初演(四季)／日本新劇俳優協会発足 O E・オルビー「動物園物語」	A 自由民主党結成、五十五年度体制始まる B アインシュタイン没(76歳)／アジアリフリカ会議開催／ワルシャワ条約機構が成立 C 芥川比呂志主演「ハムレット」(文学座)／「都民劇場」財団法人設立／安部公房「どれいけり」(俳優座)／アーニー・パイル劇場返還、東京宝塚劇場として新装開場／加藤道夫「なよたけ」(文学座) 完全上演 D ウィリアムズ「熱いタン屋根の上の猫」ピョリツァー賞 E 経済白書に「もはや戦後ではない」／日ソ共同宣言調印、国交正常化／日本が国際連合に加盟 F スターリン批判／ハンガリー動乱勃発／第二次中東戦争勃発 G テアトロン賞設置／小山祐士「二人だけの舞踏会」(俳優座)／秋浜悟史「英雄たち」(早大劇団自由舞台)／新劇団協議会発足／青山杉作没(67歳)／テアトル・エコー発足／新宿、梅田コマ劇場開場 H オズボーン「夜への長い旅路」／「オズボーン」怒りを込めてふり返れ／フレヒト没(58歳) I ソ連が人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功 J 小林三三没(84歳)／芸術座開場／関西芸術座結成／狂言初の海外公演(パリ国際演劇祭)／砂防会館ホール開場／日本俳優協会発足 K ポルト「花咲くチェリー」 L 東京タワー完成 M 欧州経済共同体、欧州原子力共同体発足／米が人工衛星の打ち上げに成功／中国で人民公社設立開始 N 東京宝塚劇場焼失／久保菜保没(58歳)／フエスティバルホール開館／矢代静一「国姓爺」(文学座)／安部公房「幽霊はここに」(俳優座)／三好十郎没(56歳)／モスクワ芸術座初来日／ジロドゥ「オンディーヌ」日本初演(四季)／日本新劇俳優協会発足 O E・オルビー「動物園物語」	A 自由民主党結成、五十五年度体制始まる B アインシュタイン没(76歳)／アジアリフリカ会議開催／ワルシャワ条約機構が成立 C 芥川比呂志主演「ハムレット」(文学座)／「都民劇場」財団法人設立／安部公房「どれいけり」(俳優座)／アーニー・パイル劇場返還、東京宝塚劇場として新装開場／加藤道夫「なよたけ」(文学座) 完全上演 D ウィリアムズ「熱いタン屋根の上の猫」ピョリツァー賞 E 経済白書に「もはや戦後ではない」／日ソ共同宣言調印、国交正常化／日本が国際連合に加盟 F スターリン批判／ハンガリー動乱勃発／第二次中東戦争勃発 G テアトロン賞設置／小山祐士「二人だけの舞踏会」(俳優座)／秋浜悟史「英雄たち」(早大劇団自由舞台)／新劇団協議会発足／青山杉作没(67歳)／テアトル・エコー発足／新宿、梅田コマ劇場開場 H オズボーン「夜への長い旅路」／「オズボーン」怒りを込めてふり返れ／フレヒト没(58歳) I ソ連が人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功 J 小林三三没(84歳)／芸術座開場／関西芸術座結成／狂言初の海外公演(パリ国際演劇祭)／砂防会館ホール開場／日本俳優協会発足 K ポルト「花咲くチェリー」 L 東京タワー完成 M 欧州経済共同体、欧州原子力共同体発足／米が人工衛星の打ち上げに成功／中国で人民公社設立開始 N 東京宝塚劇場焼失／久保菜保没(58歳)／フエスティバルホール開館／矢代静一「国姓爺」(文学座)／安部公房「幽霊はここに」(俳優座)／三好十郎没(56歳)／モスクワ芸術座初来日／ジロドゥ「オンディーヌ」日本初演(四季)／日本新劇俳優協会発足 O E・オルビー「動物園物語」

『小史』の最後は、一九六一年二月、新理事長に吉川義雄が選出されたことで締められています。演出家・芸能評論家の吉川義雄（一九〇七〜一九八四）は、一九五三年にNHKがテレビ放送を開始した年に初代テレビ局長に就任し、テレビの黎明期を担いました。

しかし、理事長就任の二年後の一九六三年に病に倒れたこともあり、牽引力を失ったITI日本センターの活動は徐々に滞っていったようです。機関誌「ITI通信」は北村喜八の訃報を伝える三十一号（一九六一年九月発行）のあと発行が途絶え、一九六五年十月に三十二号が発行されたのを最後に、次の発行は五年以上がたった、一九七一年三月の復刊第一号を待たなければなりませんでした。

そして一九七一年からは、日本の現代演劇——劇団青年座、演劇実験室天井棧敷、結城人形座——をフランスのナンシー国際演劇祭へ紹介するなど、国際演劇協会日本センターの新たな一時代がはじまるのです。

力演劇研究所」を南米に設けることを提案、可決された。

1958年

2月 パリ本部事務局長は、アンドレ・ジヨセ氏よりジャン・ダルカント氏に代った。

前年のアテネ大会における決議に基づき、ITIでは「20世紀世界劇文学史」、「20世紀劇作家辞典」、「世界戯曲選集」等の出版を計画、その資料として、我国からも20名程の代表的な劇作家のリストを送るよう要請してきたので、本会では慎重に検討した結果27名の劇作家を選び、その略歴と代表作の解説とを附したリストを作ってITI編集部に送った。

第7回国際演劇月、例年通り歌舞伎座における開催式典で幕が開き、前年に引続いて若手新劇団参加による海外ドラマシリーズ、大学演劇合同発表会、読売児童演劇祭、海外演劇文化紹介の集い等が行われたが、とりわけ目立つたのは、13大学が参加して12日間19回の公演を行なった大学演劇の成果であった。演目は、ラシーヌ、モリエールの古典劇から、インジ、アヌイの現代劇までを含みその上、米・英・仏からスペイン、イスラエルに亘る国際色豊かなものであり、まことにこの企画にふさわしいものであった。中でも、外語大の上演した「荘園の少女」は、イスラエルの現代劇を自分たちの手で訳して紹介したものであり、大きな収穫であったといえよう。

1959年

6月 ヘルシンキにて、第8回ITI大会開催。日本代表として吉田謙吉氏出席。この大会で新しく加盟を認められたソ連、東独、ルーマニアの三国、再加入の中華民国を加えて、この時のセンター数は39。なおこの大会における執行委員国（定数11カ国）一部改選で日本がその一員に選ばれ、本会理事会で協議の結果、

(8)

北村喜八理事長を執行委員に指名した。

数年前よりITIが編集していた8カ国語（英・米・仏・独・伊・西・和・瑞）による「国際演劇用語辞典」が、この年の秋ブリエツセルのエルスヴィエ書店より刊行された。

1960年

毎年、多大の成果を収めている大学演劇合同発表会もこの年で4回目を迎えた。参加校は21大学に及び、例年通り神田一ツ橋講堂において16日間23回という長期公演を行なった。都内の主要大学は殆んど全てこの企画に参加していることになる。

国際演劇月の一環として、毎年読売新聞社が主催する読売児童演劇祭も9回を数え、毎年10劇団内外の参加を得てますます順調な歩みを続けている。日頃舞台に接する機会に恵まれない日本の子供達に、少しでも多く、良い芝居を見てもらおうと努力しているこれら児童劇団の地道な活動は、高く評価されてよいであろう。

例年行われている国際演劇月に前年度より新しく加わった企画として、この年に参加したラジオ・ドラマ、テレビ・ドラマのうちから、優秀な作品を選んで海外へ紹介する企画があるが、（前年度は該当作がなく見送り）この5月、日本教育テレビが放送した富士峻作「命令」は優秀作品であったので本会審査員が審査の結果、これを英訳して海外に紹介する最初の作品としてとり上げることに決定。

12月 本会の創立者であり、創立以来の理事長であった北村喜八氏は、27日肺癌のため死去。

1961年

2月 北村喜八氏の後任として、吉川義雄氏が理事長に選ばれた。

(9)

＜参考資料＞

新国立劇場情報センター「要点」日本演劇史年表（2020）／国立国会図書館「史料にみる日本の近代」（2010）／第一学習社「グローバルワイド最新世界史図表」（2023）ほか

1961（昭和36）

- 東大ギンシア悲劇研究会「アガメムノン」／石川淳「おまへの敵はおまへだ」／森光子主演、菊田一夫脚本「放浪記」／鈴木忠志 別役実新劇団自由舞台（後の早稲田小劇場）結成
- ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（RSC）設立／ハイナー・ミラー、東独作家同盟から除名
- ケネディ米大統領就任／ソ連が人類初の有人宇宙飛行／東ドイツがベルリンの壁構築
- A・カミュ没（46歳）

1960（昭和35）

- 三島由紀夫「熱帯樹」／文学座／俳優小劇場（併・結成）／ジャール・イ・パロー来日／ベケット「ゴドーを待ちながら」／安堂信也訳・演出 日本初演（文学座）／寺山修司「血は立つたま眠っている」（四季）／清水邦夫「明日そこに花を挿そうよ」／青柳秋元松代「常陸坊海尊」／宮本研「日本人民共和国」／職場演劇合同公演
- B コンゴ動乱勃発／アフリカで十七の国が独立／石油輸出機構設立
- A 新日米安全保障条約調印／安保闘争で東大生死亡／カラーテレビ放送開始／社会党浅沼委員長刺殺／国民所得増進計画が閣議決定
- D ビンター「ダムウェイター」／グロトフスキ実験劇場創設／オールビー「動物園物語」／ウエスカー「調理場」

1959（昭和34）

- A 皇太子ご成婚パレード
- B キューバ革命／国連で児童権利宣言採択
- C 岡倉士朗没（50歳）／東京芸術座発足／田中千夫「マリアの首」／（新入会）／土方与志没（61歳）／安部公房作ミュージカル「可愛い女」／大阪労苦／東宝「あめつち奴」二百七十日のロングラン／劇団青年芸術劇場（書誌）結成



本書は、クラウドファンディング・ネットワーク MOTION GALLERY を通して
「国際演劇協会日本センター（1951年創設）初期資料の復刻プロジェクト」に寄せられた資金によって作成されました。
ご寄付をいただいたすべての皆さまに心から感謝申し上げます。

発行協力：公益社団法人 日本演劇興行協会

本資料集に図版として掲載した資料は
「復刻資料集」として国際演劇協会日本センターのウェブサイトで公開しています。



Historical Documents of the Japanese Centre of the International Theatre Institute 国際演劇協会 日本センター 復刻資料集 1951 ~ 1961

発行日	2025年8月29日
発行者	公益社団法人 国際演劇協会日本センター 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内 Tel: 03-3478-2189 Fax: 03-3478-7218 admin@iti-japan.or.jp http://iti-japan.or.jp
事業担当理事	曾田修司（国際演劇協会日本センター事務局長）
編集・文	中島香菜
装幀・本文デザイン	久保さおり
製版	（有）友美堂
印刷	（株）三協社
製本	（株）ウィンカム
表紙	アルレッキーノ（1959年に国際演劇協会本部が発行した活動紹介パンフレットより）

本資料集に掲載した図版等について、撮影者や著作権継承者、肖像権保有者の消息が不明で許可を得ることができないまま収録したものがあります。
お気づきの方は弊センター宛にご連絡ください。
本冊子の複製、転載、引用等の際は、発行者までご連絡ください。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

© Japanese Centre of International Theatre Institute 2025

Printed in Japan

Historical Documents of the Japanese Centre of the International Theatre Institute

公益社団法人 国際演劇協会日本センター